### 宮城県文化財調査報告書第81集

# 東北自動車道遺跡調査報告書 V

昭和 56年6月

宮城県教育委員会日 本 道 路 公 団

本県は、豊かな自然環境に恵まれ、数多くの文化遺産が残されております。 これらの文化財は、私達の祖先が長い歴史の中で創造し育んできたものであ り、これを愛護し活用するとともに、後世に伝えていくことが私達の重要な責 務であると考えております。

近年、地域の開発事業が進展するのに伴ない、埋蔵文化財の保護保存が重要 視されてきています。

国土開発幹線自動車道建設法に基づき建設中の東北自動車道川ロー青森線は、 現在全路線 679.5 kmの 85%にあたる 576.2 kmが供用されるにいたり、工事は最終 段階に入っています。

宮城県内での全線開業は、昭和53年12月2日であり、そのルートは仙台平野を南北に縦貫し、131.9kmと全長の20%弱の距離ではありますが、この自動車道建設の事業に関連した遺跡は52遺跡を数えました。宮城県教育委員会では、日本道路公団仙台建設局の委託によって、昭和45年度から53年度まで9カ年間の発掘調査を実施するとともに、終了後は引続いて遺物の整理と報告書の刊行に努めてまいりました。

本報告書は、東北自動車道遺跡調査報告書の第5冊目として、植田前遺跡・家老内遺跡・宮城館跡・下原田遺跡・東山遺跡・東足立遺跡・日光山遺跡・鶴の丸館跡の8遺跡について、調査成果をとりまとめたものであります。

本書を刊行するに当たり、調査以来長い期間にわたって御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝の意を表するとともに、本書が広く社会教育や学術研究の場で役立つことを切に念願するものであります。

昭和 56 年 6 月

宮城県教育委員会

教育長 北 村 潮

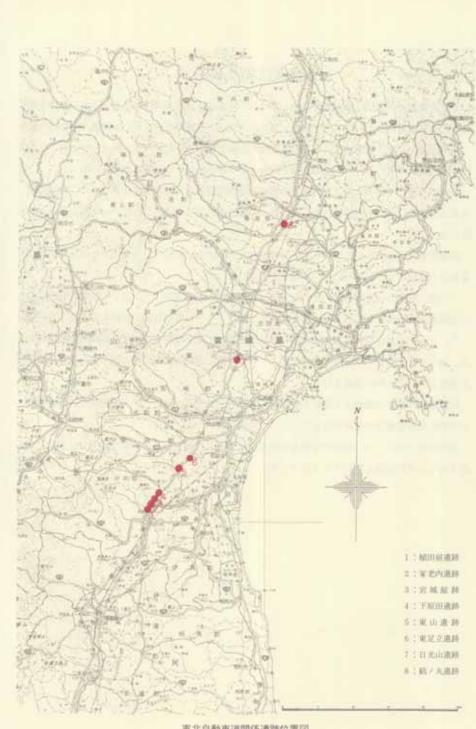
## 目 次

(1)	植田前遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• 3
(2)	家老内遺跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	41
(3)	宮城館跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	95
(4)	下原田遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	119
(5)	東山遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	135
(6)	東足立遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	185
(7)	日光山遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	281
(8)	鶴ノ丸遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	353

### 例 言

- 1. 本書は、東北自動車道関係遺跡発掘調査報告書第5冊目として、8遺跡の調査成果をまと めたものである。
- 2. 調査の主体者は、宮城県教育委員会、日本道路公団である。
- 3. 発掘調査は、宮城県教育庁文化財保護課(昭和45年度分は社会教育課、昭和46・47年度分 は文化財保護室)が担当し、関係各市町村教育委員会、調査協力員、学生補助員の方々と関 係機関に協力をいただいた。
- 4. 調査および整理に関しては、東北大学考古学研究室の御指導をいただき東北歴史資料館、 宮城県多賀城跡調査研究所の協力を得た。
- 5. 報告書作製に際しては、石器の材質同定は東北大学助教授 蟹沢聡史氏にお願いした。ま た東北歴史資料館の藤沼邦彦氏、多賀城跡調査研究所の白鳥良一氏および高野芳弘氏には内 容について協力を得た。
- 6. 国土地理院発行の地形図を複製したものには、図中に図名と縮尺を記した。
- 7. 整理、報告書の作成は、文化財保護課が担当し、各遺跡の整理、執筆は課員の検討を経て 次のとおり分担して行った。なお下原田遺跡は遺物について整理・執筆し、他は概報(県報 告第24集)を再録した。

  - (1) 植田前遺跡 加藤道男 (5) 東山遺跡 真山 悟
  - (2) 家老内遺跡——真山 悟
    - (6) 東足立遺跡 ── 黒川利司
  - (3) 宮城館跡 狩野正昭
- (7) 日光山遺跡 斉藤吉弘
- (4) 下原田遺跡 森 貢喜
- (8) 鶴ノ丸遺跡 手塚 均
- 8. 各遺跡の内容は、すでにその一部が現地説明会資料、調査概報、調査略報等によって公表 されているが、本書の内容がそれらに優先する。
- 9. 上記遺跡の出土遺物および実測図、写真等の諸資料は、東北歴史資料館へ移管し保存、活 用をはかることにしている。



東北自動車道関係遺跡位置図

### 調査に至る経過

東北自動車道の建設に係る遺跡に関しては、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」等にもとづき、宮城県教育委員会が調査にあたった。

自動車道の計画予定路線は、昭和42年5月に仙台市以南の発表があり、昭和44年6月から昭和45年11月までの間に、4回にわたって仙台市から岩手県境までの路線が発表された。

教育委員会は、昭和 42 年に東北縦貫自動車道遺跡緊急調査対策委員会を発足させ、路線敷の 分布調査を急いだ。その結果確認した遺跡は、仙台市以南で23 遺跡、以北で28 遺跡の合計51 遺跡に達した。

発掘調査は、昭和 45 年2月から上記の対策委員会を中心に開始されたが、4月に入り県教育委員会の直営とし、最終の昭和53 年度まで実施した。

この間、昭和49年度の古川市愛宕山遺跡(宮沢遺跡)の調査中に、公団から同遺跡周辺丘陵の土取計画が協議されて翌50年度に発掘調査したところ、古代城柵官衙遺跡であることが判明した。そのため文化庁・日本道路公団との協議を重ねて遺跡保存を検討し、路線敷は精査のうえ、施工方法や設計の変更等を行なうとともに、土取計画部分一帯は昭和51年7月13日、「宮沢遺跡」として史跡に指定された。

関連遺跡は調査の過程で1遺跡を追加して最終的に52遺跡となったが、昭和53年8月栗原郡 志波姫町御駒堂遺跡の発掘調査をもって、全遺跡について完了した。

遺物整理については、昭和54年度から58年度までの5年間で行なう計画で実施しており、引続き第6分冊目以降を刊行する予定である。

(1) 植 田 前 遺 跡

### 目 次

I	遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
П	調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
Ш	発見された遺構と遺物・・・・・・・・14
	第1溝状遺構・・・・・・・・・・・・14
	第 2 溝状遺構 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
	<b>堆積層出土および層位不明の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・</b>
IV	考 察
	1. 出土遺物について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
6	2. 遺構について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

### 調査要項

遺跡所在地:宮城県白石市福岡深谷字植田前

遺跡記号: UD (宮城県遺跡地名表登載番号: 02071)

調 査 期 間:昭和46年5月17日~6月16日、7月10日~7月20日

調 査 面 積:約10,000 ㎡ 発 掘 面 積:約1,963 ㎡ 調 査 員:文化財保護室

志間泰治 氏家和典 藤沼邦彦 佐々木安彦 加藤道男

調査補助員:七戸貞子

### I. 遺跡の位置と環境

### 1. 自 然 環 境

遺跡は白石市福岡深谷字植田前に所在し、国鉄白石駅の北方約4kmにあたる。

白石市周辺の地形を概観すると、西方には奥羽山地が横たわり、その山麓帯にあたる南西部には二井宿山地が、北西部には蔵王火山地とさらにそれから続く青麻山を中心とした小起伏火山地がある。また北部には高館丘陵がせまり、東部には阿武隈山地帯がひかえている。これらの山地、丘陵間には白石川・斉ヶ川・松川等の河川によって、細長い低地が形成されており、それは大きく南・中央・北の三地域に分かれる。

南部は斉ヶ川流域である。斉ヶ川は二井宿山地と阿武隈山地の間を北流し、流域に沖積地を 形成するが、大鷹沢、大平地区では自然堤防の発達が著しい。中央部は白石川流域である。白 石川は、二井宿山地を開析しながらおおむね東流するが、斉ヶ川を合わせていた付近から北流 し、蔵王町宮地区で、さらに東に向きを変える。流域には河岸段丘、沖積地を形成するが、深谷 地区では段丘が発達する。北部は松川流域であり、松川は小起伏火山地と高館丘陵の間を南流 してその支流とともに、円田地区、宮地区などに沖積地を形成しており、宮地区で白石川に注ぐ。 遺跡の所在する深谷地区は青麻山の南麓に接する地域にあたり、二段の段丘が発達しており、 その東側は、阿武隈山地帯近くを白石川が流れて、それに沿う沖積地がみられる。段丘上は全 体的に南東を向く緩斜面で、その端部には段丘崖がみられ、また段丘面は源氏川・平家川・三 本木川・大太郎川などの小河川に開析されている。

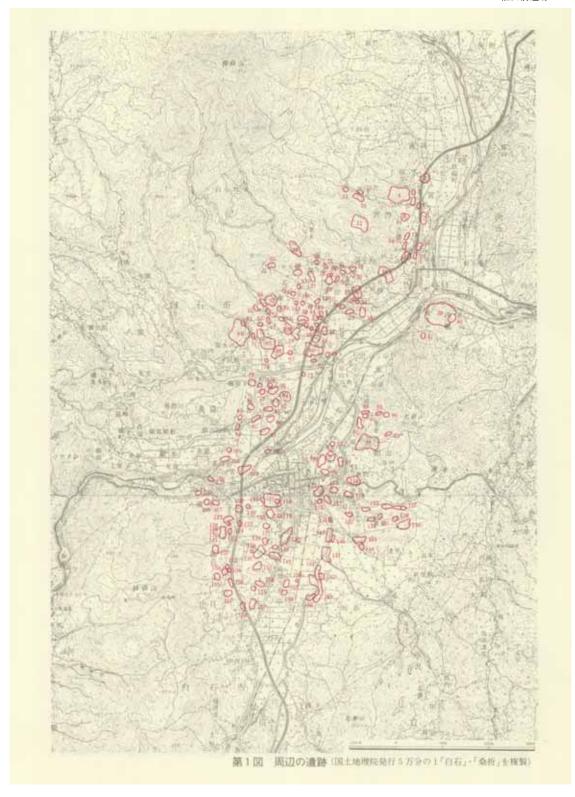
植田前遺跡付近は南向きの緩斜面であるが、東および西側は沢によって区切られ、舌状の地形を成す。また遺跡中央部には浅い沢が入り込む。斜面裾部は、東半では段丘崖がみとめられるが、西半は裾部が周囲よりいくぶん南に張り出しており、斜面はなだらかなまま下って沖積地に没する。

### 2. 周辺の遺跡

白石市は県内で最も遺跡数が多く、現在まで400ヶ所以上を数えている。家老内遺跡の所在 する深谷地区は市内でもとりわけ遺跡の集中するところとして注目されている。

深谷周辺の遺跡について時代ごとに主なものを紹介してみると、まず、旧石器時代の遺跡としては高野遺跡、間内山遺跡の2ヶ所が知られ、前者からは大形尖頭器、後者からは両面加工石器が発見されており、当地における旧石器時代の人々の活動の痕跡がうかがわれる。

縄文時代になると遺跡の数は急激に増加する。遺跡の多くは白石川沿いに発達した河岸段丘



上に分布する傾向がみられ、主なものとして松田遺跡、三本木遺跡、荒井遺跡、白畑遺跡、間 内山遺跡があげられる。このうち松田遺跡からは縄文時代早期の竪穴住居跡が発見されている (丹羽:1972)。

弥生時代には前時代に比べ遺跡がかなり少なくなり、その中には遺跡数でみる限りむしろ自石川を隔てた斎が川流域や松川流域(円田地区)にみられるようになる。しかしながら、荒井遺跡から石包丁が出土し、青木遺跡から中期の埋葬遺構が発見された(伊藤:1960)例などが示すように、この周辺でも弥生時代の人々の活動の跡が少なからず認めることができる。

古墳時代から奈良時代にかけては、深谷地区では現在のところ指摘できる遺跡がみられなくなる。かわりに、北無双作遺跡(白石市:1976)や観音崎遺跡(中橋・清野:1978)、田中遺跡(森:1979)の存在が示すように斎が川流域や松川流域の沖積地に多く分布しているのである。この傾向はすでに述べたように弥生時代から生ずる現象であるが、この点について水田農耕の進展に伴い丘陵地から沖積低地へと生活の場を移していった結果とする見解(白石市:1979)があり興味深い。このほか、沖積地東側の丘陵上には古墳時代の有力者を象徴する鷹巣古墳群(白石市教委:1972)がある。

深谷地区では平安時代になって再び遺跡数が増加してくる。その多くは本遺跡の立地する河岸段丘上に密集している。近接する遺跡を列挙してみると、青木遺跡をはじめ御所内遺跡、明神脇遺跡などがあり、いずれも竪穴住居跡が発見されている。なかでも青木遺跡ではその数が21軒にのぼり、周囲の遺跡との関係から付近一帯が大きな集落になる可能性が考えられている(小川:1980)。このような在り方は、本地区の弥生時代から奈良時代での状況と比較するとかなり対称的である。増加した要因については現在のところ様々な考えがなされているが、いずれにしても今後白石地方の歴史を研究する上で重要な課題といえよう。

中世の遺跡についてはこれまで深谷周辺において確認されたものは少なく明確ではない。しか し、背後の丘陵上に諏訪館跡があり、沖積地をはさんだ東側の丘陵中からは県内に広く供給路 をもつ東北窯跡が発見されていることなどから、付近に集落跡の存在することが十分に予想さ れるのである。

遺跡 番分	建餘香片	1	įĮ	t	助		7		立	堆	!	植		89	109 代	進路	建键器器	;	£	脐		名	立地	Ħ		81	6.5	代
1	02071	1	H	Œ	ħ.	;		₩,	台	3	也	a	ŝ	Ħ	奈良・平安	16	05058	.15	璐	at.	j	跡	自然堤防	包	含	地	奈良・平安	
2	05030	1	Ξ	Ŀ	ß	: 1	Ħ	跡		*		换	落	g,	旧石首·縄文(中·後)·奈良·平安·中世	17		T										
3	05076	Ŧ	K	7	,	i		跡	丘网	811	Ej	힏	含	þ	縄文(後)	18	05024	富	t	ŧ	翩	新	丘陵	域		館	中世	
4	05046	ŀ	Ú	7	:	E		脐	ff.	F	2	域		ķ	中世	19	02079	鮾	U	1	進	卧	丘陵斜面	3	\$	地	奈良・平安	
5	05075	1	4	Ħ	Ŧ	;	È	Ħ	丘片	e a i c	60 (	Ð.	\$	Ħ	縄文(後・中)・奈良・平安	20	02077	大	爲	Ж	週	. 16	台 地		*		•	
6	05028	7	4	뚔	÷	3	ŧ.	14	Ú	į	ė		•		旧石器·縄文(中·接)·弥生·古墳·奈夏·平)	<b>∤·中世 2</b> 1	02080	笊	p	4	速	跡	丘陵斜面		٠		,	
7	05005	1	ž.	£,	ŧ	ů		詩		*	T		۰		縄文(前・中)・弥生(中)・奈良・平安	22	02081	履	7	7	遗	14	*		*		縄文(中)・奈良・平安	
8	05064	1	ŀ	ш	Œ	;	ŧ.	緋	Æ	7	3		٠		奈良・早安・中世	23	02087	栴	t	9	遗	鋒	۰		*		縄文(後)	
9	05068	1	ĸ	4	:	週		跡	压牌	(A)	6		٠		縄文(後・)・弥生(中)	24	02088	火	廃	H	迪	跡			٠		縄文(中)・奈良・平安	
10	05065	ı	ti.	П	iR	;	Ė	跡		*			*		縄文(後・晩)	25	02108	А	A	14	適	跡	•		٠		縄文	
11	05164	Γ									7					26	02107	大	久	保	速	P#	,		*		縄文(後)·弥生	
12	05002	Ţ	ŀ:	4		遗		16	БĦ	1410	5	æ	â	H	奈良・平安	27	02085	li	¥á	坂	遗	25			٠		縄文(中)・奈良・平安	
13	05061	3	ž.	-7		ě		ř0	f£ !	2 :	E		*		•	26	02084	长	A)	1	遗	器	丘陵麓		*		奈良・平安	
14	05027	9	ķ	pt,	1	遠		25	-	٠	T		۰		旧石器・縄文	29	02083	91	当	ρŊ	遺	内	丘陵斜面		*		縄文(中)・奈良・平安	
15	05026	11	Ŋ	*	ĸ	i	t	ŧ,	D.M	堤區	ħ	包含的	è. 7	1	旧石器・縄文(V・前)・外生・古墳・平安	30	02078	40	pl	4	適	26	*				奈良・平安	

	\										
連熱	全部資料	<b>河通 紡 名</b>	立地	椎別	et ft	進務	五柱番号	ab B 名	立地	租期	势 传
3)	05059	乙当地遺跡	丘院皇		縄文(早)・奈良・平安	102	02033	茶風速路	丘陵斜面	包含地	縄文・奈良・平安
32	02075	东老内遗路	台地	集 惩 終	模文(前・中) 奈良・平安	103	02032	哲 生 田 遺 跡	段丘	集 落 跨	縄文(中・後)
33	02072	明神臨遺跡	*	•	奈良・平安	104	02175	茶烯发速转	4	包含地	縄文(後・晩)
34	02067	自山紫遺跡	•	包含地	• \	105	02253	淹 / 上進 跡	台地	*	茶臭・平安
35	02068	沢 遺 路	٠	•	• \	106	02250	淹毁音赛遗跡	丘陵農		楊 文
36	02069	引桜連跡	+	*	縄文(中・晩)	107	02251	御 期 遺 路		*	*
37	02066	鳥 越 遺 跡	*	*	奈良・平安	108	02379				
38	02376				The state of the s	109	02256	<b>服 教 前 进 跡</b>	台 地		福文(晚) 近 世
39	02120	推址起降(二条册-内模域)	丘陵	姓 館	<b>ф %</b>	110	02197	白石城路	- *	城館	ж ш
40	02373	安久戸遺跡	丘陵斜面	包含地	模文	112	02121	本 郷 遺 跡	台 地	包含地	<b>奈良・平安</b>
42	02105	北沢波跡	台 地	7	奈良 · 平安	113	02278	七层敷造器	丘陵斜面	,	,
43	01106	台港路	*	-	縄文(中)	114	02146	鹿島山遺跡	*	包含地·城 館	縄文、奈良、平安、中世
44	02100	六角連跡	+	,	奈良・平安	115	02281	益岡西連幹	台地	包含地	奈良・平安
45	02227	赤 沼 遺 路	*		<b>视</b> 文	116	02351				
46	02102	黄 毛 遺跡	+	*	縄文(早)・奈良・平安	117	02258	寿山 遗跡	台地		縄文・近世
47	02094	松田遗跡	*		縄文(早)・芽生・奈良・平安	118	02010	鉄子ヶ盛敷石遺跡	沖積平野	數石立石	古墳・奈良
48	02095	前原北連飾	,		楊文(中)	119	02280	中寺前進路	台 地	包含地	奈良・平安
49	02096	下見前遺跡	•	*	縄文(前)	120	02114	兀山 遠跡	- 10 M	包含地・城 館	奈良,平安·中世 近 世
50	02097	過 / 口 进 路	丘陸中以	*	概文(前・後)・奈良・平安 概文(後・晚)・奈良・平安	121	02249	八帽 坂西陣區跡	丘隍墳台地	# # 18	ж <b>ш</b>
51	02315 02315	上里飲造路	丘陵野面	•	機文(传·呪)・分及・子女 縄文(前・中・後)・弥生	123	02031	一本本通路	丘陵斜面		
53	02326	,., r) At 187	ALFRETIA	-	107107 1 107 7735	124	02324	月心院遺跡	丘段中版	包含地 - 地院跡	奈良・平安・近世
54	02277	旅	丘陵	城 館	中世	125	02177	神明遺跡	台地	包含地	縄文・奈良・平安
55	02242	大塚遺跡	丘映中版		縄文(後)	126	02116	赤城石塚古墳	丘陵料面	石 塚	古代・中世
56	0231 4	白细 進路	丘陵麗	٠	縄文(早・前・後)・弥生(中)・奈良・平安	127	02145	内田前遗跡	•	包含地	奈良・平安
57	02388					128	02007	権現山古墳群	丘陵中联		古墳(後)
58	02312	高野遺跡	台 地	包含地・製鉄路	縄文(早・前・中・後)・奈良・平安	129	02115	前山港跡	丘陵斜面	包含地・黨 跡	縄文・弥生・奈良・平安
59	02313	荒 井 遺 路		•	<b>縄文(前・中・後・晩)・弥生・奈良・平安</b>	130	02165	新 館 跡	ff 12	城 館	中 世 奈良·平安
60	02320	<b>苏所内遗跡</b> 上高野遺跡	*	包含地 , 集落路	縄文(早)・奈良・平安 縄文(早・前)・奈良・平安	131	02009	北無双作遺跡和黄地大	神模平野 丘 陵 麗	基 落 <u>路</u> 包 含 地	<b>家員・干女</b>
61	02310	上州野地野	自然提防	SELVE , SHEVILLE	AX(4** HI) · XX · TX	133	02005	保史跡 医美古埃群	丘陵斜面	前方读円填·円填他	古墳・奈島
63	02048	杉の下北遺跡	丘陵麓	包含地	奈良・平安	134	02122	光型教造跡	丘段號		奈良・平安
64	02198	人名雅特	丘牌	城館	中世	135	02123	田手屋敷遺跡	,	•	• ,
65	02309	三本水前遺跡	台 地	包含地	縄文(前・後)・奈良・平安	136	02125	高野館跡	丘段	域 。第	中世
65	02307	下館遺跡	. *	包含地・城 館	縄文(後)・奈良・平安・中世	137	02260	域内图敷遗跡	丘陰斜面	包 含 地	縄文(中)・奈良・平安
67	02311	道内原造跡	•	包含地		138	02124	等入星數遺跡	丘陵麓	*	奈良・平安
68	02306	穷 木 遗 篩	*	,	縄文(後)・弥生・奈良・平安	139	02101	一本木遺跡	台地	•	縄文・奈良・平安 奈良・平安
70	02305	地凝型遺跡	*	- *	縄文(中)	140	02229	高 野 原 遺 跡 北 畑 遺 跡	*		視文
70	02047	杉の下前遺跡	台地	2 3 地	縄文(後)・奈良・平安	142	02220	北原遺跡	•	-	,
72	02046	堂田鹿寺跡		<b>†</b> #		143	02261	三曲法科	丘陵	包含地・椒 館	視文、奈良・平安・中世
73	02036	的 場 遗`跡	沖積平野	包含地	縄文(中)、奈良・平安	144	02128	宮 下 遺 鼻	丘陰斜面	包含地	奈良・平安
74	02294	廃 / 餘 跡	台地	城 筵	中世	145	02132	白石沖波跨	台 地	*	*
75	02037	馬馬達斯	•	包含地	楊 文	146	02257	梅田 遺跡	*	•	弥 生 ·
76	02383					147	02133	谷津川遺跡	C BAGUIG	*	縄文・弥生・奈良・平安・中世
77	02386		<u> </u>			148	02245	新館西港路	丘陵斜面	<del></del>	奈良・平安
78	02382	上神明遺跡	台地	包含地	縄文・奈良・平安	150	02380	上麻野前遗跡	丘拉萨	20 含地	奈良・平安
80	02039	下神 明 遗 跡	- ,	* * *	模文・示反・干安 様文(中)・奈良・平安	151	02348				
81	02325	三部山迪화		•	机文	152	02113	古御所內跡	台地	降 湿 跡	中世
82	02040	長 坂 前 遺 跡	*	* .	奈良、平安	153	02352				
83	02041	小森迪防	丘陸觀	*	縄文・奈良・平安	154	02244	ヨムギ原造跡	台地	包含地	模文
84	02042	入屋敷前進跡	٠	•	奈良・平安	155	02353				
85	02043	卸上遗跡	台 地		縄文(中)	156	02234	事ノ内造跡	台地	包含地・陣座跡	奈良・平安・中世
86	02044	肉山造鮮	٠	. ,	机文	157	005:2	-	<u> </u>		
87	02387	MP 11, 28 pts -1 14	Canalina	19 15 4 -	+16(16) , 250	158	02365 02366		<u> </u>		
88		郎 山 横 穴 古 墳 群 郡山寺 人西古墳 群		損火古墳	古墳(後)・奈良	159	02356	松田港跡	숨 16	名 含 地	M X
90		郡山寺人東古墳群		,	*	161	02135	田中遠野			弥生・古墳・奈良・平安・中世
91	02279		<del></del>			162	02285				
92	02377	· · · · ·	T			163	02136		台 地		奈良・平安
93	02002	郡山金倉古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)・奈良	164	02137	夫 柳 前 遺 跡	,		弥生・奈良、平安
94	02147	郡山寇跡	丘腹	包含地・館 跡	奈良・平安・中世	165	02354				
95	02329					166	02355				
96	02263	弥陀内遗跡			<b>弥生・奈良・平安</b>	167	_	泰術館跡(太平館)	分離丘陵	城館	ф <b>#</b>
97	02322	视音畸造跡		集 落 跡	來良、平安	168	02381	男ノ塚遺跡	<b>元的知</b> 述	± *	<u> </u>
98	02262	大畑進跡	台 地	包含地	弥生・奈良・平安	170	02117	神明環境	-	* *	*
100	02201	<b>弹場山館跡</b>		降屋跡・城 館		171	02119	第山锰紫		蛭 塚	平 安
101	02254				ĭР		L				
_											

### Ⅱ 調査の経過

遺跡の範囲はおよそ 13,000 ㎡におよぶものと考えられるが、当地には自動車道の白石インターチェンジが建設されるため、調査の対象範囲は遺跡のほぼ全域を含んでいる。

調査は昭和46年5月17日に開始し、6月16日に一時中断、その後7月10日に再開して7月20日に終了した。

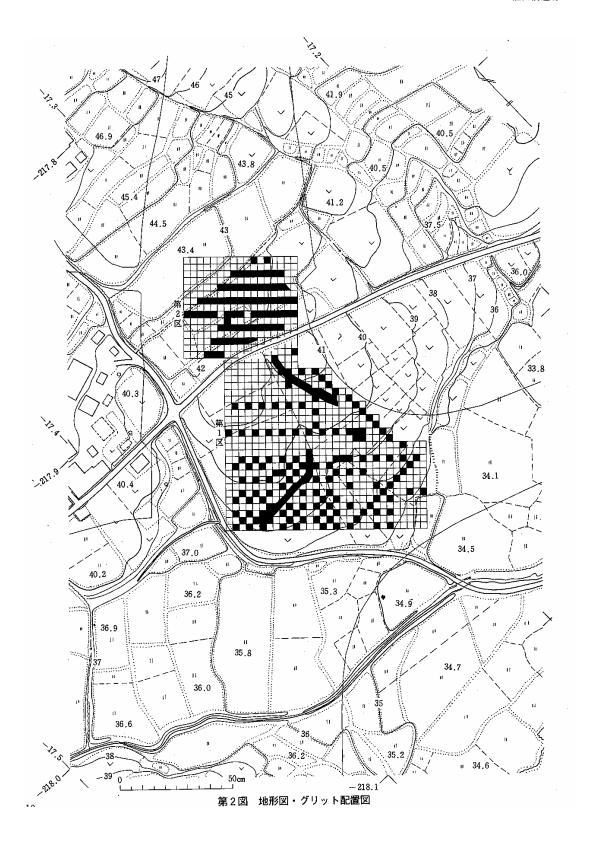
発掘は遺跡北部を東西に走る農道より南側を対象として開始し、最初に調査区の設定を行なった。調査区は3m方眼のグリッドとし、自動車道の中心杭STA171+40とSTA171+60を基準にしている。グリッド名は東西を数字、南北をアルファベットで表示しその組み合わせで呼称しているが、南半は数字が東方向に増えてアルファベットは1桁であるが、北半は数字が西方向に増え、また、アルファベットは二桁(NA・NB…)としている。次に堆積層の除去および遺跡確認作業に入ったが、この際グリッドを市松模様状に掘り下げている。堆積層は基本的に4枚認められた。第 I 層は表土、第 II・III 層は遺跡中央へ南から入り込む浅い沢状の部分に分布が認められ、縄文土器・土師器・赤焼土器・須恵器などが混在して出土している。第 IV 層は地山の漸移層であり、第 II・III 層の分布範囲よりわずかに広く認められる。遺物は出土していない。これ以下は地山である。遺構確認作業の結果第 IV 層上面において2ヶ所で溝状遺構を検出し、その周囲を拡張し精査を行った。また、他にも地山面で溝状の落ち込みやピットなどが少数確認されたが、拡張は行なわず確認されたもののみ精査した。なお、調査区域中央のNB・NC-7.8 区では第 IV 層上面で狭い範囲に黒色土の分布がみられ、焼土と遺物も認められ精査の結果、遺構は検出されず第 IV 層上面が浅い凹を呈しそこに流入したものと考えられた。

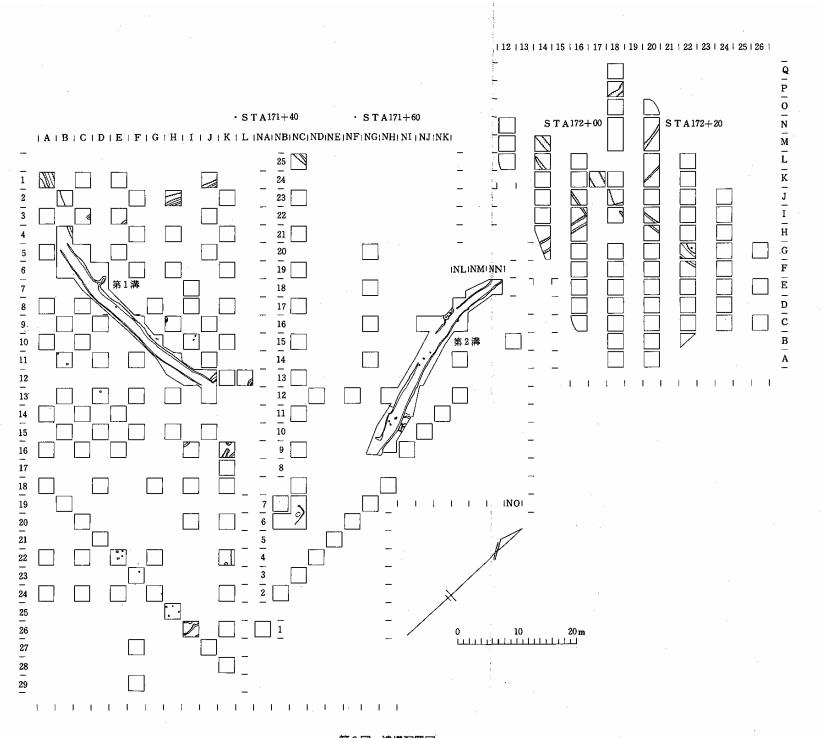
遺構の平面図は、溝状遺構については遺構に沿った任意の基準点数点とそれを結んだ基準線を設定して図化し、この基準点とグリッド設定の基準線との関係は平板測量によって記録した。 他の遺構はグリッド設定用の杭を使用して略図を作製するにとどめた。

農道以南の調査終了後、同地区で検出された溝状遺構の延長部および集落など他の遺構の存在が予想されたため、農道以北についても調査を実施した。

調査区はここでも3m方眼のグリッドとしたが、その基準点をSTA172+00とSTA172+20とし、また、グリッドの基点を任意に設定したため基準線の方向が農道以南のグリッドのそれとわずかに異り、また、グリッドも約1mずれる結果となった。

堆積層除去・遺構確認作業はグリッドをいくつか連ねたトレンチ状の調査区を1列毎に設定して行った。この地区は調査時には畑地であったが、表土下に元の水田面が現われ、この面で現代の陶器類が出土していることから新しく水田に盛り土をして畑地化したのである、水田耕作土下は地山である。地山面で農道以南からの延長と思われる溝状遺構と他にそれより小規

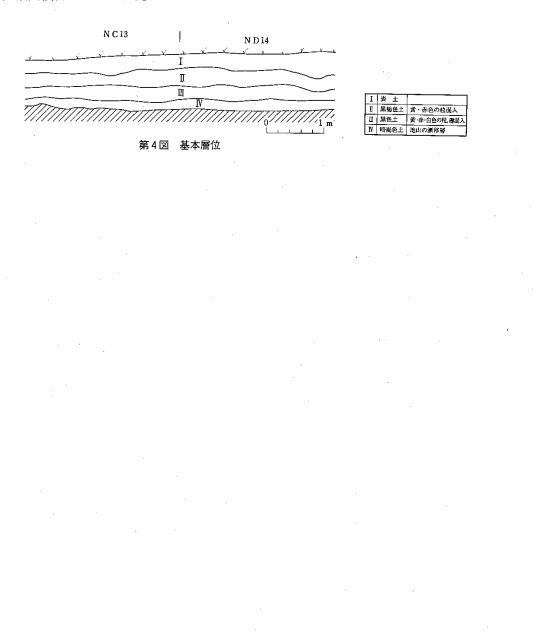




第3図 遺構配置図

模な溝状落ち込みを検出したが拡張は行なわれなかった。また、地山面で湧水が激しく充分な 精査は行なえなかった。遺構の平面形はグリッド設定用の杭を使用して図化している。

調査面積は第 1 区が対象面積約 7,560 ㎡、発掘面積約 1,315 ㎡、第 2 区が対象面積約 2,295 ㎡、 発掘面積約 648 ㎡である。



### Ⅲ. 発見された遺構と遺物

発見された遺構には溝状遺構2本(第1・第2溝)と他に溝状の落ち込み、ピットなどがある。出土遺物は縄文土器・土師器・赤焼土器・須恵器・石器などがある。このうち量的には赤焼土器が大半を占め、しかもほとんどが第2構内あるいは同溝付近の堆積層から出土している。

#### 第1溝状遺構

遺構は第1区南半にあり、B5区からJ12区にかけての地山面で確認された。西側で後世の掘り込みによって攪乱を受けている。ほぼ等高線に並行して東西に走る。溝の幅は1.4~2.1 ㎡底面幅1.1~1.6 ㎡、深さ11~39cmで長さ約42mまで確認されている。全体にほぼ直線的であるが、東・西側約3分の1ずつがわずかに北に折れる。東側に行くに従いわずかに細くなる傾向を示す。東西の端は閉じておらず、さらに続いていたものと考えられる。

堆積土は2枚みとめられる。第1層は黒色土で溝全体に分布している。遺物は少量出土している。第2層は黄褐色土で底面上に薄く堆積している。ほぼ溝全体に分布するが部分的に途切れる。遺物は出土していない。底面上には酸化鉄が厚さ1cmほど堆積している。溝の西側3分の1ほどの堆積土は後世の攪乱が激しい。

溝の断面形は逆台形に近いが壁面は凹凸が多く、また、段のつく部分もある。底面も凹凸が 多く、わずかに東から西方向へ傾斜し、両端の比高は約40cm ある。底面からピットが1個検出 されている。

#### 第1溝出土遺物

土師器・赤焼土器が堆積土第1層中、床面上、ピット内から少量出土している。底面上出土のものは壁面にみられる段の底面から出土しており、堆積土第2層の分布範囲外のため同層との前後関係は不明である。また、遺物の出土しているピットは第2層下の底面で確認されている。

#### 十師器

坏と高台付坏がある。製作に際しロクロを使用している。

坏(1) 口縁部から体部上半を欠く。底部は回転糸切り技法(ロクロ右回転)で切り離されており、再調整はみられない。ナデ状の調整と内面は部分的にヘラミガキがみられ、黒色処理されている。

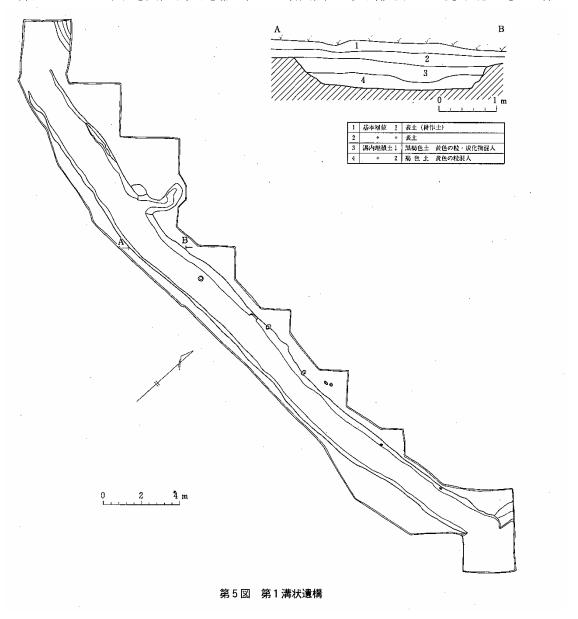
高台付坏(2) 体部はわずかに丸味をもって外傾し、口縁部で外反気味となる。高台はわずかに開き下端に向かって細まり、端部は丸くおさまる。坏底部には高台接合の際ロクロ調整が加えられ、切り離し技法は不明である。ロクロは右回転である。坏内面は不規則な方向の雑

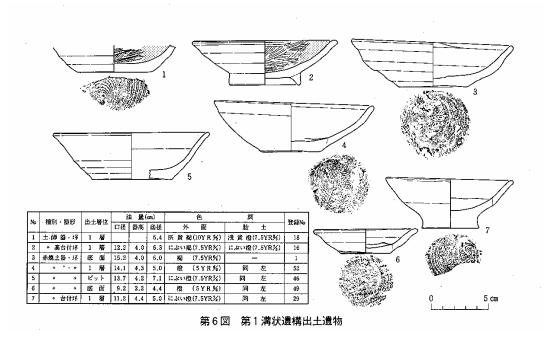
なヘラミガキが施され、黒色処理されている。外面のロクロ調整、内面のヘラミガキともに1 よりは丁寧に行なわれている。

#### 赤焼土器

坏・台付坏がある。製作に際しロクロを使用している。

坏  $(3\sim5)$  大形  $(3\sim5)$  と小形 (6) とがある。内外面にロクロ調整痕がみられ、底部は $3\sim5$  のいずれも回転糸切り技法(ロクロ右回転)で切り離されている。大形のものは体





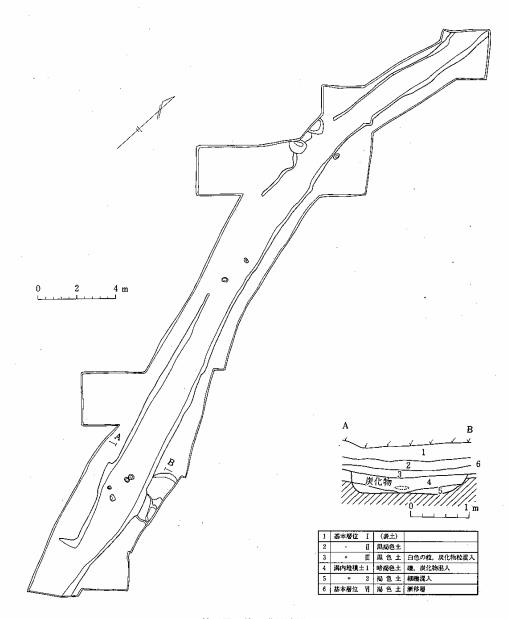
部から口縁部まで外傾するが、細部の特徴には違いがみられる。3・4は体部・口縁部が丸味をもって立ち上がり、3は体部中央が厚くふくらみをもち内面底部中央が小さく丸く凹む。4 は体上部がわずかに折れ口縁部が外反気味となる。5は3・4と異り体部・口縁部が薄く、ほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部で外反気味となる。内外面とも再調整は加えられていない。なお、4には内面体部下端に粘土積み上げ痕が観察される。小形のものは体部から口縁部までが短く、強く外傾する。外面はロクロ調整による凹凸がみられ中央部でふくらんでいる。内面の体部下端に粘土積み上げ痕が観察される。

高台付坏(7) 坏でみられる大形・小形との中間の大きさである。体下部がいくぶん張り その上は直線的に立ち上がる。台部は短く中実で、外面は反る。台底面は回転糸切り技法(ロクロ右回転)によって切り離されている。内外面とも再調整は加えられていない。体下部に粘土積み上げ痕が観察される。

#### 第2溝状遺構

第1区北半から第2区にかけて位置する。遺構が確認されたのは第IV層(地山漸移層)上面であるが、輪郭を検出したのは大部分地山面においてであった。第1区南部・北部でピットと重複しこれに切られている。

溝の幅は $1.1\sim2.4$ m、底面幅 $0.7\sim1.8$ m、深さ $5\sim30$ cm で、全長75mまで検出された。第1区ではほぼ等高線に直交して走り、南3分の2ほどは直線的であるが北側はしだいに東に曲が



第7図 第2溝状遺構

る。さらに第2区に続き北へ約17m伸びたところでほぼ直角に東に折れている。

堆積土は第1区で検出された部分では2枚に分かれる。第1層は暗褐色土で全体に分布し、 川原石、小礫を多く含んでいる。多量の遺物が出土している。

第2層は黄褐色土で底面上のほぼ全体に堆積しているが部分的に途切れる。遺物は出土していない。第2区での溝内堆積土は1枚のみで、暗褐色土であり色調は第1区分の第1層と同様

であるが、同一の層であるかどうかはわからない。

溝の断面形はほぼ逆台形であるが壁・底面とも凹凸が多く必ずしも一定しない。底面は南に 傾斜する。底面で6個のピットが検出されている。

#### 第2溝出土遺物

土師器・赤焼土器・須恵器が堆積土第1層・第2層上面から出土している。これらの土器は 川原石・小礫と混在しており、また、土器の中には数個体重なり合って出土したものもみられ る。

#### 十師器

坏・高台付坏・甕がある。このうち図示できたのは高台付坏・甕であり高台付坏は製作に際 しロクロを使用しており、甕は使用していない。

高台付坏(1~4) 1は高台を、2~4は坏上部を欠く。1は体部から口縁部まで直線的に、次第に薄くなりながら立ち上がる。2~4は体部がいくぶん丸味をもって立ち上がる。高台は断面三角形状を成して短く、また、坏底部がいくぶん丸味をもつため、高台と坏底部下面との高さの差がわずかで、特に4ではほぼ同じ高さである。1~4のいずれも底部は高台接合の際のロクロの調整によって切り離し技法は不明であり、坏内面にはナデ状の調整と部分的に粗雑なヘラミガキが加えられ、黒色処理されている。なお、4の内面体部下端には粘土積み上げ痕が観察される。

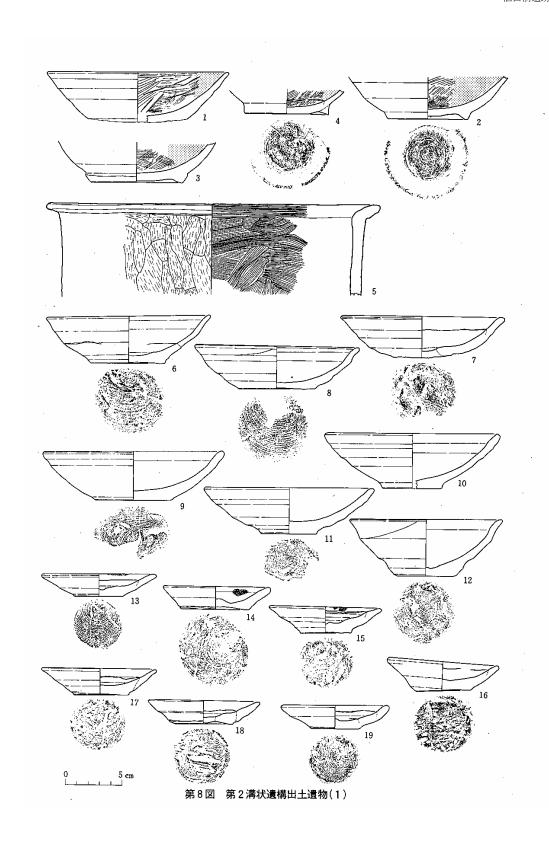
甕(5) 下半を欠く。体下部は直線的に立ち上がり、口縁部は強く外傾し短く、また、凹凸が多く形態は整っていない。器面調整は口縁部外面にはナデ状の粗雑な調整がみられるだけであり、内面は横ナデされている。体部は外面に荒いヘラケズリ、内面にナデが施されている。

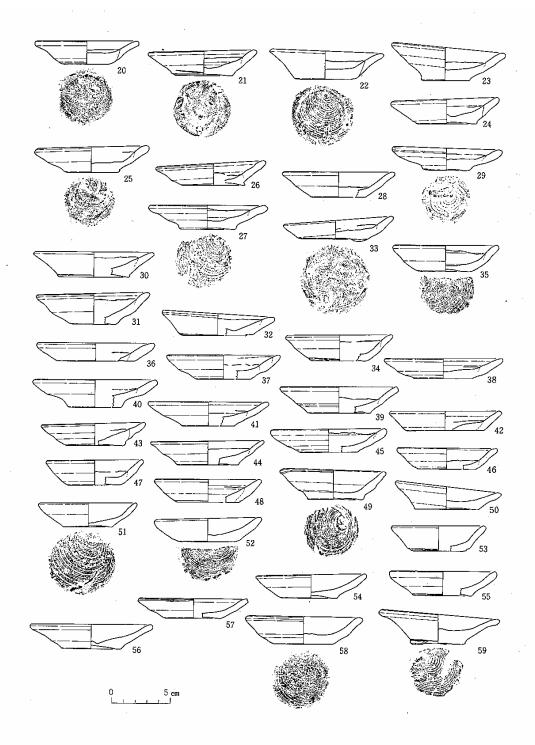
#### 赤焼土器

坏・高台付坏がある。両者とも製作に際しロクロを使用している。

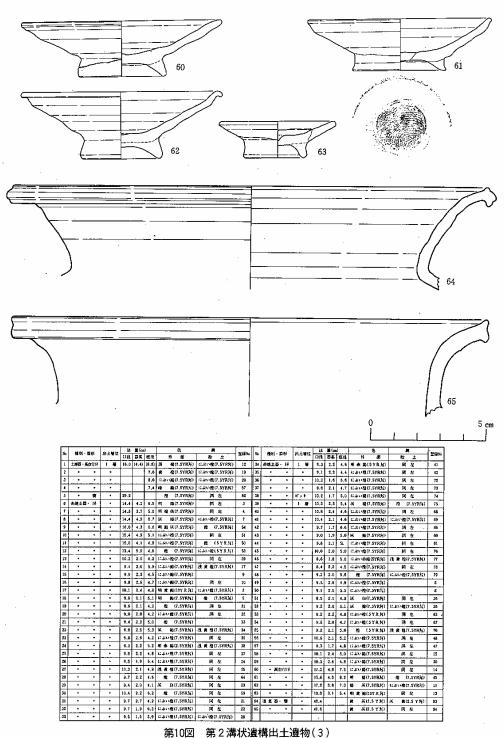
坏(6~59) いずれも内外面にロクロ調整痕がみられ、底部は回転糸切り技法(ロクロ右回転)で切り離されており、内外面に再調整は施されていない。法量では大小の別がある。6~12 は大形である。体部から口縁部までわずかに丸味をもって立ち上がるが、6~9・12 では口縁部が外反気味である。体部下端がくぼむことによって底部はやや下方に突き出す形態になっている。7では底部切り離し後、中央部に粘土をつめた痕跡がみられる。6の体下部、7の体上部には粘土積み上げ痕が観察される。

13~59 は小形のもので、器壁は厚く低平である。体部から口縁部は短く、強く外傾するが、直線的なもの、丸味をもつもの、外反気味なものなど多様である。全体にゆがみが多く、また 完形品ではそのほとんどが口縁と底部が平行にならない。体部下端が凹むことによって、底部 がわずかに下方に張り出す形態となるものが多い。14・19・21・24・56 は内面底部中央が丸く





第9図 第2溝状遺構出土遺物(2)



510回 第2件M通行工度物(3

回み、13・15・18・25・35・38・59 は同箇所が小さく盛り上がっている。14・19・21・25・26・30・34・43・48・53・59 の体部下端には、回転糸切り痕から線状に観察される。13・15~48 では体部の中・下位に粘土積み上げ痕が観察され、19・37 では二段に認められる。18 では切り離し後、本部中央に粘土をつめ込んだ痕跡がある。また、13~15 の口縁部内面の一部にはスス状の炭化物が付着している。

#### 高台付坏 (60~63)

内外面ともロクロ調整痕(ロクロ右回転)がみられる。法量では大小の別がある。

60~62 は大形である。体部は直線的に外傾し、口縁部は60 ではそのまま立ち上がり、61 は屈曲して端部が反り、62 は厚くふくらむ。坏底部の切り離し技法は60・62 では高台接合の際のロクロ調整のため不明であるが、61 は回転糸切り技法によって切り離されている。高台はやや開き、端部に向って細くなり、60・62 では端部が丸くおさまり、61 では角ばってわずかに反る。61 の底部中央に切り離し後粘土をつめた痕跡がみられる。

63 は小形である。体部から口縁部まで直線的に外傾する。坏底部の切り離し技法は高台接合の際のロクロ調整のため不明である。底部内面中央が丸く凹み、高台はほぼ直立し、端部は丸くおさまる。

#### 須恵器

甕・壺が出土している。図示できたのは甕だけである。

甕(64・65) 口頚部破片である。64 は頚部が直線的に外傾し、口縁部は外反して端部が上・下・側方に突き出し、内面は受け口状を成す。65 は頚部が直立し、口縁部は外反して端部が上下につまみ出されている。

また、この他に灰釉陶器の破片が出土しているが、小片のため図示できない。

#### 堆積層出土および層位不明の遺物

#### 十師器

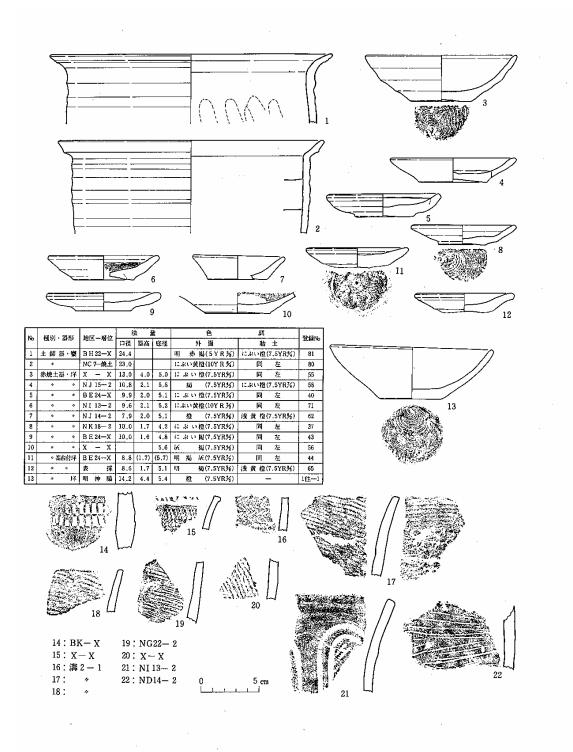
甕(1・2) 下半を欠く。製作に際しロクロを使用している。1は口縁部が外反する。2 は口縁部が外傾して外面に稜がめぐる。内外面ともロクロ調整されているが、1の内面体部に はナデ状の痕跡が認められる。

#### 赤焼土器

坏  $(3\sim 9)$  内外面ともロクロ調整され、底部は回転糸切り技法(ロクロ右回転)で切り離されている。法量では大小の別がある。

3は大形である。体部から口縁部までわずかに丸味をもって立ち上がる。

4~9は小形である。体部から口縁部まで強く外傾する。6は底部中央に切り離し後、粘土



第11図 推積層出土・層位不明の遺物、縄文土器

がつめられており、内面にはナデツケが認められる。

10 は大小いずれか不明であるが、底径からすれば大形に含まれるものかも知れない。内面にはスス状の炭化物が付着している。

高台付坏(11・12) 高台を欠く。器高がごく厚く低平である。底部の切り離し技法は高台接合の際の調整のため不明である。

13 は明神脇遺跡出土の遺物である。本遺跡出土遺物に混じっていたため、すでに刊行された明神脇遺跡の報文では扱われていない。そのためここで説明しておく。

#### 明神脇遺跡出土の赤焼土器坏

本遺跡に当てれば法量は大形である。体部から口縁部まで丸味をもって外傾し、内外面ロクロ調整されているが、それによる凹凸が器面にはみられず、なめらかな面を成す。底部は回転糸切り技法(ロクロ右回転)で切り離され再調整はみられない。

#### 中世陶器 (14)

小破片のため壺・甕のいずれか不明である。外面は暗赤褐色をし格子状の押印がみられる。 また、この他に体部破片が数点出土している。いずれも胎土、色調等は県内で出土しているも のに類例がなく、時期・産地等は不明である。

#### 縄文十器

縄文土器は溝状遺構、堆積層などから出土している。いずれも混入であり、量も少ないのでここで一括して扱うことにする。

15 は口縁部破片で、端部と外面には貝殻腹縁文が施文されている。16 は体部被片で、矢羽根状に貝殻腹縁文が施文されている。これらは早期大寺式と思われる。

17・18 は口縁部破片であり、外面に縄文、内面に条痕がみられ、胎土に繊維を含む。素山  ${
m II}$  式と思われる。

19・20 は体部破片で、外面に縄文がみられ胎土に繊維を含む。早期末から前期初頭のものと思われる。

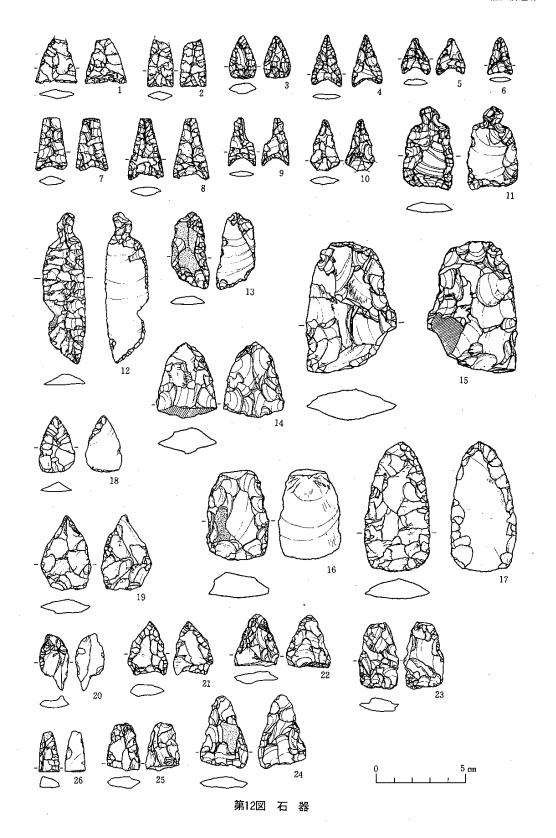
21 は口縁部破片で、沈線によって下垂する楕円状の区画がなされ、区画内には縄文が施文されている。中期大木10 式と思われる。

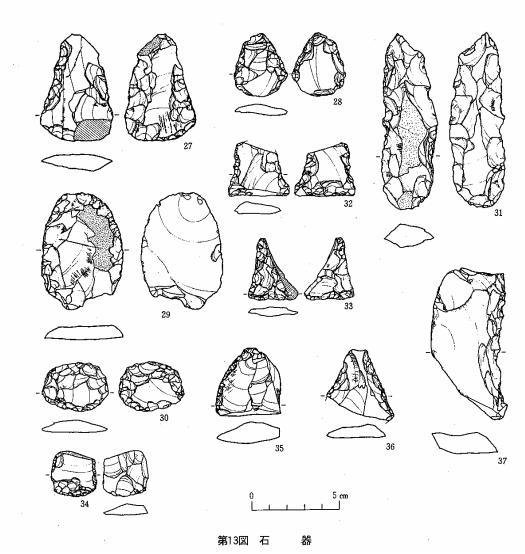
22 は体部破片で、細く浅い沈線が斜行している。時期は不明である。

#### 石 器

石器は縄文土器と同様の出土状況であり、ここで一括する。

石鏃 $(1\sim10)$  すべて無茎である。 $1\cdot 2$ は基部が平坦で、1は幅が広く、2は細長い。





両面全体に加工が施されている。 3 は基部がわずかにふくらみ、側縁下半が張る。両者とも加工は中央まで及ばない。  $4\sim10$  は基部が凹む。 5 は幅が広く正三角形状を成す。他は長く側縁はほぼ直線的である。いずれも両面加工されているが  $4\cdot5\cdot9$  では一部に一時剥離面を残す。石匙( $11\sim13$ ) 縦長の剥片を利用している。11 は長方形をし、両面の側縁に加工が施され

石匙(11~13) 縦長の剥片を利用している。11 は長方形をし、両面の側縁に加工が施されている。12 は細長く先端は突がる。片面は全体に加工が及び、一方の面はつまみの部分が加工され、また、側縁の一部には細かな剥離がみられる。13 はつまみを欠く。両面とも周縁にのみ加工がみられる。

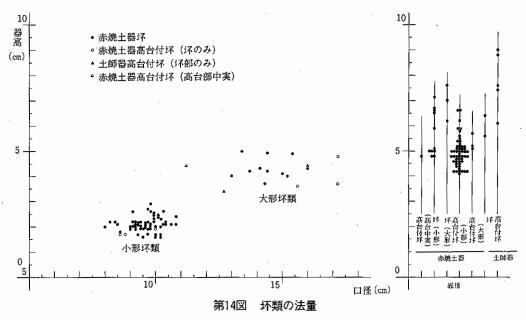
石箆(14~17) 14・15 は両面全体に加工が及ぶ。16 は片面加工でしかも中央まで加工が及

はない。17は両面加工であるが、片面は加工の施されるのが周縁だけである。

不定形石器 (18~37) 18~21 は三角形状を成し、片面あるいは両面を加工して、先端を尖頭状につくり出している。22~25 は三角形あるいは長方形を成し、両面のほぼ全体に荒い加工が加えられている。26 は細長く、幅に比して厚い。片面に細かな加工が施されている。

27 はバチ状をした剥方の縁辺に荒い加工を施している。28~30 は楕円形を呈し、29 は片面、他は両面の縁辺に加工を施している。31 は長く、基部は丸く、先端は尖がる。両面縁辺に荒い加工が施されている。32・33 は辺が直線的で両面の縁辺が加工されている。34~37 は片面の縁辺の一部にのみ加工がみられる。

これらの石器は、縄文土器の年代からみて早期から中期までのものと考えられる。



破片集計表

種別	器形	部位	調整など	第2溝	堆積層 など	āt		
	17	口緑	ロクローミガキ・黒	14	23	37		
	坏	体部	ロクローミガキ・黒	49	52	101		
	高台付坏	底	回転糸切 -(t3)-	4	8			
±	役	部	回転糸切→ケズリ		2			
	11	តារ	(高台付坏)	14	6	34	172	,
舒		口縁部	横ナデー横ナデ	2	7			
199		循	ロクローロクロ	4 -	2	15		
			ケズリーナ デ	84	50			
#	变	体	0000000	10	10			
		部	刷毛目一刷毛目		1			
		40	不 明一不 明	. 7	56	218		
		底部	不 明一不 明		ı	1	234	406
		口縁		459	534	993		
赤	坏	体部		306	543	849		
l			大形 大 形	22	27			
焼	Æ	庭	(环) 小形小形	71	80			
±	台	10%	不明 不 明	134	126	460		
_	付	部	大形 大 形	24	21			
25	坏	еħ	(高台付环) 小形	8	9			
			不明	25	3	90		2,392

部位	調 整	など	第2溝	堆積増など	βì		
口縁			li .	1	1		
体部				1	1		
底部 回	転糸切			4	4	6	
口樑							
類部							
平	行叩き目	一平 行	2	3			
体		一青海	2	6			
		一ナ デ	1	9			
部	·	— E		2			
		一不 明	3	2	30		
庭部				1	1	31	
頚部	_			1	1		
体部			1	5	6	7	44
体部	_						

### IV 考 察

### 1. 出土遺物について

本遺跡出土の土器には、縄文土器・土師器・赤焼土器・須恵器・中世陶器がある。このうち縄文土器・中世陶器についてはすでに前項で述べており、ここでは除外する。

土師器・赤焼土器・須恵器には、それぞれ土師器に坏・高台付坏・甕・赤焼土器に坏・高台 付坏、須恵器に甕の器形がみられる。これらは器形ごとにさらに細分されることが少ないので 最初に共伴関係を検討する。

遺構内における土器の出土状況をみると、第1溝からの出土量は少ないが、第2溝からは多量に出土している。第2溝ではそのほとんどが堆積土第1層から出土しているが、層中に川原石、礫や、焼土が多く含まれていること、また土器のなかには数個体重なり合って出土したものもあることなどから、土器は人為的に廃棄されたものと考えられる。したがって第1溝第1層出土の土器は一定期間内における共伴関係が成立する。また第1溝出土の土器は、その特徴の類似点から第1溝出土土器と共伴するものと考えてさしつかえないと思われる。

第1・第2溝から出土した土器は本遺跡出土の土師器・赤焼土器・須恵器の特徴をすべて包括している。その内容は次のとおりである。

土師器・赤焼土器・須恵器では数量的に赤焼土器が大半を占め、次いで土師器が多く、須恵 器はごく少量である。

ここでは図示したのを中心に前項の記述をもとにし、さらに表示した法量と色調および破片 集計表の内容を加えて説明を行う。

#### 〈十師器〉

坏・高台付坏、甕が出土している。

坏

製作に際しロクロを使用している。すべて口縁部を欠く。体部はわずかに丸味をもって立ち上がる。底部は回転糸切り技法(ロクロ右回転)によって切り離されている。外面に再調整は認められない。内面は一部にヘラミガキも施されるが、ごく粗雑であり、その方向も放射状、平行といった規則性がみられない。大部分はナデ状の調整がなされている。さらに黒色処理されている。

法量はいずれも口縁部を欠くため不明である。色調は、外面でみると内面黒色処理されている影響もあってか黒ずんでいるが、断面で胎土を観察すると澄色の色調を呈するものが多い。 高台付坏 製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部まで直線的なものと体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部で外反気味になるものがある。底部の切り離し技法は高台接合の際のロクロ調整によって不明である。高台は断面三角状を呈しごく低い。

内面の器面調整、色調は坏と同様の特徴をもつ、法量は第 14 図のように赤焼土器坏・高台付 坏の大形のものと同程度である。

#### 獲

製作に際しロクロを使用するものと使用しないものとがある。両者とも全体の器形は不明で ある。後者はごく粗雑につくられている。

なおロクロ不使用の破片での体部調整は内外面刷毛目の1点を除きすべて外面へラケズリ、 内面ナデである。

#### 〈赤焼十器〉

器形には坏と高台付坏があり、それぞれに大小の別がある。全体にぶ厚く、すべて製作に際 しロクロを使用している。ロクロの回転方向は右である。

内外ともロクロ調整痕が明瞭で、器面の特に外面ではロクロ調整による低い稜が数段つくがこの稜は鋭くはなく丸味をもつ。底部切り離し後、底部中央に粘土をつめ込んだ跡のみられるものがあり、補修したと考えられる。色調は内外、胎土とも同様で、にぶい橙色が最も多く他も橙色が大半を占める。また体部に粘土積み上げ痕のみられるものがあり、粘土積み上げ後ロクロ調整し、底部を切り離すという行程を示している。

坏はすべて底部の切り離しが回転糸切り技法によるもので、内外面ともに再調整はみられない。大形のものは体部から口縁部まで丸味をもって立ち上がるが、細部の形態は多様である。法量は口径が13~16cm、器高が3.7~5.0cm、底径が4.8~7.1cm の範囲内にある。小形のものは低平で体部から口縁部までが短い、内面にスス状炭化物の付着したものがあり、燈明皿としての用途を想定させる。法量は口径が8.0~10.8cm、器高が1.6~2.9cm、底径が4.1~6.6cm の範囲内にある。

高台付坏は台部の形態では台部が中空で付け高台のものと、台部が中実で坏部と同時に整形され高台底面が切り離されてきるものとがある。

前者には大小の別があり、大形のものは、体部は直線的に立ち上がるが、口縁部は変化するものがある。高台はわずかに開き、端部に向かって細まるが土師器高台付坏より高い。法量は坏部でみると口径が15.6~17.2、器高が3.6~4.8cm、底径が6.4~7.6cmの範囲内にあり、口径は大形の坏よりさらにいくぶん大きめである。小形のものはほぼ直立し、坏部の割に大き目の高台がつく。法量は坏の範囲内におさまる。

後者は坏、前者の高台付坏と比べて坏体部から口縁部は薄く、丸味をもって立ち上がり、内

外面とも凹凸なくなめらかに仕上げられている。台部は中実で回転糸切り技法によって切り離されている。法量は坏部だけでみると口径は大形坏より小さく、小形坏よりわずかに大きい。 器高は大形坏と変わらない。

#### 〈須恵器〉

わずかに甕の口縁部が図示できただけである。破片では他に壺が数点出土している。甕の体部片は外面にすべて平行叩き目がみられ、内面は平行・青海波・凹のおさえ、ナデが観察され器面調整の種類は少ない。壺は頚部、体部上半の小破片である。

以上、共伴関係のみられた土師器、赤焼土器、須恵器についてその内容を述べた。このうち 赤焼土器についてはすでに上新田遺跡の報告(小井川:1981)の中で、従来県教委が使用して きた「赤焼土器」設定の規準が誤りであったと指摘され、外面に再調整の加えられたものも含め、その器形は坏類等小型品に限るべきだとしている。さらに焼成方法の共通性から赤焼土器 は本来土師器としてとらえられるべきものであり、したがって「赤焼土器」の名称は残しながらも土師器のうち坏等小形品の中で内面のヘラミガキ、黒色処理が伴わないものと規定しなおしている。

この見解は土師器焼成遺構の確認と同遺構内における共伴関係をともに提示されており、また本遺跡の場合でも土師器と赤焼土器には胎土、色調等に強い類似性がみられ、異なった焼成方法による産物とは考えられないことから本書においてもこれに従うことにする。

さて、上記の土器群は、土師器が製作にロクロを使用していることから表杉ノ入式(氏家: 1967)に比定される。表杉ノ入式の土師器については近年報告例が増加し、その中でいくつかの変遷が指摘されている。それらを簡略にまとめると、基準は主に坏の変化におかれており、①底部切り離し後再調整が加えられた坏を含む土器群、②再調整が加えられるものと、回転糸切り無調整の両方の坏を含む土器群、③回転糸切り無調整の坏を含む土器群、との三段階があり、この順に変遷すると理解され、さらに細かな変遷が検討されている。

この三段階に比較すると本遺跡の土器群はいずれにも比定され得ない組成のものであり、さらに新しい時期に属すると考えられる。

また内面黒色処理された坏類では作りが粗雑であり、内面のヘラミガキが部分的にしか施されないこと、高台付坏では高台がごく低く形骸的なものとなっていること、甕でも器形・調整ともに粗雑につくられていること等からみて、表杉ノ入式の中でも末期に位置付けられそうである。そしてその実年代は、岩手県南部において、平泉藤原氏の時期の所産とされる土器に、本遺跡出土の土器が強い類似性が認められることから12世紀頃としておきたい。

岩手県南部においては、同時期の土器を出土する遺跡が数多くみられる。それらの土器は大きく二者がみられる。一方は平泉藤原氏関連の寺院跡等から発見されているもので、主として

ロクロ不使用とされる丸底の坏類から成る。他方はそのほかの遺跡から出土しているもので、 主としてロクロ使用、平底で回転糸切り未調整の坏から成る。後者はさらに法量の比較的大き いものから小さいものへ変遷するとされており、小形化したものが、前者ロクロ不使用の土器 と並行する時期に比定されている。

これに従えば、本遺跡の土器はロクロ使用の比較的大きい部類に属する法量のものであるから、同土器群期より後出するものがさらに存在すると想定されるが、上記の変遷は現時点では明確な根拠のもとに提示されてはいない。

前述のように、本遺跡の土器組成は土師器坏・高台付坏・甕、赤焼土器坏・高台付坏、須恵器甕から成る。土師器甕にロクロ使用、不使用の両者がみられるほかは、すべて製作にロクロを使用している。坏類の底部は回転糸切り、無調整である。赤焼土器坏類には大小の別がみられ、また高台付坏では大形・小形の中間的な法量をもつ、つくり出しの高台部をもつものがみられる。

同様な土器を出土する遺跡は県内では少なく、合ノ山遺跡(千葉・阿部:1980)、中平遺跡(太田昭夫:1979)、多賀城跡(岡田、桑原:1974)明神脇遺跡(渋谷正三:1980) などにすぎず、いずれも土器組成は不明である。

この土器群を表杉ノ入式期内における土器変遷過程の中に位置づけると、その末期において 大きな変化が生じていることがわかる。

第1は赤焼土器に大小の別が生じる点である。これは大形のものが表杉ノ入式に属する坏類とほぼ同様の法量をもつものであるから、小形のもの(小形皿)が新たに土器組成に加わったとみることができる。この小形皿は大形のものとは機能に違いがあるとみるべきで、一部燈明皿としての使用をうかがわせる痕跡の認められるものもあるが、坏類の中で占める数量の割合が多いことまた他遺跡では竪穴住居跡から出土している例もある(伊東他:1968、太田:1979)ことからすべてが燈明皿とは考えにくい。他の日常的機能についても検討する必要があろう。

第2は須恵器は坏が消失し、甕のみが存続する点にある。これは上新田遺跡の報告でも指摘されているように、須恵器小形品の代用として発生した赤焼土器が最終的には主体となって須恵器にとって変わったと考えることができ、なお甕が残るのは、土師器では製作困難な大形品の需要にこたえるためではないだろうか。

第3に赤焼土器と土師器の量比が逆転する点である。赤焼土器が須恵器小形品の代用品であるとすれば、坏類で内黒のものと赤焼土器(あるいは須恵器坏)との間に用途の違いがあるはずでその量比が逆転することは土器使用という面での生活内容に変化が生じない限りにおいては内黒土師器坏と同様の機能をもつ他の器を考えなければならない。そして現実に発見されている土器類の中に、それに相当するものが認められないことから木製品であったろうと推測され

る。

### 2. 遺構について

遺構は溝状遺構と、ほかにピットが少数検出された。ピットの時期、性格は不明である。

溝状遺構は2本あり、第2溝状遺構の年代は堆積土上層(第1層)が人為的に埋められた状況を呈しており、同層の出土遺物は表杉ノ入式期(=平安時代)末葉の年代が与えられたことから、上限を同期に求めることができる。構築時期については明確にできないが、堆積土下層(第2層)が自然堆積とみられることから、上層出土の遺物の年代よりいくぶん古いものと思われる。第1溝状遺構も出土遺物からほぼ同時期であろう。第1溝は等高線に沿って東西にのび、第2溝は等高線に直交して斜面をのぼり、途中でほぼ直角に折れ曲って等高線に平行してのびる。第2溝はさらに続くと思われる。両溝は折れ曲るか否かの違いはあるが、直線的な部分が多く等高線に平行、あるいは直交するという点での共通性がみられ、また断面形、壁、床面の状況や規模も近似している。したがって、両者が一体として使用されたかどうかは不明であるが、類似した性格を目的として構築されたと考えられる。

その性格は、溝内堆積土に水成の堆積がみられず、また伸びる方向と地形との関係からみて 単に排水など水の流れを目的としたものとは考えにくい。排水などでないとすれば区画の施設 などが想定される。また第2溝に土器とともに大小の河原石、礫や焼土も廃棄されていること は、溝の遠くない所から運ばれたと考えられ、今回他の遺構が検出されなかったこと、第2溝 の続く方向からすれば廃棄した土器を本来使用していた施設は第1区の東側斜面に位置するの ではないだろうか。

このように第2溝による1つの区画がありえたとしても、なお第1溝との関連は不明であり 両者を含めた性格つまり遺跡を明らかにすることはできなかった。今後同時期の類例の増加を 待って、さらに検討を加える必要がある。

- 注1 御所内遺跡 (太田:1980)、西原遺跡 (熊谷:1980) など
- 注2 手取・西手取遺跡 (早坂・阿部:1980)、青木遺跡 (小川:1980) など
- 注3 藤屋敷遺跡 (加藤・佐藤: 1980)、宮下遺跡 (佐々木: 1980) など

### Vまとめ

植田前遺跡は、白石川によって形成された河岸段丘上に立地する。

調査の結果、平安時代末葉の溝と土師器、赤焼土器、須恵器が発見された。

遺跡の性格としては、溝遺構とその配置から区画の施設である可能性を考えて一般集落とは異るものを想定したい。

なお、東方約 500mの明神脇遺跡において、同時期にごみ捨穴が掘られており、土器などの廃棄という面で共通していることは興味深い点である。

#### 引用·参考文献

阿 部 義 平 (1974):「東国の土師器と須恵器-多賀城外の出土土器をめぐって-」 帝塚山考古学No.1

阿 部 博 (1980) : 「台ノ山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第62集

千葉 宗 久

伊 東 信 雄 (1957) : 「古代史」宮城県史 I

伊藤玄三(1968):「岩手県金ヶ崎町西根古墳と住居跡」金ヶ崎町教育委員会

草間俊一他

伊東玄三(1960):「宮城県青木の弥牛遺跡と出土土器」『東北考古学第1輯』

氏 家 和 典 (1957) : 「東北土師器の型式分類とその編年」 『歴史』 第14 輯 東北史学会

(1961) : 「土器」『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』所収 伊東信雄編

(1967):「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって一奈良・平安期土師器の諸問題-」『山形県の考古と歴史』柏倉亮吉教授環暦記念論文集刊行会

太 田 昭 夫(1979):「山中遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和 53 年度分)』宮城県文化財調査報告 書第 57 集

(1980 所:「御所内遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第63集

岡 田 茂 弘 (1974) : 「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要 I 』多賀城跡調査研究所

桑原滋郎

小笠原 好 一 (1976) : 「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」 『東北考古学の諸問題』 東北 考古学会編

小川淳 — (1980):「青木遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書第71集

小野寺 祥一郎(1979): 「五輪C遺跡」宮城県文化財調査報告書第61集

加藤 孝(1954):「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論文集V』宮城学院女子大学

加藤道男(1980):「藤屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集

佐藤 好一

加藤道男(1972):「植田前遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(白石市・柴田郡村田町地区)』 宮城県文化財調査報告書第25集

草 間 俊 一他(1971):「岩手県江刺市瀬谷子遺跡第3次緊急調査報告」江刺市教育委員会

熊 谷 幹 男(1980):「西原遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集

桑 原 滋 郎 (1969) : 「ロクロ土師器坏について」 『歴史』 第39輯 東北史学会

(1976) : 「須恵系土器について」『東北参考古学の諸問題』 東北考古学会編

小井川 和 夫(1976):「糖塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)』宮城県文化財調査報告書 第53集

(1981) : 「上新田遺跡」 『上新田遺跡、長者原遺跡』 宮城県文化財調査報告書第 集

斉 藤 吉 弘(1978):「北沢遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第56集

真 山 悟

佐々木 安 彦 (1980) : 「宮下遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第63集

渋 谷 正 三 (1980):「明神脇遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書第71集

白 石 市 (1976):「白石市史」考古資料篇

(1979) : 「白石市史」 I 通史篇

白石市教委(1972):「鷹巣古墳群発掘調査概報」白石市文化財調査報告書第12集

土 岐 山 武 (1990) : 「安久東遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書VI』宮城県文化財調査報告書第72集

中 橋 彰 吾 (1978) : 「観音崎遺跡調査報告書」 白石市文化財調査報告書第 18 集

清 野 俊太郎

丹 羽 茂 (1972) : 「松田遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(白石市・柴田郡村田町地区)』宮 城県文化財調査報告書第25集

沼 山 源喜治 (1968):「北上市出土土師器考-北上川中流流域を中心として-」『北上市史』第一巻

早 坂 春 -(1980) : 「西手取遺跡、手取遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書II』 宮城県文化財調査報告 阿 部 恵 書第63集

文化財保護委員会(1954):「無量光院跡」

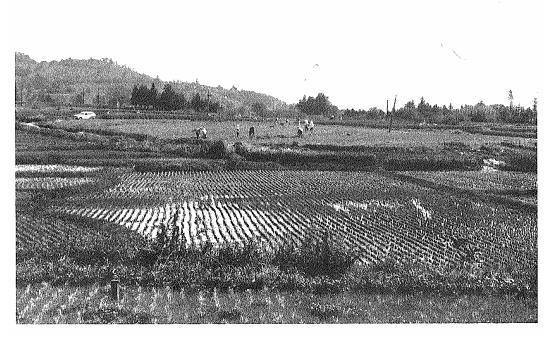
藤 島 亥治郎(1961):「平泉一毛越寺と観自在王院の研究」東京大学出版会

森 貢 喜(1980):「田中・谷津川遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県文化財調査報告書

第64集

# 写 真 図 版

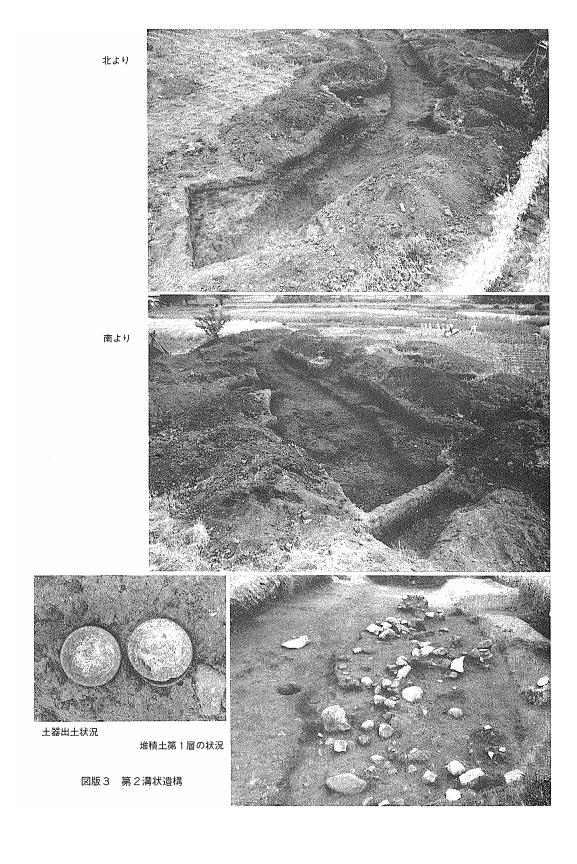


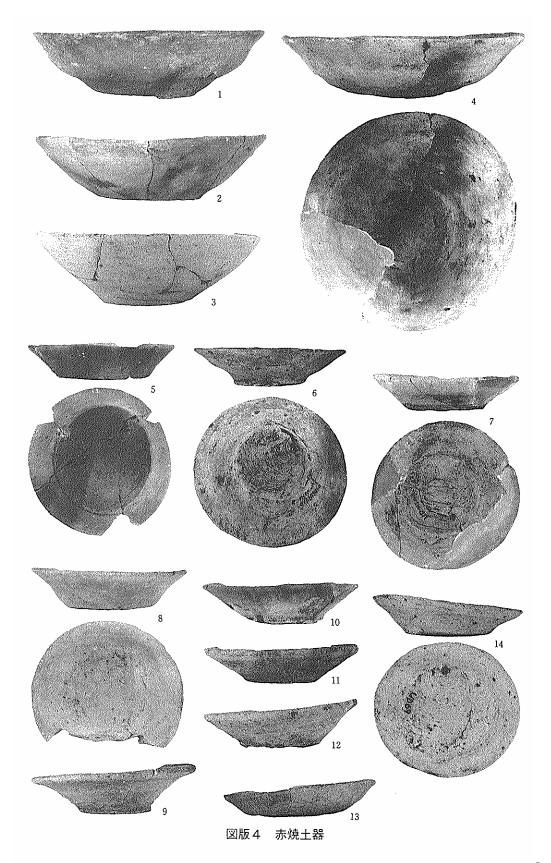


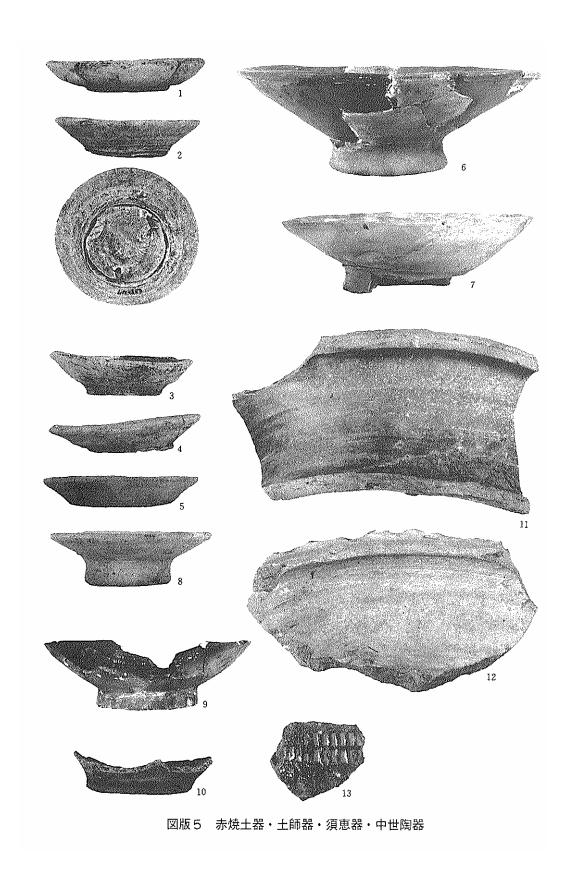
図版 1 上:遠景 下:近景

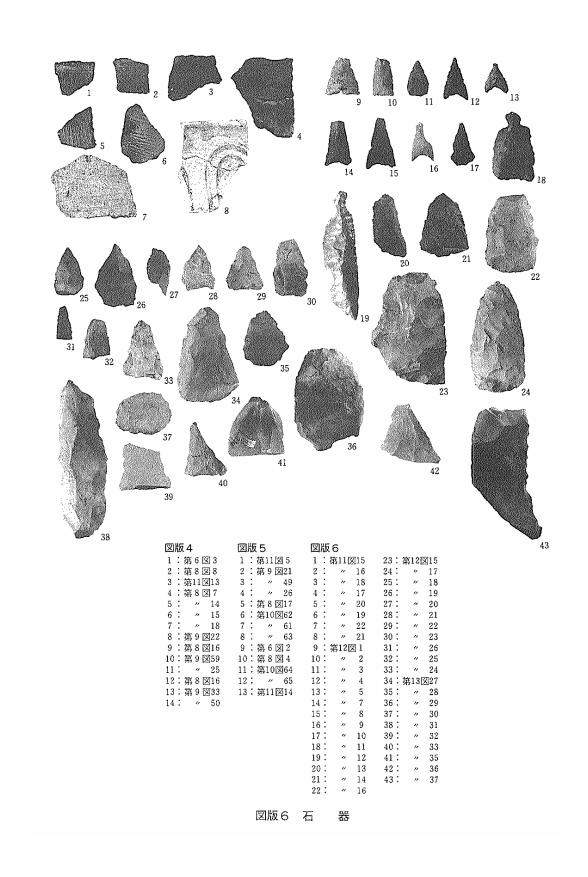


図版 2 第 1 溝状遺構 上左: 西より 下: 東半西より 上右: 東より









(2) 家老内遺跡

# 目 次

Ι.	<u> 1</u>	置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	43
Π.	訓	査の方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	44
	1.	調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	44
2	2.	調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	44
Ш.	务	見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	49
	1.	基本層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	49
2	2.	竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	49
;	3.	井戸跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	66
4	4.	焼け面・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	68
ļ	5.	掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	69
(	3.	ピット群・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	70
,	7.	堆積層出土の遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	73
IV.	老	<u>嫁</u> <sup>.</sup>	76
	1.	土器の分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	76
4	2.	出土土器の年代と問題点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	79
;	3.	遺構の特徴と年代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	80
V.	J	とめ······	82

# 調査要項

遺跡所在地:宮城県白石市福岡深谷字家老内前

遺跡記号: KR (宮城県遺跡地名表登載番号: 02075)

調査期間:昭和46年5月14日~9月4日

調 査 面 積:約7,500 ㎡ 発 掘 面 積:約2,070 ㎡ 調 査 員:文化財保護室

志間泰治・氏家和典・藤沼邦彦・白鳥良一・岩渕康治・佐藤庄一

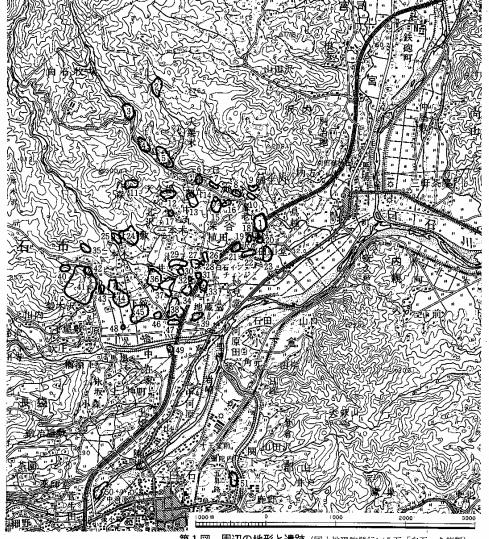
調査補助員:斉藤吉弘・七戸貞子

# I. 位置と環境

家老内遺跡は白石市福岡深谷字家老内前に所在する。国鉄東北本線白石駅の北方約 4.5 km、 青麻山の南東麓にあたる地点である。

本遺跡は白石低地の北西部に位置する段丘上に立地している。周辺の地形をみると、遺跡の 北側を平家川、南側を源氏川が東流して白石川に注いでおり、その結果南北に続く段丘が沢に よって分断され、東西に長い舌状の地形になっている。標高は50~47mで、東へ緩やかに傾斜 しており、現状は果樹園や畑地として利用されている。

(位置と環境については「植田前遺跡」の第 I 章を参照されたい。)



第1図 周辺の地形と遺跡(国土地理院発行1/5万「白石」を複製)

	第1表	遺	跡	_	名	表	
别	野 代		26			前遺跡	
落 路	縄文(前·中)·奈良·平安		.27	100	六 角	遺跡	ť

速防	丑辞备号	遗辞名	立地	種	81	時 代	26	071	植田前遺跡	台 地	包含地	奈良・平安
1	02075	家老内遺跡	台 地	集 落	路	縄文(前·中)·奈良·平安	.27	100	六角遺跡		包含地	奈良・平安
2	092	井戸遺跡	丘陵斜面	包含	地	縄文(前·中)奈良·平安	28	227	赤沼遺跡	台 地	包含地	楓 文
3	090	曲木坂下遺跡	丘陵斜面	包含	地	奈良・平安	29	097	湯ノ口遺跡	台 地	包含地	縄文(前・後)・奈良・平安
4	089	長久保遺跡	丘陵斜面	包含	地	奈良・平安	30	096	下見前遺跡		包含地	縄文(前)
5	088	大鹿野遺跡	丘陵斜面	包含	地	機文(中)·奈良·平安	31	102	養毛遺跡			縄文(早)·奈良·平安
6	087	掘切遺跡	丘陵斜面	包含	地	柯文(後)	32	095	前原北遺跡	台 地	包含地	縄文(中)
7	081	堰下遗跡	丘陵斜面	包含	地	縄文(中)·奈良·平安	33	094	松田遺跡	台 地	集落跡	縄文(早)·労生·奈良·平安
8	080	笊内遗跡	丘陵斜面	包含	地	奈良・平安	34	320	御所内遺跡	台 地	包含地集落跡	縄文(早)・奈良・平安
9	079	辰山遺跡	丘陵斜面	包含	地	奈良・平安	35	317	岩見柴遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(中)
10	077	大黒天遺跡	台 地	包含	地	奈良·平安	36	312	高野遺跡	台 地	包含地製鉄跡	縄文(早・前・中・後)・奈良・平安
11	108	八森山造跡	丘陵斜面	包含	地	穏 文	37	313	荒井遺跡	台 地	包含地製鉄跡	縄文(前·中·後·晚)·弥生·奈良·平安
12	107	大久保遺跡	丘陵斜面	包含	地	縄文(後)·弥生	38	300	ざわ遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(早)
13	085	五輪坂遺跡	丘陵斜面	包含	地	縄文(中)·奈良·平安	39	305	地藏堂遗跡	台 地	包含地	縄文(中)
14	084	長雄遺跡	丘陵斜面	包 含	地	奈良·平安	40	049	青笹遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(中)
15	083	別当内遺跡	丘陵斜面	包含	地	柯文(中)·奈良·平安	41	198	八宮館跡	丘陵	城館	中世
16	078	鴨內遺跡	丘陵斜面	包含	地	奈良・平安	42	048	杉の下北遠跡	丘 陵 麓		奈良・平安
17	106	台 遗 跡	台 地	包含	地	縄文(中)	43	047	杉の下前遺跡	台 地	包含地	縄文(後)·奈良·平安
18	072	明神脇遺跡	台 地	包含	地	奈良・平安	44	309	三本木前遺跡	台 地	包含地	縄文(前·後)奈良·平安
19	068	沢 遺 跡	台 地	包含	地	奈良・平安	45	307	下館遺跡	台 地	包含地城館	縄文(後)·奈良·平安·中世
20	067	白山堂遺跡	台 地	包含	地	奈良・平安縄	46	311	道内原遺跡	台 地	包含地	奈良、平安
21	069	引桜遺跡	台 地	包含	地	褪文(中·晚)	47	327	地藏堂 B遺跡	台 地	包含地	縄文・平安
22	066	鳥越遺跡	台 地	包含	地	奈良・平安	48	046	堂田廃寺跡	台 地	寺 跡	平 安
23	376	唐沢屋敦造跡	丘陵麓幕状地	包含	地	奈良・平安	49	036	的場遺跡	沖積平野	包含地	規文(中)·奈良·平安
24	315	間山内遺跡	丘陵斜面	包含	地	縄文(前·中·後)·弥生	50 .	032	营生田遺跡	段 丘		縄文(中・後)
25	326	上屋敷B遺跡	丘陵斜面	包含	地	縄文(前・中)	51	.322	视音崎遺跡	台 地	集落跡	奈良・平安

# Ⅱ.調査の方法と経過

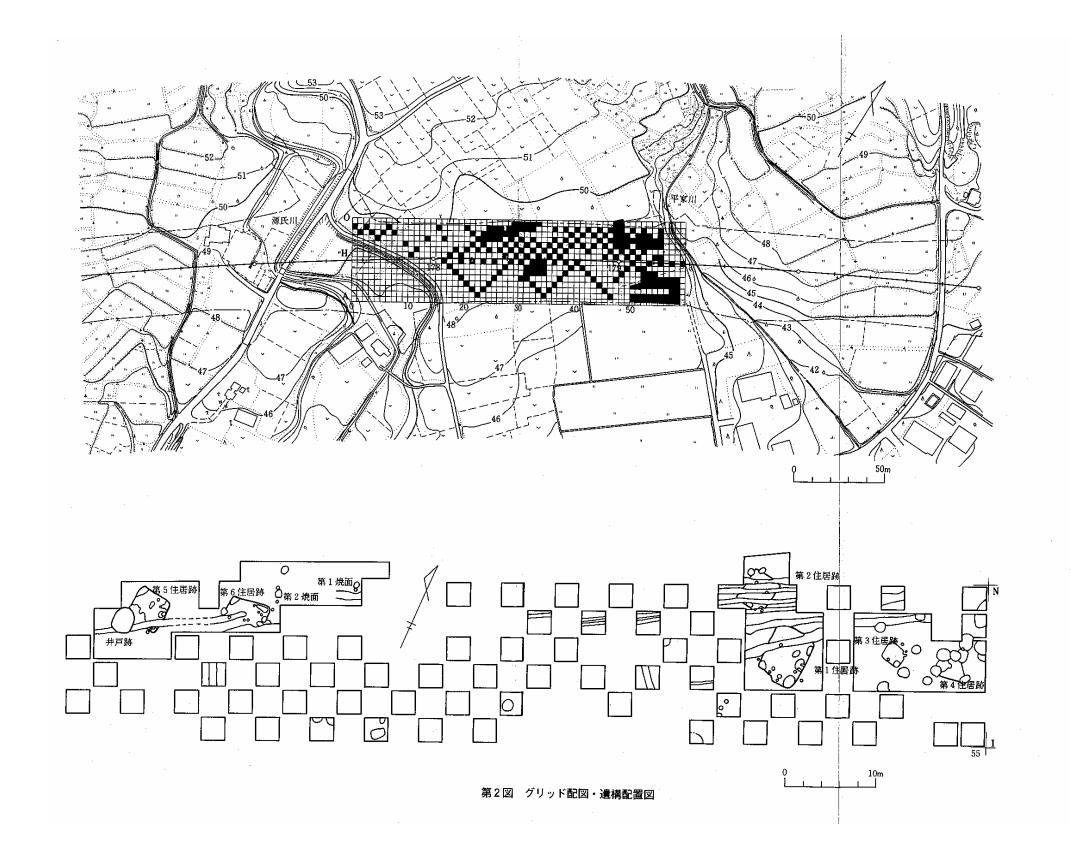
# 1. 調査の方法

東北自動車道は本遺跡の立地する丘陵斜面を南西〜北東方向にのびている。調査区の設定は 自動車道の中心杭を基準に行なった。すなわち、中心杭STA178+20 とSTA178+40 を結ぶ 線およびそれに直交する線を基準として3m単位にグリッドを設定した。グリッドは中心杭に 沿った方向を数字で、直交する方向をアルファベットであらわし、その組み合せをもって名称 とした。

発掘に際しては、3m単位のグリッドを随所に設定して遺構の存在を確認し、さらに遺構の 検出状況に応じてトレンチの拡張を図った。検出された遺構については精査終了後遣り方ない し平板測量によって平面図を作成し、レベルを記入している。また、断面形態や堆積土の状況 を把握するために断面図を作成している。これらの縮尺はすべて1/20である。この他、図面作成 と併行して写真撮影を行なっている。

# 2. 調査の経過

調査の開始は昭和46年5月14日である。まず基準杭打ち、グリッド設定を行ない、翌日から 粗掘りに入った。5月下旬におおよその基本層位が判明したのでその堆積状況を図化した。ま



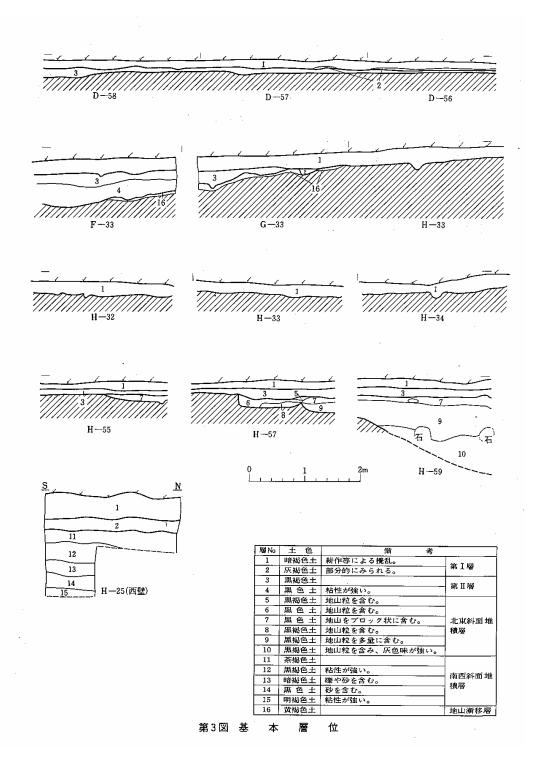
た、それと併行して、第1、第2住居跡、溝およびピット群が検出されたため、必要に応じて トレンチの拡張を行なった。

6月に入りこれらの遺構の精査を開始したが、一方それと前後して第3、第4、第5、第6 住居跡が新たに検出された。なお、6月下旬からは近接する自動車道関係遺跡である引桜、明 神脇両遺跡の調査が着手されたため、以降はこれらの遺跡と発掘作業を兼務することになる。

7月は遺構の精査を進行させ下旬に至ってこれらの実測図作成に入った。一方では第7、第8住居跡が検出されている。なおこの間、精査が一段落した7月17日に遺跡の公開を図るため現地説明会を催している。

8月には第7、第8住居跡の精査および実測図の作成を行ない、同時に第1~第6住居跡の 補足調査をし、不備な点、不明な点等を補った。

以上の経過を経て一切の作業を終了したのは9月4日である。



# Ⅲ. 発見された遺構と遺物

調査の結果、本遺跡では竪穴住居跡6軒、井戸跡1基、焼け面2基、掘立柱建物跡8軒、ピット群の遺構が検出され、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、赤焼土器、陶磁器、石器、鉄製品等の遺物が出土している。

# 1. 基本層位

本遺跡の堆積土は基本的に第Ⅰ~第Ⅲ層の3枚の層からなっている。ただし、調査区の北東を流れる平家川に面する斜面および南西を流れる源氏川に面する斜面では第Ⅱ層下に3~5枚の堆積層が認められる。以下各層について若干の説明を行なうことにする。

第 I 層は調査区を覆う表土である。厚さ 10~40cm ほどの暗褐色土層で、その大部分が耕作等により攪乱されている。 堆積層出土遺物の大半はこの層から出土している。

第Ⅱ層は厚さ10~40cmの黒褐色ないし暗褐色土層で調査区中央部を除く部分に分布している。 この層は土性の違いから2枚の層に細分される。層中からは土師器、須恵器が少量出土している。

部分的な堆積層として、北東斜面では第II層下に厚さ 10~70cm の黒褐色土層が3枚認められる。3層とも黄褐色土の細粒が混入しており、遺物は含まない層である。一方、南西斜面では第II層下に厚さ30~50cmの5枚の層が認められる。色調は上層から暗茶褐色、黒褐色、暗褐色、黒褐色、明褐色である。このうち下位の4枚は砂と粘土との互層になっており、近接する源氏川の作用によって水成堆積したものと考えられた。これら5枚の層からは遺物は出土していない。

# 2. 竪穴住居跡

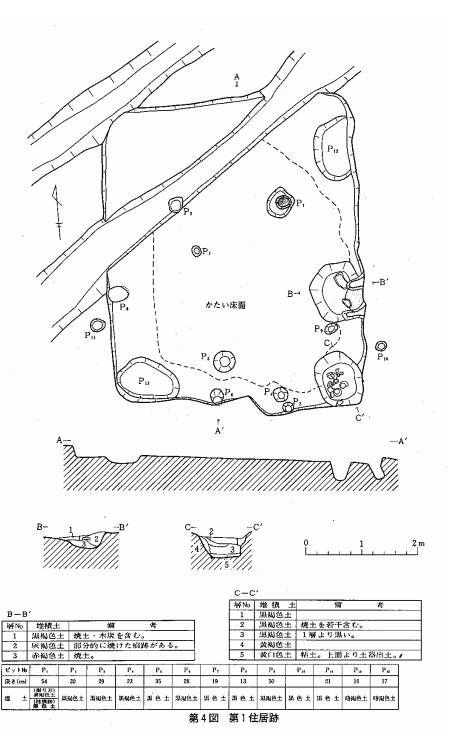
#### 第1住居跡

(位置・確認面) L-48 区の地山面で確認された。

(重複) 後世の2本の溝によって切られている。

(平面形) 長方形を呈する。規模は長軸 5.8m、短軸 4.6mで長軸の方向はほぼ真北である。

- (壁) 溝によってこわされている部分を除き各辺とも残存している。壁高は最も高い北辺の中央で20cmである。地山を壁としており、立ち上がりは垂直に近い。
- (床) 地山を床としている。床面の状況は中央部が叩きしめたようにかたくしまっているの に対し、周縁部はやわらかくなっている。
  - (柱穴) 住居内から11個、住居外から2個のピットが検出されている。このうちピット1、



50

2、3はその配置から主柱穴である可能性がある。ただし、南西隅に対応する柱穴は検出されていない。なお、ピット1からは柱痕跡が確認されている。

(カマド) 東壁中央のやや南寄りに付設されている。燃焼部のみで煙道部は検出されない。 軸方向は推定であるがほぼ真東になるものと思われる。燃焼部の規模は軸方向の長さで約30cm、幅が約70cmである。内部は焼土が堆積しており、両側壁の内面から底面にかけて赤変している。 底面の中央手前寄りには高さ約10cmの石が据えられており、これは表面が赤変している状態からカマドの支脚とみられる。また、右側壁の下部には厚さ約8cmの平たい石が横に据えられている。性格は明らかでないが、原状を保っているところから側壁の素材の一部とみられる。

カマドの構築方法は粘土貼り付けによるものである。すなわち、まずカマドの付設位置に径約 100cm、深さが約 30cm のピットを掘り込んだのち、なかに焼土を敷き詰め、その上面に粘土をのせて側壁を構築している。

(貯蔵穴状ピット) 住居跡の南東隅から検出されている。これはカマドの右脇に位置する。 平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸が約 100cm、短軸が約 80cm、深さが約 40cm である。壁の立ち上がりは急で底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色土や黄褐色土からなり、5枚の層に分かれる。ピット内からは土師器が数多く出土しており、それらの多くは最下層である第5層上面に集中している。

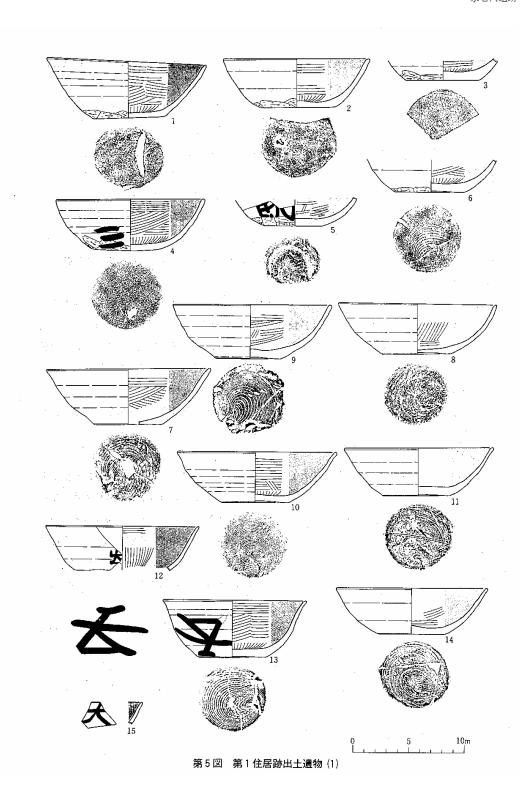
(出土遺物) 床面、カマド内、貯蔵穴状ピット、住居内堆積土などから土師器、須恵器、赤 焼土器などが出土している。

#### 十師器

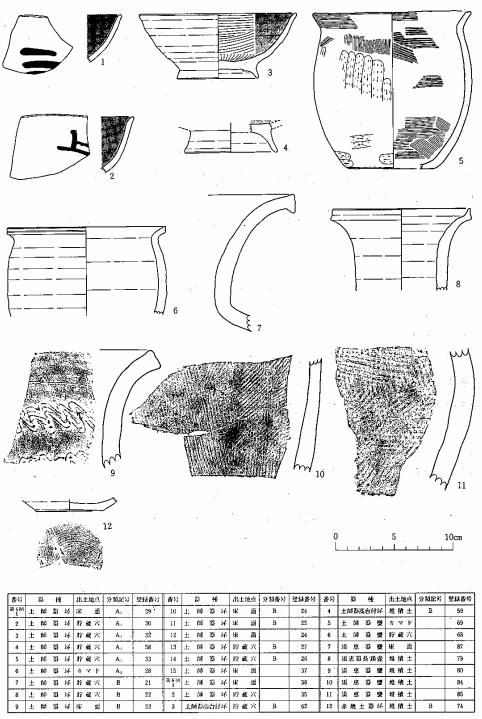
坏(第5図、第6図1~2) いずれも製作に際しロクロを使用している。器形は底部から体部まではおおむね丸味をもって立ち上がり、口縁部では直線的に外傾ないし外反する。これらは再調整のあるもの(第5図1~6)とないもの(第5図7~11・13・14)とに分かれる。前者は体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが加えられるもので、底部ではそれが全面(1~5)もしくは周縁部(6)にみられる。これらのうち5・6は底部に回転糸切り痕を残している。内面の調整はすべてヘラミガキ、黒色処理である。後者は再調整がなく、底部に回転糸切り痕を残すものである。内面の調整はヘラミガキ、黒色処理である。

〈墨書〉 以上の坏のなかに墨書されているものがある。すべて体部に記されたもので、判読可能なものでは「天(天)」・「大」・「上」・「三」がある。

高台坏付(第6図3・4) 3は体部が丸味をもって外傾し、口縁部でわずかに外反ぎみになる。高台は外方に短く張り出すもので内面には接合部分にナデ調整されている。4は高台の一部が残存したもので全体形は不明である。これは高台が外方に長く張り出している。3・4とも坏部内面はヘラミガキ、黒色処理されている。



52



第6回 第1住居跡出土遺物(2)

甕(第6図5・6) 製作にロクロを使用しないもの(5)と使用するもの(6)とがある。前者は口径と器高がほぼ同じで、体部にややふくらみを持ち口縁部で短く外反するものである。器面調整は口縁部内外面が横ナデ、体部は外面がナデやヘラケズリで内面は刷毛目である。後者は体下半が欠損するものであるが低い器形のものとみられる。体部にふくらみを持ち口縁部が短く外傾している。内外面ともロクロ調整である。

#### 須恵器

甕(第6図7・9~11) すべて破片である。7・9は口縁部破片である。大きく外反するもので、9では外面に3本の沈線からなる波状文が2段に描かれている。10・11 は体部破片で外面に平行叩き目がみられる。

長頚壺(第6図8) 口縁部破片である。頚部は直立ぎみに立ち上がり、口縁部で外反し端部は上方につまみ出される。

#### 赤焼土器

坏(第6図12) 底部破片である。内外面はロクロ調整で底部に回転糸切り痕を残している。

#### 第2住居跡

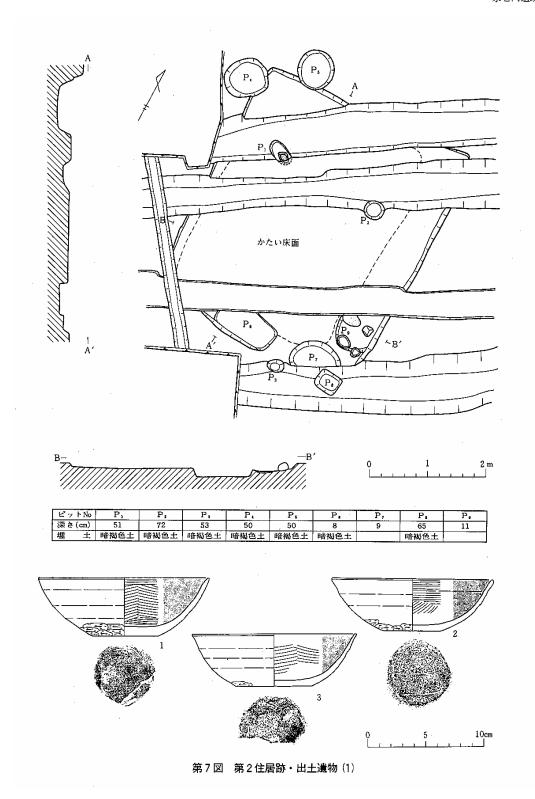
(位置・確認面) N-47 区の地山面で確認された。

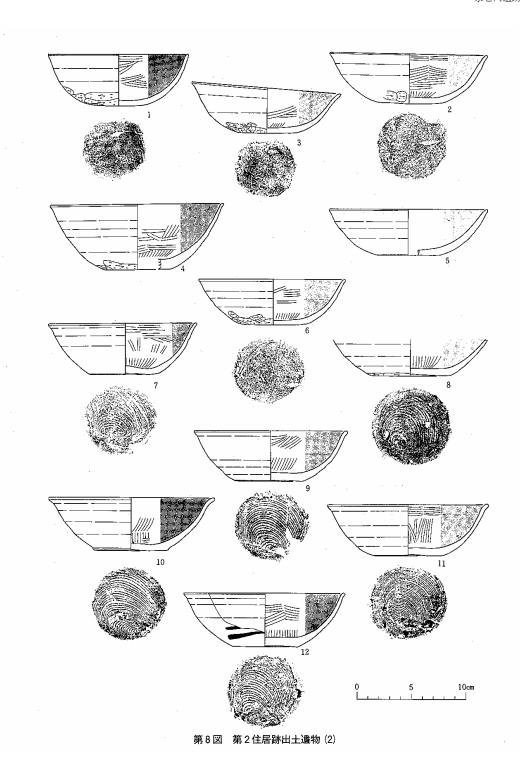
(重複) 後世のピットおよび溝によって切られている。

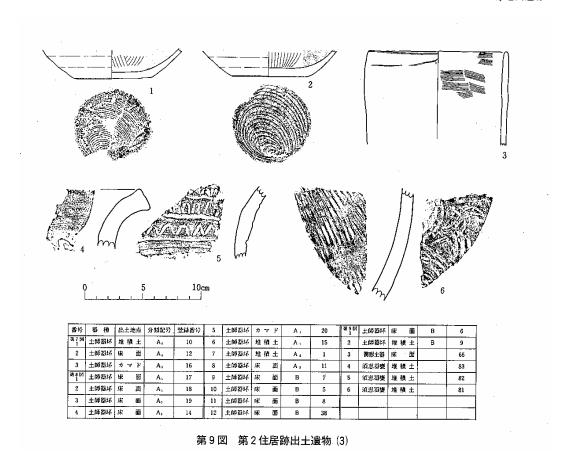
(平面形) 溝によって切られているため失われている部分が多いが、残存部分から長方形を 呈すると思われる。規模は推定で長軸が約4.5m、短軸が約4.0mで、長軸の方向はほぼ真北で ある。

- (壁) 壁高の最も高い北辺の西寄りで17cmである。地山を壁としており、立ち上がりは緩やかである。
- (床) 地山を床としている。床面の状況は中央部がかたくしまっているのに対し、周縁部は やわらかい傾向が認められる。溝でこわされた部分が多い。
- (柱穴) 住居内から4個のピットが検出されている。このうちピット1・2・3はその配置 関係から主柱穴の可能性が考えられる。ただし南西隅に対応する柱穴は検出されていない。
- (カマド) 住居跡の東辺南寄りにおいて深さ約6cmの掘り込みが認められる。底面の一部が焼けており、また、掘り込みの中央および南際に高さ13cmほどの石がそれぞれ1個ずつ配されている。以上の状況から、これはカマドの燃焼部底面が残存したものと考えられ、掘り込み中央の石はカマド支脚と推定される。掘り込み南際の石は明確ではないが、一つにはカマド右側壁の芯に使用された可能性が考えられる。

(貯蔵穴状ピット) 住居跡の南東隅において検出されている。後世の溝によって切られてお







り上部は失われている。平面形は長方形を呈し、規模は残存部の計測であるが長軸40cm、短軸35cm、深さは床面からで50cm である。壁はやや急な立ち上がりを示し、底面は平坦である。堆積土は暗褐色土で、なかに多くの木炭を含んでいる。ピット内からは土師器が出土している。(出土遺物) 床面、カマド、住居内堆積土などから土師器、須恵器、鉄製紡錘車が出土している。このうち鉄製紡錘車については保管中に紛失したため図化できなかった。したがって本書では写真図版で示すにとどめることにする(図版4-上)。

#### 土師器

坏(第7図1~3、第8図、第9図1・2) いずれも製作に際しロクロを使用するものである。器形は底部から体部まではおおむね丸味をもって立ち上がり、口縁部では外反あるいは外傾する。これらは再調整のあるもの(第7図、第8図1~8)とないもの(第8図9~12、第9図1・2)とがある。前者は体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施されるもので、底部全面に及ぶもの(第7図、第8図1~6)と周縁にみられるもの(第8図7・8)とがある。第7図1・3は底部に回転糸切り痕を残している。後者は底部に回転糸切り痕を残したままで

再調整はない。両者とも内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

《墨書》 第8図12の体部に墨書がみられる。「二」または「三」のいずれかと思われるが欠損しているため明らかではない。

筒形土器(第9図3) 製作に際しロクロを使用していない。体部から口縁部にかけての部分が残存するものである。残存形では体部から口縁部まで直立する円筒形を呈している。器体のひずみが著しい。内面の器面調整は口縁部から体部にかけてナデが施されている。外面は不明である。

#### 須恵器

甕(第9図4~6) 4は口縁部破片である。外反するもので外面に波状文がみられる。5 は頚部破片で外面には波状文が3段に描かれており、それぞれは横位の沈線によって区画されている。6は体部破片で外面には平行叩き目、内面には青海波状の押えがみられる。

#### 第3住居跡

(位置・確認面) L-52 区の地山面で確認された。

(平面形) 削平が著しく壁が全く失われているため平面形は明らかでない。しかし床の一部が残存しており、それは東西約2.0m、南北約2.2mの範囲になっている。

(床) 地山を床としており、床面の状況は残存する全面が叩きしめられたようにかたくなっている。

(柱穴) 残存する床の範囲の内外から4個のピットが検出されている。このうちピット1・2・3からは柱痕跡が認められており、柱穴の可能性がある。しかし規則的な配置関係とはいえず住居に伴う柱穴がどうかは明らかでない。

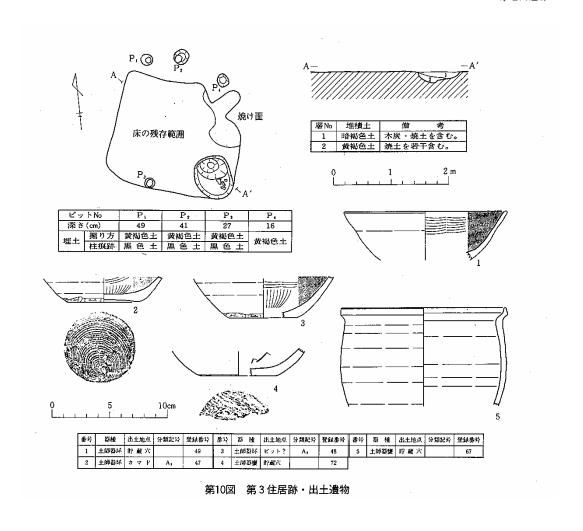
(カマド) 床面の範囲の一部に焼け面が検出された。それは不整形で50×100cmの範囲で認められており、カマドの残痕である可能性が考えられる。

(貯蔵穴状ピット) 焼け面の右隣りで検出されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸が75cm、短軸が60cm、深さが20cmである。壁の立ち上がりは緩やかで、底面は丸味をおびる。堆積土は暗褐色土と黄褐色土の2枚の層からなり、なかに焼土や木炭を含んでいる。ピット内からは土師器が出土している。

(出土遺物) カマド、貯蔵穴状ピット、ピットなどから土師器が出土している。

#### 土師器

坏 (第10図1~3) いずれも製作にロクロを使用している。このうち2・3は体部上半が 欠損している。ともに体部下端には手持ちヘラケズリの再調整が加えられており、底部は再調 整がなく回転糸切り痕を残している。1は底部が欠損するものである。体部はやや丸味をもっ



て立ち上がり口縁部は外傾する。3点とも内面はヘラミガキ、黒色処理されている。

甕(第10図4・5) 5は製作にロクロを使用している。体部下半が欠損しているため全体 形は明らかでないが、体部はやや丸味をもち、頚部で屈曲しながら口縁部は短く外傾するもの である。4は底部の破片である。体部外面にはヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されており、 また底部にはむしろ状圧痕がみられる。

#### 第4住居跡

(位置・確認面) L-54区の地山面で確認された。

(重複) 後世の土壙によって切られている。

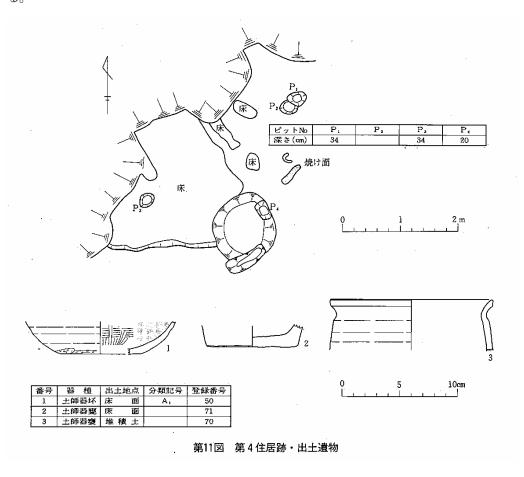
(平面形) 全体形は明らかでないが、壁と床の一部が残存しており、壁の状態から方形を基調とするものと推定される。

- (壁) 南辺の一部が残存している。壁高は保存のよい部分で5cmである。地山を壁としており、立ち上がりはかなり緩やかである。
- (床) 南辺を中心に 2.4×2.0mの範囲で残存している。地山を床としており、床面の状況はかたくしまっている。
- (柱穴) 床面から1個と周辺から4個のピットが検出されている。これらは配置関係に規則性はみられず住居跡の柱穴がどうか明らかでない。
- (カマド) 残存する床の約60cm 東側に焼け面が認められる。上面は削平されているが、カマドの残痕である可能性がある。

(出土遺物) 床面および住居内堆積土から土師器が出土している。

#### 土師器

坏(第11図1) 製作にロクロを使用しているもので、体部下端に手持ちヘラケズリの再調整が加えられており、底部は回転糸切り痕を残している。内面はヘラミガキ、黒色処理されている。



甕(第11図2・3) 3は製作にロクロを使用している。口縁部が短く外反するもので体部 以下は欠損しており不明である。2は底部破片である。磨滅が著しく内外面とも調整は明確で ない。

#### 第5住居跡

(位置・確認面) M-25 区の地山面で確認された。

(重複) 後世の井戸および溝によって切られている。

(平面形) 長方形を呈する。規模は長軸4.7m、短軸3.8mで長軸の方向はN-80°-Wである。

(堆積土) 住居内堆積土は3枚の層に分かれる。第1層は暗褐色土で住居内の全域に分布している。第2層は黒褐色土で住居中央に部分的に分布している。第3層は黄褐色土で住居内全域に堆積しているが、壁際に厚い傾向がみられる。

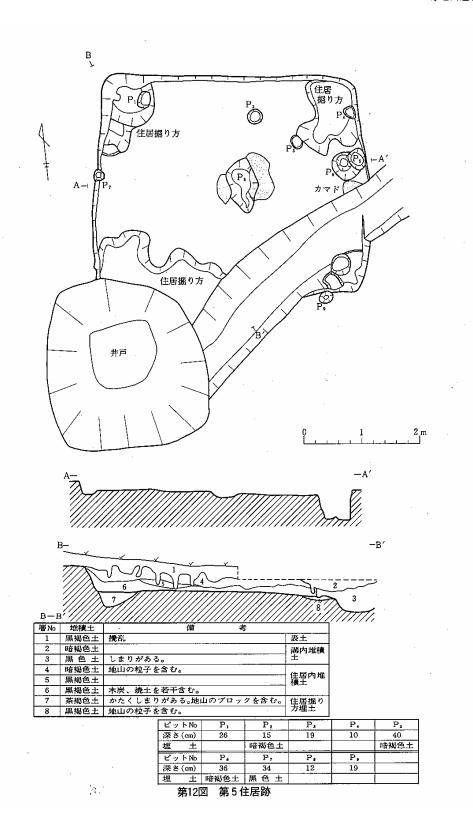
(壁) 東辺と南辺の一部がこわされている。壁高は最も高い北辺の中央で31cmである。地山を壁としており、立ち上がりはおおむね急角度である。

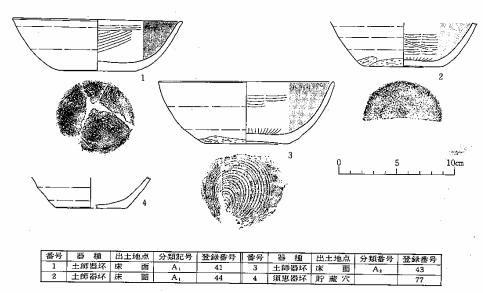
(床) 溝によって一部こわされている。南東隅を除く各隅は住居掘り方の埋土を床としており、他は地山を床としている。掘り方の埋め土は暗褐色土に多量の地山土をブロック状に含むものである。床面の状況は、地山を床とする部分の中央がかたくしまっており他はやわらかい。 (柱穴) 住居内から9個、住居外から1個のピットが検出されている。いずれも柱痕跡は確認されていない。これらは配置関係に規則性はみられず、住居の柱穴かどうか不明である。

(カマド) 東辺のほぼ中央に焼け面が検出されている。焼け面は南半が溝によって切られており、現状は径約20cmの半円状に残存しているが、これはカマドの部分であった可能性が考えられる。 (貯蔵穴状ピット) 住居跡の南東隅から検出されている。カマド推定部分の右脇に位置しており、その一部は溝によって切られている。平面形は楕円形に近い形を呈するもので、規模は長軸が約70cm、短軸が約60cm、深さが約20cmである。壁の立ち上がりは緩やかで底面は凹凸がある。堆積土は主に暗褐色土で3枚の層に分かれており、うち1枚は木炭を含む層である。ピット内からは少量の土師器、須恵器の破片が出土している。

(焼け面) 住居跡のほぼ中央に長軸約90cm、短軸約50cm、深さ約8cmの楕円形を呈する浅い掘り込みが検出されている。焼け面はこの掘り込みに接する床面の一部と掘り込みの東壁に認められる。他に施設はみられず、その性格については明らかではないが、あるいは炉の可能性が考えられる。

(出土遺物) 床面から土師器、貯蔵穴から土師器、須恵器が出土している。ただし貯蔵穴出 土のもので図化できたのは、須恵器坏が1点である。





第13図 第5住居跡出土遺物

#### 土師器

坏(第13図1~3) 製作にロクロを使用している。いずれも体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部はおおむね外傾する。すべて再調整が加えられており、それが1は底部全面に、2は体部下端と底部全面に、3は体部下端と底部周縁にみられる。このうち3の底部は回転糸切り痕を残している。内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理されている。

#### 須恵器

坏(第13図4) 口縁部を欠いている。体部は直線的に立ち上がり、底部には回転糸切り痕がみられる。

#### 第6住居跡

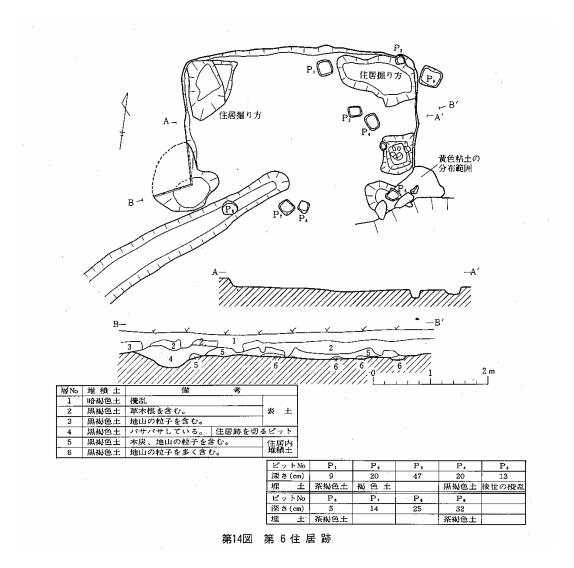
(位置・確認面) N-28 区の地山面で確認された。

(重複) 後世の溝・土壙によって切られている。

(平面形) 溝によって切られているため明確ではないが、残存する部分から方形を基調とするものと思われる。規模は東西軸で約4.0m、軸方向はほぼ真北を指す。

(堆積土) 堆積土は2枚の層に分かれる。第1層は黒褐色土、第2層は地山土を多く含む黄褐色土である。堆積状況は第1層がほぼ全域に堆積し、第2層は壁際を中心とするほか床面にも部分的に堆積している。

(壁) 南辺および東辺、西辺の南半がこわされている。壁高は最も高い北辺の中央やや西寄

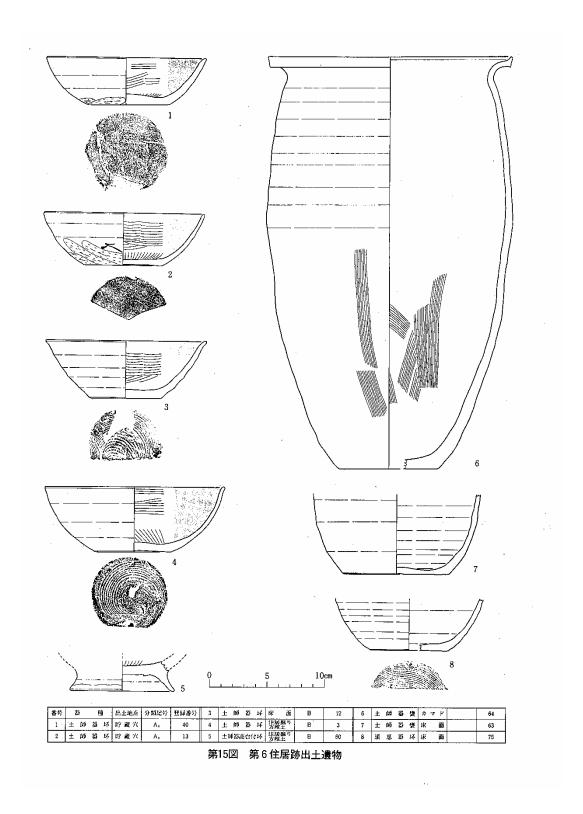


りで約25cmである。地山を壁としており、立ち上がりは急角度である。

(床) 南半が溝によってこわされている。北東隅と北西隅は住居掘り方の埋土を床としており、他は地山を床としている。掘り方の埋め土は暗褐色土に多量の地山ブロックを含んでいる。 床面の状況は地山を床とする部分の中央がかたくしまっているのに対し、壁周縁はやわらかくなっている。

(柱穴) 住居内から8個のピットが検出されている。しかしこれらは配置に規則性がなく、 柱穴かどうか明らかでない。

(カマド) カマドの痕跡と思われるものが東辺で検出されている。溝によって一部こわされているが、東壁の内側に60×50cmの浅いくぼみがあり、そのなかに焼土が認められる。また、壁



の 50cm ほど外側から焼土の部分にかけて、それらを覆うように黄色の粘土が堆積している。このことから焼土の部分はカマドの燃焼部の残痕で、粘土の部分はカマドの側壁あるいは天井であったのが崩壊したものと考えられる。

(貯蔵穴状ピット) 住居の東辺すなわちカマドの左隣りから検出されている。平面形は不整の長方形で規模は長軸が約70cm、短軸が約50cm、深さが約20cmである。壁の立ち上がりは緩やかで底面はほぼ平坦である。堆積土は暗褐色土である。ピット内からは土師器が出土している。

(出土遺物) 床面、カマド内、貯蔵穴状ピット、住居掘り方の埋め土などから土師器、須恵器が出土している。

#### 土師器

坏(第15図1~4) 製作にロクロを使用している。いずれも体部は丸味をもって立ち上がり、口縁部は外傾ないし外反する。ただし3の体部は他に比べいく分直線的である。これらは再調整のあるもの $(1\cdot 2)$ とないもの $(3\cdot 4)$ とに分かれる。前者は体部の下半ないし下端から底部全面に手持ちヘラケズリが加えられているのに対し、後者は底部に回転糸切り痕を残しており再調整はみられない。内面は両者ともヘラミガキ、黒色処理が施されている。

〈墨書〉 2の体部に「大」字の墨書がみられる。

高台付坏(第15図5) 高台部のみ残存したものである。高台は長く外方に張り出しており 内面には回転糸切り痕および接合の際のナデ調整がみられる。坏部の内面はヘラミガキ、黒色 処理されている。

甕(第15図6・7) ともに製作にロクロを使用している。6は長胴形の甕で体部はややふくらみをもち、口縁部は外反し、端部は上方につまみ出される。器面調整は体部外面の下半にヘラケズリやナデ、内面の下半にナデか施されている。磨滅しているためヘラケズリの単位は明確でない。7は体部上半が欠損しており、全体形は不明である。内外面ともロクロ調整である。

#### 須恵器

坏(第15図8) 口縁部が欠損している。体部は丸味をもって立ち上がるもので、底部に回 転糸切り痕を残している。

# 3. 井戸跡

(位置・確認面) M-24 区の地山面で確認された。

(重複) 第7住居跡を切っている。また、第7住居跡を切る溝とも重複しているが、新旧は明らかでない。

(平面形・断面形) 平面形は長軸 3.0m、短軸 2.7mの隅丸長方形を呈し、断面形は深さ約3.5

mの逆台形を呈する。

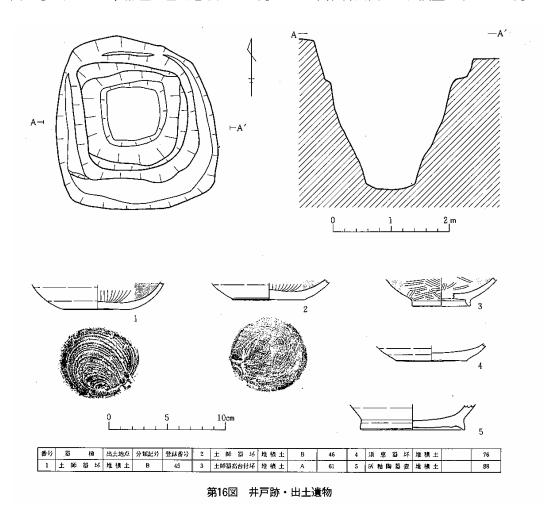
(堆積土) 黒色の砂質土層と褐色の砂礫層との互層になっている。ただし断面形は作成して いない。

(壁・底面) 壁は上位が火山灰層、中位が粘土混りの砂礫層、下位は礫層となっている。急角度で立ち上がっており、上端下 0.6mの部分では幅約 0.3mの明瞭な段が認められる。底面は軸長 0.9mの隅丸方形で礫層になっており、中央部がわずかにくぼんでいる。

(出土遺物) 堆積土中から土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。

#### 土師器

坏(第16図1・2) 製作にロクロを使用している。ともに体部上半が欠損している。底部に回転糸切り痕を残しており、再調整はない。内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。 高台付坏(第16図3) 体部は丸味をもって立ち上がるもので高台は張り出さず短い。内外面ともヘラミガキ、黒色処理が施されている。ただし高台部内面はナデ調整になっている。



67

#### 須恵器

坏(第16図4) 体部上半が欠損している。内外面ともロクロ調整で、底部に回転糸切り痕を残している。

#### 灰釉陶器

壺(第16図5) 底部破片である。短い高台がつくもので、内外面に灰釉が施されている。

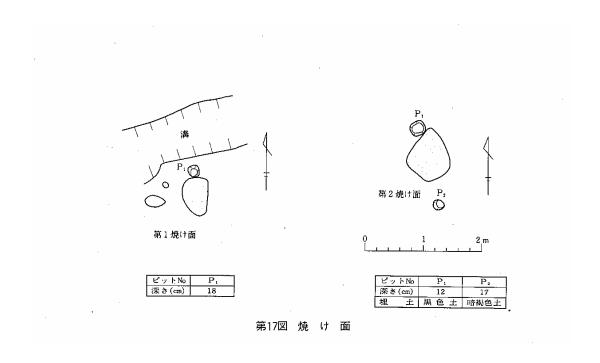
### 4. 焼け面

#### 第1焼け面

N-32 区の地山面で確認されたものである。長軸 60cm、短軸 40cm の楕円形状に焼けており、その部分は周囲よりややくぼんでいる。この他、約30cm 西側に離れた部分にも小さな焼け面が2箇所認められており、これらは検出状況から同一焼け面と考えられる。なお、焼け面の周辺はかたくしまった地山面が断片的に確認されているが、攪乱が著しいためその輪郭や範囲は明確ではない。

#### 第2焼け面

N-29 区の地山面で確認された。長軸 90cm、短軸 70cm の椿円形状に焼けており、その部分は 周囲よりややくぼんでいる。付近にはかたくしまった地山面が数箇所断片的に認められるが、 攪乱のためその輪郭や範囲は明確ではない。



## 5. 掘立柱建物跡

#### 第1建物跡

 $C-51\sim C-54$  区の地山面で確認されたもので、5 間× 2 間の建物跡である。第  $2\sim7$  建物跡と重複しており、このうち第 7 建物跡とは柱穴が切り合っている。しかし新旧は不明である。建物は西側の 2 間分が総柱となっており、建物の方向は $N-50^\circ$  - E である。柱間寸法は柱痕跡が検出できなかった柱穴が多く推定となるが、桁間で北東から 2.1m+2.1m+2.4+2.4m、梁間で 2.5m 等間になるものと思われる。柱掘り方の規模は軸長  $35\sim50$ cmの楕円形で、深さは  $25\sim50$ cm、柱痕跡は径約 20cmの円形を呈する。出土遺物はない。

#### 第2建物跡

 $C-51\sim C-54$  区の地山面で確認されたもので、5 間×1 間の建物跡である。第1・第 $3\sim 8$  建物跡と重複している。このうち第6 建物跡とは柱穴が切り合っているが、新旧については不明である。建物の方向は $N-50^\circ$  - E である。柱間寸法は推定で桁行が2.5m等間、梁間が5.0mになるものと思われる。柱掘り方は軸長 $25\sim50$ cmの楕円形を呈し、深さは $20\sim50$ cmである。出土遺物はない。

#### 第3建物跡

 $C-52\sim C-54$  区の地山面で確認されたもので、3 間×1 間の建物跡である。第 $1\cdot$ 第 $2\cdot$ 第 $4\sim 6$  建物跡と重複しており、まだかなり近接していることから第8 住居跡とも重複している可能性がある。ただし柱穴の切り合いはなく新旧は不明である。建物の方向は $N-50^{\circ}-E$  である。柱間寸法は柱痕跡が検出できなかったため推定によるが、桁間は2.4m等間、梁間は4.2m前後になるものと思われる。柱掘り方は径約35cmの円形で、深さは $20\sim 50$ cmである。出土遺物はない。

#### 第4建物跡

 $C-53\sim C-54$  区の地山面で確認されたもので、2 間×1 間の建物跡である。第 $1\sim3$ ・第 $5\sim6$  建物跡と重複しているが、柱穴の切り合いはなく新旧は不明である。建物の方向はN- $50^\circ$  - E である。柱間寸法は推定で桁行が2.3m等間、梁間は4.3m前後と思われる。柱掘り方は軸長 $35\sim55$ cmの楕円形、深さは $20\sim45$ cm、柱痕跡は軸長約20cmの円形ないし不整円形である。出土遺物はない。

#### 第5建物跡

B-53~C-55 区の地山面で確認されたもので、 $3 \parallel \times 1 \parallel$ の建物跡である。第 $1 \sim 4 \cdot \$6 \cdot \$8$  建物跡と重複している。柱穴の切り合いがないため新旧は不明である。建物の方向はN-45°-Eである。柱間寸法は推定で桁行が 2.6 m 等間、梁間が 3.9 m 前後になるものと思われる。柱掘り方は軸長  $35 \sim 55 cm$  の楕円形、深さは  $20 \sim 40 cm$  である。出土遺物はない。

#### 第6建物跡

 $C-53\sim C-54$  区の地山面で確認されたもので、3間×1間の建物跡である。第 $1\sim5$ ・第8建物跡と重複している。このうち第2建物跡とは柱穴が切り合っているが、新旧は明らかにできなかった。建物の方向は $N-50^\circ$  –Eである。柱穴のうち東側柱列北第2柱穴が検出されていない。柱間寸法は推定で桁行が2.1m等間、梁間が3.9m前後になるものと思われる。柱掘り方は $25\sim35$ cmの円形、深さは $10\sim40$ cmである。出土遺物はない。

#### 第7建物跡

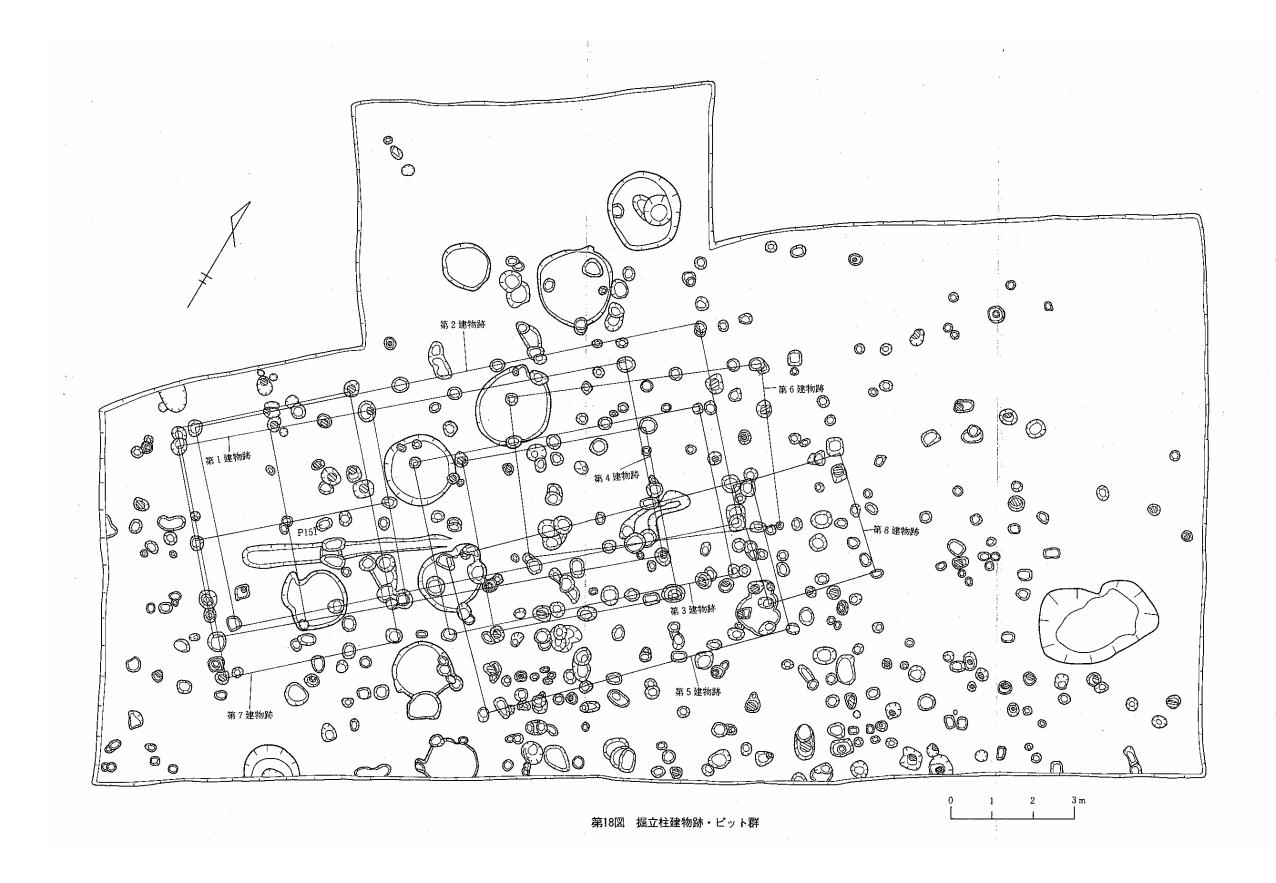
B-51~D-51 区の地山面で確認されたもので、3間×2間の建物跡である。第1・第2建物跡と重複しているが新旧は明らかでない。建物の方向はN- $40^\circ$  -Wである。柱間寸法は一定ではない。推定によれば桁行が東側柱列で北より 2.4m+1.8m+2.0m、西側柱列で北より 2.1m+2.1m+2.0m、梁間は北妻柱列で西より 2.2m+2.0m、南妻柱列で西より 2.2m+2.0mとなっている。柱掘り方は軸長 30~50cmの円形ないし楕円形、深さは 20~45cmである。柱痕跡は径約 20cmの円形を呈する。出土遺物はない。

#### 第8建物跡

 $C-55\sim C-56$  区の地山面で確認されたもので、2 間×1 間の建物跡である。第2・第5・第6 建物跡と重複しており、まだかなり近接した位置にあることから第3 住居跡とも重複している可能性が考えられる。いずれの建物とも柱穴の切り合いはなく、新旧は不明である。建物の方向は $N-50^\circ$  -Wである。柱間寸法は推定で桁行が1.7m等間、梁間が2.7m前後になると思われる。柱掘り方の規模は軸長 $30\sim40$ cmの楕円形ないし隅丸長方形、深さは $20\sim45$ cmである。出土遺物はない。

## 6. ピット群

掘立柱建物跡の周辺で計約370個のピットが検出されている。平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は軸長が20~60cmで深さは10~60cmである。ピットは互いに切り合ったり、掘立柱建



物の柱穴と重複するものがいくつかあるものの新旧関係は明らかでない。ピットのなかには柱 痕跡をもつものがあり、掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられたが、いずれも組み合うピット がなく、明確に指摘できる根拠はない。遺物にはピット 151 の埋土中から出土した青磁の破片 がある。

青磁(図版 10-11) 盤の底部破片である。高台の付くもので内外面には青緑色の釉が施されている。特徴から中世のものと思われる。

## 7. 堆積層出土の遺物

#### 縄文土器 (第19図1~5)

いずれも体部破片である。 $1\sim3$  は磨消縄文によって文様が構成されるもので、沈線によって囲まれた部分にはR L 縄文が施されている。 4 は隆線によって文様が構成されるもので、区画内にはL R 縄文が施されている。 5 は沈線によって縦方向に展開する文様が描かれるもので、地文にR L 縄文が施されている。 5 は沈線によって縦方向に展開する文様が描かれるもので、地文にR L 縄文が施されている。 年代は、  $1\cdot 2$  については中沢遺跡(後藤他: 1975)、湯坪遺跡(一条: 1978)、玉造遺跡(千葉: 1980) などに出土例があり、縄文時代中期の大木 10 式、 5 は 湯坪遺跡に類例があり縄文時代後期の南境式に位置づけられている。

#### 弥生十器(第19図6)

壺形土器の口縁部破片である。頚部は屈曲し、口縁部はやや内弯ぎみに外傾している。口縁部に3本の平行沈線が二段に描かれており、一部にそれを遮断する縦位の沈線がみられる。このような特徴をもつ土器は大山遺跡(藤沼:1980)や北沢遺跡(斉藤・真山:1978)から出土しており、円田式と考えられている。

#### 十師器

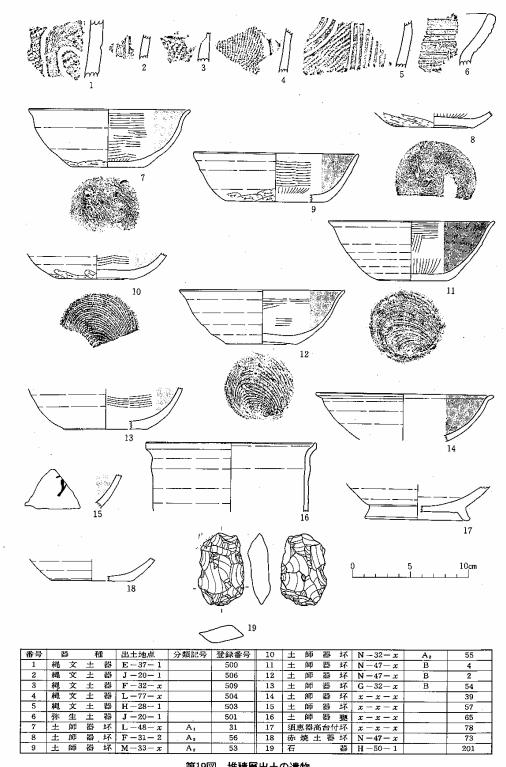
坏 (第19図7~15) 製作にロクロを使用しているものである。完形のものはなく、器形は 明確でないものが多い。これらは手持ちヘラケズリの再調整があるもの(7~10)とないもの (11~13)とがある。再調整のあるものはそれが体部下端から底部全面にみられるもの(7)と 体部下端から底部周縁にみられるもの(8~10)とがある。後者は底部に回転糸切り痕がみられる。いずれも内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

〈墨書〉 体部に墨書のある破片(15)があるが、右半分が欠損しており判読できない。

甕(第19図16) 製作にロクロを使用しているものである。体部上半が残存するもので、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は短く外傾する。

#### 須恵器

高台付坏(第19図17) 体部上半が欠損している。高台はやや反りぎみに外方に張り出すもので、底部は回転糸切り痕を残し周縁はナデ調整されている。



第19図 堆積層出土の遺物

#### 赤焼土器

坏(第19図18) 口縁部が欠損している。体部は直線的に立ち上がるもので、底部には回転 糸切り痕を残している。

その他の土器 (図版 10-12~14)

天目茶碗の破片2点と青磁碗の破片1点が出土している。いずれも細片のため図化できなかった。天目茶碗は黒色ないし黒褐色の釉が施されており、破損面は褐色から暗褐色の色調を呈している。青磁碗は青灰色の釉が施される体部破片で、外面に蓮花文と思われる文様が観察される。これらはその特徴から中世のものと考えられる。

#### 剥片石器 (第19図19)

石箆状の石器である。ややぶ厚い剥片を素材にしたもので、縁辺にはかなり粗い剥離が加えられている。

## IV. 考 察

### 1. 土器の分類

#### 出師器

土師器には坏、高台付坏、甕がある。以下、分類にあたっては製作技法を主な対象として 行った。

#### 坏

坏はすべて製作にロクロを使用しているものである。再調整の有無によって次の2類に分類 することができる。

A類 手持ちヘラケズリの再調整が加えられているものである。内面はいずれもヘラミガキおよび黒色処理が施されている。器形は体部が丸味をもって立ち上がり口縁部は直線的あるいは外反気味に外傾するが、口縁部における形態の差異は連続的で明瞭な区分はなしえなかった。

これらは再調整の行われた部位によって 2類に細分される。すなわち、体部下端から底部全面にかけて施されており、底部の切り離しが不明のもの(A I 類)と体部下端から底部周縁にかけて施されており、底部に回転糸切り痕を残しているもの(A I 類)の 2 者である。たたし、前者の中には削り残されたわずかな部分に回転糸切り痕を残すものが 1 点ある。

B類 底部に回転糸切り痕を残し、再調整が加えられていないものである。器形は体部が丸 味をもって立ち上がり口縁部は直線的ないし外反気味に外傾している。いずれも内面はヘラミ ガキ、黒色処理がなされている。

#### 高台付坏

製作にロクロを使用している。完形のものは1点と少なく器形の明らかでないものが多い。 これらは調整の違いから次の2類に分類される。

A類 内外面ともヘラミガキ、黒色処理されているものである。底部は周縁が残存するのみで、切り離しは不明である。周縁はナデ調整されている。器形は体部が丸味をもって立ち上がるもので、低い高台がつく。口縁部は欠損しており明らかでない。

B類 内面はヘラミガキ、黒色処理で外面はロクロ調整のものである。底部は周縁にナデ調整が施されており、欠損して不明なものの他はいずれも回転糸切り痕を残している。器形は坏部の欠損が著しく不明なものが多いが、判明するものでは体部が丸味をもって立ち上がり口縁部はわずかに外反する。高台は高いもの(1)と低いもの(2)とがある。

#### (震)

甕は完形のものは少ない。これらは製作にロクロを使用しないものとロクロを使用するもの との2類に分類される。

A類 製作にロクロを使用しないものである。これは体部がやや丸味をもち口縁部が外傾するものである。口径と器高がほぼ同じ長さのもので、口縁部内外面が横ナデ、体部外面がナデ、ヘラケズリ、内面がナデ、刷手目の調整が施されている。

B類 製作にロクロを使用しているものである。口縁部は外傾ないし外反するもので、いわゆる長胴形を呈するものとそうでないものとがある。器面調整は体部内外面ともロクロ調整されているが、さらに内外面にナデが施されているものが1点ある。

#### 須恵器

須恵器には坏・甕・壺がある。 完形のものはなく、数量も土師器に比べてかなり少ないため 分類を行っていない。

#### (坏)

いずれも底部に回転糸切り痕を残すもので、再調整は加えられていない。体部上半が欠損しているため器形は明確でない。

#### 

すべて大甕の破片である。口縁部破片は大きく外反するもので、頚部外面に波状文が施されているのがいくつかみられる。体部破片は外面に平行叩き目、内面には押えの痕跡が認められる。

#### (春)

長頚壺の頚部から口縁部にかけての破片である。頚部は直立し口縁部は外反するもので端部は上方につまみ出される。内外面ともロクロ調整である。

#### 赤焼土器

坏が2点ある。

#### 〈坏〉

ともに体部上半が欠損しており器形は明確でない。内外面ともロクロ調整で底部に回転糸切り痕を残しており再調整はない。

#### 筒形土器

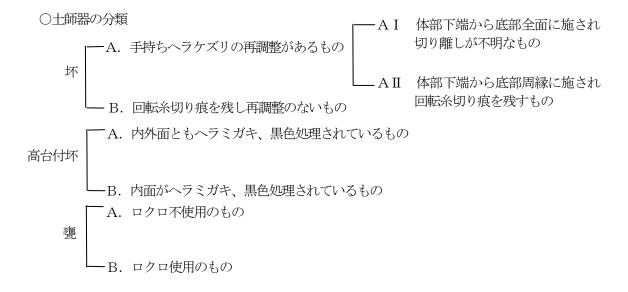
1点のみ出土している。体部から口縁部まで直立する円筒形の土器である。底部は欠損して おり明らかではない。器面は粗く、わずかに内面にナデ調整が観察される。また、器面全体が 赤褐色を呈しており、かなり加熱を受けたとみられるものである。

#### 灰釉陶器

壺の底部破片が1点ある。

#### (壺)

短い高台がつくもので、内外面に灰釉が施されている。



#### 第2表 出土土器の共伴関係

	土 土	師	器	一	須 恵 器
	坏	高台付坏	甕	同沙工品	甕
第1住	A I · A II · B	В	A · B		0
2	A I · A II · B			0	
3	A <u>∏</u>		A · B		
4	ΑI				
7	A I · A II				
8	ΑΙ·Β	В	В		

## 2. 出土土器の年代と問題点

本遺跡出土の土器の組み合わせおよび年代を検討すると次のようになる。

まず、共伴関係を指摘できるものとして住居跡に伴う土器についてみると共伴関係は第2表に示したとおりになる。それによればこれらは互いにいずれかの住居跡において共伴していることから以上の土器はすべての類について組み合わせが成立するとみることができる。したがって、これらは同一時期に属するものといえよう。所属時期は、製作にロクロを使用するという土師器坏の特徴から、東北地方南部の土師器の編年の表杉ノ入式(氏家:1957)に比定されるものである。

一方、これらと共伴しない土器については個々に年代を検討してみることにする。まず、土師器高台付坏A類はロクロを使用していることから表杉ノ入式に属することは明らかである。須恵器坏は底部に回転糸切り痕を残し再調整のないもので、県内では糖塚遺跡(小井川・手塚:1978)において国分寺下層式(氏家:1967)と表杉ノ入式のいずれの土器とも共伴しており限定することはできない。赤焼土器は県内の多くの集落跡において表杉ノ入式の土器に伴って出土するものである。他の土器は破片を図化したもので形態が明確でなく時期を限定することはできないが、このうち灰釉陶器については多賀城や城生遺跡等の古代城柵官衙遺跡に出土例が多く、平安時代すなわち表杉ノ入式期のものとされている。おそらく同時期のものであろう。

以上が出土土器の年代であるが、次にこれらの中で共伴関係の明確な住居跡出土の土器について再検討してみたい。

住居跡のなかで比較的出土量の多い第1・2・8住居跡の土器を対象にすると次のような共通点が認められる。すなわち、土師器坏において外面に手持ちヘラケズリの再調整があるA類と回転糸切り痕を残し再調整されていないB類とが組み合っているのである。また、3者とも赤焼土器は伴出していない。

表杉ノ入式の土師器坏についてはこれまで外面に再調整のあるものから再調整のないものへと変遷することが指摘されている(阿部:1968・桑原:1969・小笠原:1976)。また西手取・手取遺跡では調査の結果表杉ノ入式土器が2つの群に細分されており、上記の変遷の大筋が裏付けられている(早坂・阿部:1980)。

この様な土師器坏の変遷を考慮するならば、本遺跡の3軒の住居跡で一括される土器群はA・B両者が混在していることからAからBに移行する一つの過渡的な段階のものということができよう。その編年的な位置づけについては、すでに述べた特徴から大まかには西手取・手取遺跡で二分されたうちの「第1群」に包括されるものである。しかし、この「第1群」土器には回転へラケズリの再調整をもつ土師器坏が含まれており、その点、本遺跡とは若干異った様

相を示している。この相異が時間的要因によるものなのか地域的な要因によるものなのかは現在のところ明らかではないが、いずれにせよ本遺跡のような土器組成は北沢遺跡第2住居跡などにも認められることから本遺跡住居跡出土の土器群を普遍的な組み合わせとみることは可能であり、このことは同時に表杉ノ入式内における土器の変遷を考える上で一つの指標になるものと考えられる。

最後に本遺跡の土器群のなかで筒形土器としたものがある。これは器形が円筒形を呈しているため仮に呼称したものである。この土器は器面が粗く、内面にわずかなナデが施されているほかは明瞭な調整痕はみられない。また器面が赤褐色に変化していることから二次的に加熱を受けたものと思われる。同様のものとして県内では清水遺跡(丹羽・小野寺:1981)、県外では福島県赤坂裏遺跡(木本・藤間:1980)などに出土例があり、いずれも表杉ノ入式期の住居内から出土している。その用途については明確ではないが、清水遺跡ではカマド内から出土していることと上記のような土器の特徴から一つにはカマドの支脚に使用された可能性が考えられる。

## 3. 遺構の特徴と年代

本遺跡で検出された遺構は竪穴住居跡6軒、焼け面2基、井戸跡1基、掘立柱建物跡8軒、 ピット群である。

竪穴住居跡は伴出土器からいずれも表杉ノ入式期に属するものである。これらは特徴として住居の方向が南北軸にほぼ一致していることとカマドの付設位置が東壁であることが挙げられる。この点については検出された軒数が少ないため問題は残るが、他遺跡における同時期の住居跡と比較した場合(加藤・佐藤:1980、早坂・阿部:1980)、本遺跡の住居跡はかなり規則性をもっているものと考えることができる。

焼け面は、ともに楕円形を呈するもので、規模は 60×40cm と 90×70cm である。これらは付近にかたくしまった地山面を伴っている。このような状況から焼け面は住居跡のカマドが残存したものでかたい地山面は住居跡の床面と考えられた。所属年代は出土遺物がなく明らかではない。井戸跡は平面形が隅丸長方形、断面形が逆台形を呈するものである。堆積土中からは土師器、須恵器、灰釉陶器が出土している。このうち土師器はいずれも表杉ノ入式に属するものであり、また、この時期より新しい土器が出土していないことから井戸の年代は平安時代かあるいはそれ以前の可能性が強い。一方、形態的にみた場合、同様のものが清水遺跡で発見されており、平安時代の年代が与えられている。したがって、ここでは平安時代に使用されたものと考えておきたい。

掘立柱建物跡は8棟のうち第1~6建物跡の6軒が互いに切り合っており、さらに第7建物

跡が第 $1 \cdot 2$ 建物跡と、第8建物跡が第 $2 \cdot 5 \cdot 6$ 建物跡と切り合っている。このことから、建物は $6 \sim 8$ 回の建て換えが行われたものとみられる。建物の方向はいずれも $N-40 \sim 50^\circ$  -E (W) の範囲内にあり規則的である。構造および柱間寸法は第3表に示すとおり、建物によって異っている。構造上の特徴として第 $1 \cdot 7$ 建物を除く6軒に棟柱がないこと、第1建物跡の一部が総柱になっていることなどが指摘できる。年代は出土遺物がなく明らかではないが、付近の堆積層から出土した青磁や天目茶碗から中世に属する可能性が考えられる。

ピット群は掘立柱建物跡の周辺から検出されている。ピットは形態が掘立柱建物跡の柱穴に類似しており、なかには柱痕跡をもつものもみられることから柱穴と考えられる。年代はピット 151 から中世のものと思われる青磁が出土しており、大まかにはやはり掘立柱建物跡に近い時期のものと推定される。

	777 RES 1856	規模(m)	方	<del></del>	柱穴	カ		マ	ド		貯蔵穴状	140 (44)
	平面形	观模 ( m )	/ /3	lei	往八	付設位	置置	置構築素材		煙道	ピット	周溝
1住	長方形	5.8×4.6	真	北	3	東壁南	寄り	粘	土	無	カマド右	無
2住	長方形	4.5×4.0	真	北	3	東壁南	寄り			無	カマド右	無
3住						東壁	?				カマド右	
4住	方 形					東壁	?					
5住	長方形	4.7×3.8	N-8	0°−W		東壁中	_央_			無	カマド右	無
6住	方 形_	4.0×	真	北		東	壁	粘	土	無	カマド左	無

第4表 掘立柱建物跡集計表

	桁行×梁間	柱間寸法	丰17 / /	方 向
	11313 / 12/61/2	側柱(m)	妻柱(m)	
第1建物	$5 \times 2$	2.1+2.1+2.1+2.4+2.4	2.5等間	N −50 <u>°</u> E
第2建物	$5 \times 1$	2.5等間	5.0	N −50° E
第3建物	3 × 1	2.4等間	4.2	N −50° E
第4建物	$2 \times 1$	2.3等間	4.3	N −50 <b>°</b> E
第5建物	$3 \times 1$	2.6等間	3.9	N −45°− E
第6建物	$3 \times 1$	2.1等間	3.9	N −50° E
Are or 7-to this	2 \ 0	(東)2.4+1.8+2.0	2.2+2.0	N40°−W
第7建物	$3 \times 2$	(西)2.1+2.1+2.0	2.2-74.0	14 40 44
第8建物	$2 \times 1$	1.7等間	2.7	N -50°-W

## V. まとめ

- 1. 本遺跡は白石川左岸の河岸段丘上に立地している。
- 2. 調査の結果、竪穴住居跡6軒、井戸跡1基、焼け面2基、掘立柱建物跡8軒、ピット群が発見された。年代は竪穴住居跡および井戸跡は平安時代、掘立柱建物跡およびピット群は中世にそれぞれ属する。焼け面については不明である。
- 3. 遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、灰釉陶器等平安時代に属するものが多く、他に縄文土器、弥生土器、青磁等が若干出土している。

#### 引用・参考文献

阿部 義平(1968):「東国の土師器と須恵器~多賀城外の出土土器をめぐって」帝塚山考古学 No 1

一条 孝夫(1978):「湯坪遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第54集

氏家 和典(1957):「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯

(1967):「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって-奈良・平安期土師器の諸問題-」柏倉亮吉教授 還暦記念論文集

小笠原好彦(1976):「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」東北考古学の諸問題

加藤 道男・佐藤 好一(1980):「藤屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書 $\Pi$ 』宮城県文化財調査報告書第 63集

木本 元治・藤間 典子(1980):「古屋敷遺跡」「赤坂裏遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告 I 』福島県文 化財調査報告書第80集

桑原 滋郎(1970): 「ロクロ土師器坏について」 歴史第38輯

小井川和夫・手塚 均(1978):「糖塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年分)』宮城県文化財調査報告書第53集

後藤勝彦他(1972):「宮城県柴田郡川崎町中沢遺跡発掘調査報告」川崎町史(資料編)

佐藤 庄一(1972):「家老内遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(白石市・柴田郡村田町地区)』宮城県 文化財調査報告書第25集

斉藤 吉弘・真山 悟(1978):「北沢遺跡」宮城県文化財調査報告書第56集

千葉 宗久(1980):「玉造遺跡」宮城県文化財調査報告書第68集

丹羽 茂・小野寺祥一郎(1981):「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』 宮城県文化財調査報告書 第77集

早坂 春一・阿部 恵(1980):「西手取・手取遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ』 宮城県文化財調査報告書第63 集

藤沼 邦彦(1971):「大山遺跡」『東北自動車道関係遺跡調査概報(刈田郡蔵王町地区)』 宮城県文化財調査報告 書第24集

第5表 土 器 破 片 集 計 表

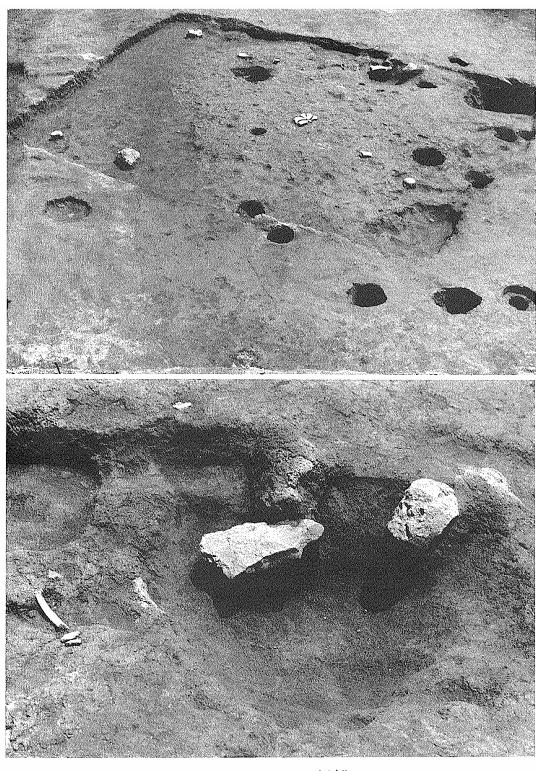
			第 5 政	<del>^</del>		л <del>ж</del>		24				
土器	器 種	部位		第1住	第2住			第5住		井 戸	堆積層	合計
[			ロ ク ローミガキ(黒)	128	77	9	2	30	19	26	310	601
			ーミガキ	11	12	3		1	. 1	1	9	38
	İ		一不 明	4		1		4	2		6	17
		口綠部	ミガキ(黒)ーミガキ(黒)	3				1		1	1	. 6
		1	不 明ーミガキ(黒)	4	2	2		4			66	78
		İ	- ミ ガ キ - 不 明	1							2	3
				10	3			1	1		8	23
			ロ ク ローミガキ(黒)	105	33	8	5	17	6	11	387	572
	坏	1	ーミ ガ キ	2	4	1					11	18
			一不 明	1	1			1			4	7
			ミガキ(黒)ーミガキ(黒)	1	3			2			3	9
1		体 部	ミガキーミガキ								1	1
			ケ ズ リーミガキ(黒)	6	7	4		3	1	4	48	73
	ļ		一不明	1						_		1
			不 明ーミガキ(黒)	43	12	3	1	17	1	8	379	464
		i	ーミ ガ キ       一不 明	3	3		1				6	13
				14 27	7	1		3	4	1.0	14	39
			糸切りケズリ		18	2	3	7	4	16	168	245
		底部		11	15	1		4	5	9	88	136
				7		_	1				3	4
1	★ <del>4 + 7</del>	<b>*</b> 4	不 明	1	5	5		1	1	- 6	115	140
	高台坏	高台	ロ ク ローナ デ	1	3	4		3	6	3	10	15 53
			ーミガキ(県)		-	- 4			. 6	3	34	2
		·	ョコナデーョコナデ	1		1	2	2		-	23	29
土師器		口約部	一刷 毛 目		<u> </u>	1		1			- 25	1
土卵器			一不明						1		5	6
		1	不 明ーヨコナデ						1		1	1
			一不明		3						8	11
			ロ ク ローロ ク ロ	1	2		1	1			10	15
	戏	1	ーナ デ	2	1	1	1	3	7	1	28	44
		1	一刷毛目		2	*					20	4
		!	ーミガキ(県)								6	- 6
			一不明	1				2			11	14
			ケ ズ リーナ デ	9	9	3	1	8	24	2 .	96	152
			刷 毛 目	1	4	_		3			6	14
l i			一不 明	3	2	6	1	5		1	78	96
			ナ デーナ デ	4	2	3		2	12 3	2	44	69
		体部	一刷 毛 目								5	5
			不 明	3				2	3		25	33
			刷 毛 目ーナーデ	1					1		4	6
			一刷 毛 日	1		1		5			20	27
			一不 明	1				ı			12	14
l i			ミガキーナ デ								1	1
			不 明ーナ デ	16	17	3		3	13	4	71	127
			一刷 毛 目	2	2			5	1	1	15	26
]			一不. 明	60	23	13	3	29	9	2	515	654
			条切り	3		1	1	1	1	2	8	17
		遊部	ケズリ	1		1			1		2	5
		~~ µF	常状圧根					1			2	3
			不 明	4		2	1	2	2	2	- 26	39
		口線部		6	2	2	1	25	6	2	54	98
		体 部			1	3		10	- 6	5	57	82
	坏		ヘラ切り								2	2
		底 部	糸切り			2		5		2	48	57
[			回転へラケズリ			-		1			2	3
	· ·	口級部	不\ 明	1		. 2			2		. 9	12
		が 部		13	3 5					2	18 32	40 58
		भा म	平 行一オサエ	113	27			4	5		157	314
			一青海波	113	27			4	- 5	8	157	14
J.,			一方 御 仮	4	۵						9	13
·			-刷 毛 目								4	4
			一不明	21	3			1		1	38	64
			ケズリーオサエ	3	2			- 1	-	•	2	7
			ーナ デ	12	2	-		1			17	32
須恵器			-刷 毛 目	2							2	4
	m)		一不明						. 1		3	33
	猣	体 部	ナ デーオ サ エ	i		-					3	3
			ーナ デ	3			i				21	24
· [			一不 明						1		2	3
			ロ ク ロー不 明	6		1	1				7	15
			—ロ ク ロ	14	4						28	46
			不 明ーオ サ エ	5	3						14	22
		Ì	ーナ デ	7	1	1		1	5		19	34
			一刷 毛 目	1			1				1	3
			一不 明	13	4	2	1		1		35	56
		底 部	ケズ・リ	1							3	4
			不 明		1			. 1		1	6	8_
	截	類 部						1	1		4	6
ι Γ	蓋	口線部									1	1
	·	ì	ät	740	331	92	31	226	151	130	3308	5009
		<del></del> -										

## 写 真 図 版



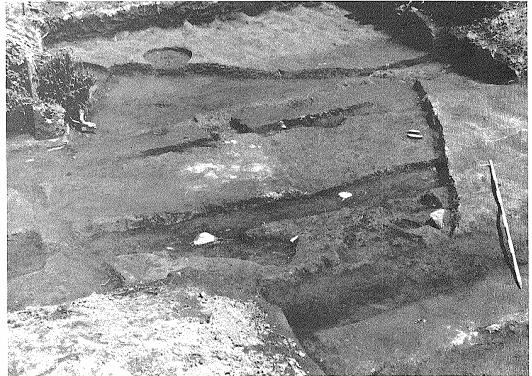


図版 1 上:遺跡遠景下:遺跡近景

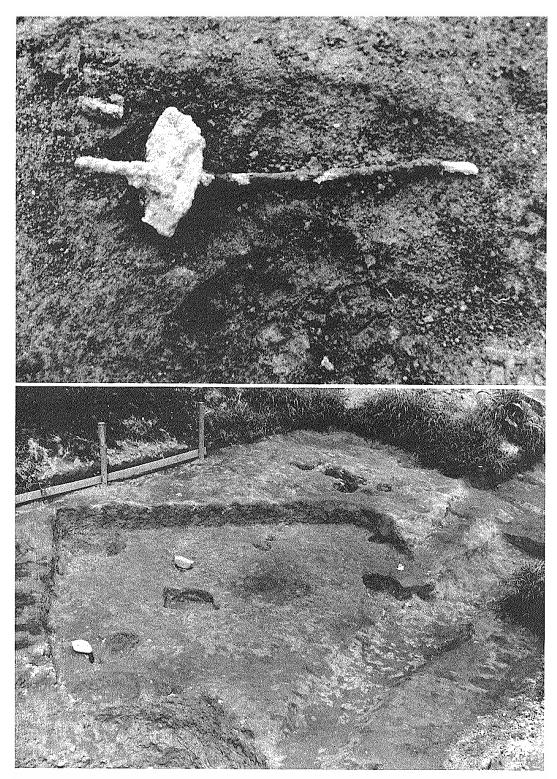


図版 2 第 1 住居跡 上:全体 下:カマド



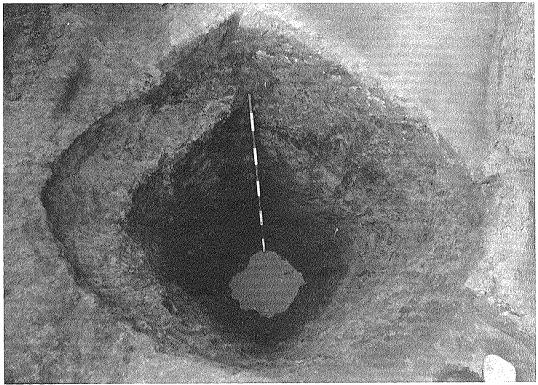


図版 3 上:第1住居跡貯蔵穴 下:第2住居跡

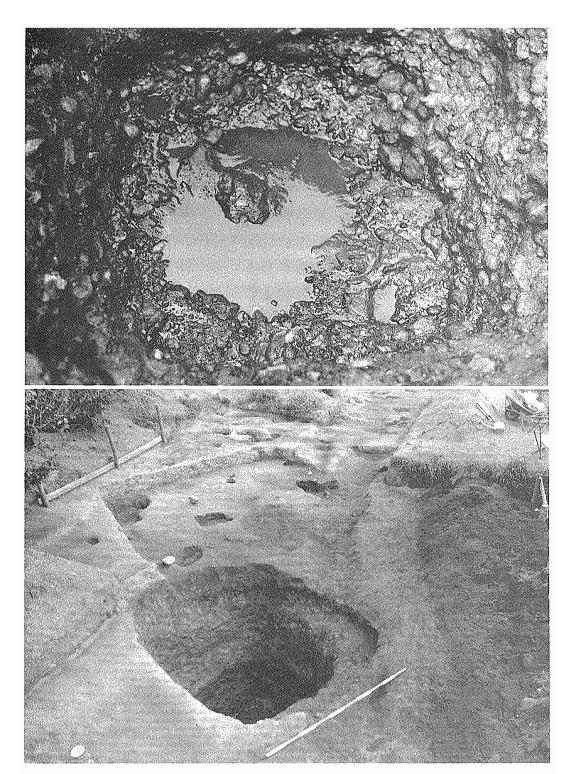


図版 4 上:第2住居跡出土鉄製紡錘車下:第5住居跡





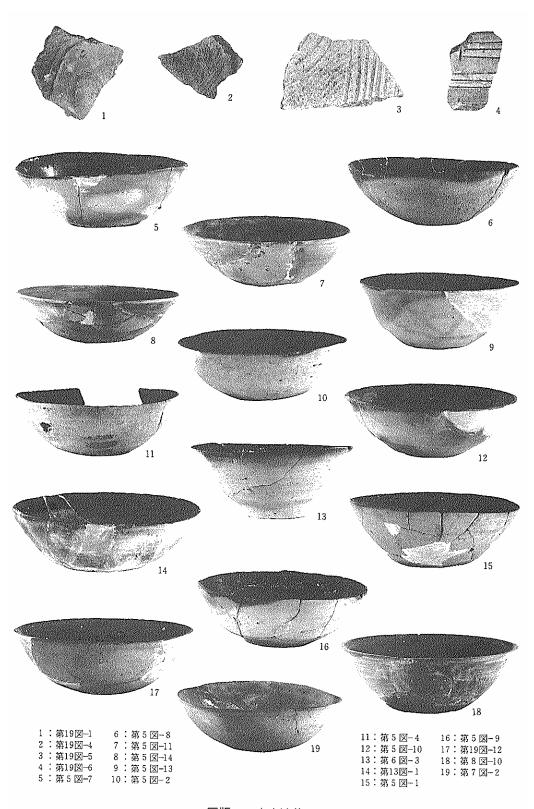
図版 5 上:第6住居跡 下:井戸跡



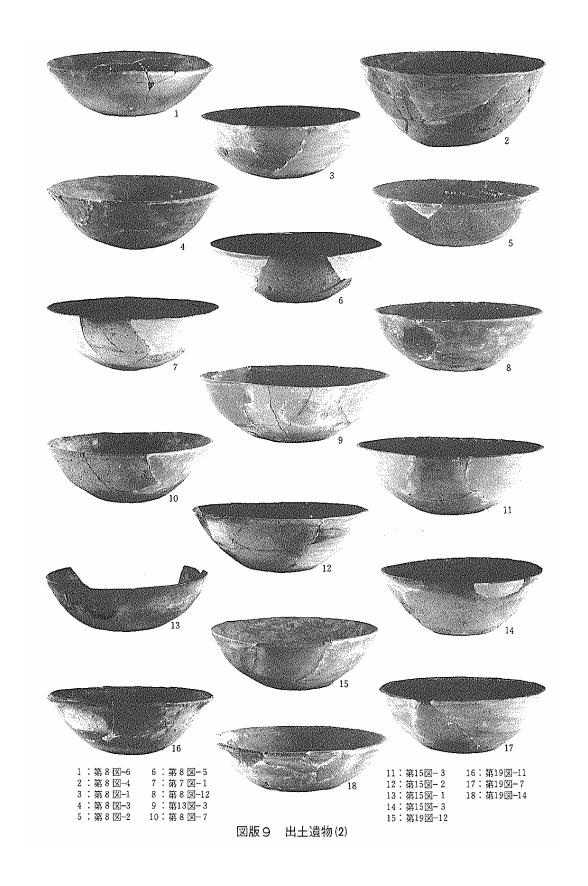
図版 6 上:井戸底面 下:第5住居跡と井戸跡

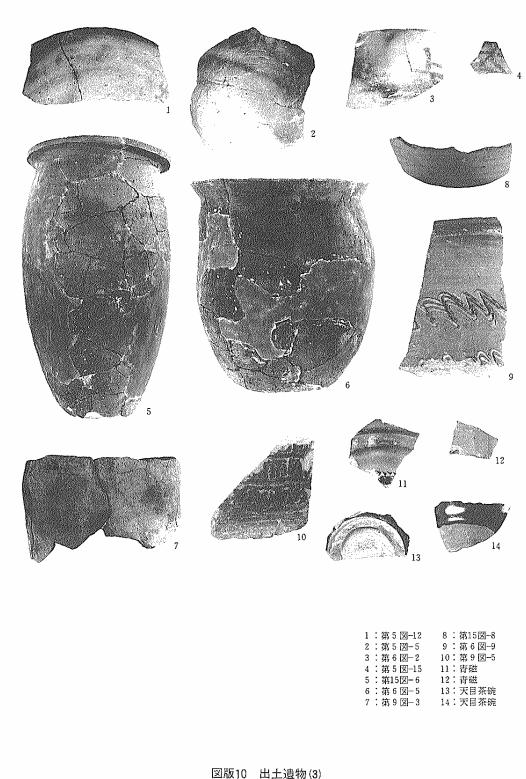


図版7 上:掘立柱建物跡ピット群 下:ピット断面



図版8 出土遺物(1)





# (3) 宮城館跡

## 目 次

I. 遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
1. 位置と地形・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
2. 歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
Ⅱ. 規模・構造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
Ⅲ. 調査の方法と経過····· 102
IV. 調査の成果・・・・・・ 102
1. 第一トレンチ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
2. 第二、三、四トレンチ・・・・・・・107
3. 第五トレンチ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
4. 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107
V. 文献資料······ 108
VI. 考察······· 11:

## 調査要項

遺跡所在地:宮城県刈田郡蔵王町宮字神合・台・小屋田 遺跡記号:MG(宮城県遺跡地名表登載番号:05024)

調査期間:昭和45年7月19日~7月31日

調査面積:約116,250 m<sup>2</sup>

発掘面積:約472 m²

調 査 員:社会教育課

志間泰治 藤沼邦彦 白鳥良一

調查参加者:東北大学考古学研究室 西脇俊郎

東北学院大学 斎藤誠一

## I. 遺跡の位置と環境

## 1. 位置と地形

宮城館跡は刈田郡蔵王町宮字神合、台、小屋田にまたがる地区に所在し、蔵王町役場の南約6km、刈田嶺神社の南西約1kmの地点に位置する。蔵王町は宮城県の南西部、刈田郡の北東部にある。

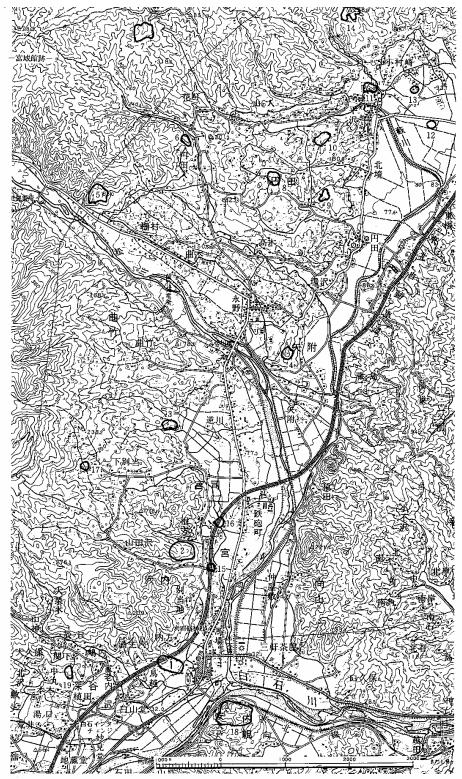
町内の地形を概観すると、町の大部分は奥羽山地から東に派生する高館丘陵と南北にのびる 白石低地によって占められる。樹枝状に分岐する高館丘陵は北では川崎町と、東では村田・大 河原両町と境を画している。一方、町の南側には阿武隈山地から派生し、北にのびる角田丘陵 性山地が迫り、高館丘陵との間に隘路部を形成している。

これらの丘陵は、白石川とその支流松川・籔川等の河川によって開析され、その流域には、 多くの河岸段丘や沖積地が形成されている。これらのうち、本遺跡を境に北部の松川右岸に発達するものを新期段丘といい、西部の白石川左岸に発達するものを長袋段丘と夫々呼称されている(古谷:1963)。また、これらの河川によって形成された沖積地は総称して広義の白石低地といわれるものの、北にのびて広がる北半を円田盆地、南の白石周辺は白石盆地と通称云われている。

本遺跡は蔵王町東南部の白石市境いにあり、先の丘陵によって形成された隘路部にある。この隘路部を白石川が東流し、一方、北より松川が南流し、本遺跡より東約0.7kmの地点で合流している。白石川に沿って奥州街道が、松川や籔川に沿って笹谷(猿鼻)街道が走っている。本遺跡は高館丘陵の高峰・青麻山から派生する小起伏丘陵端に立地する。この丘陵は南側は比較的急傾斜をなすものの、北及び東側は低地に向って広大な緩斜面をなしている。一方、遺跡の中央部より東側は次第に高度を増し、かつては、標高60mを越す丘陵であったと思われるが、土取工事により原状は削平されている。東側の最高所と付近の水田面との比高は約26mである。遺跡の地目は畑地と果樹園である。

## 2. 歴史的環境

蔵王町には170を越す遺跡が確認されている。そのうち中世の遺跡は1割強の19遺跡を占め、14遺跡は城館跡である。その中で、本遺跡は最南端にあり、ほか山家館、曲竹小屋館と笹谷街道沿いを順次北上する。これらは地形の特性を巧みに利用し、その殆どが山地や丘陵の突端に立地する。山地や丘陵端に立地する城館の遺存は比較的良好なものの、円田盆地の沖積地に築城された平沢館、新城館や西小屋館は所謂平城とされるが、いずれも削平され、湮滅している。



第1図 周辺の遺跡 国土地理院発行1/50000「白石」を複製

さて、これらの城館の築城、使用年代及び館主等解明されない点は多いが、政情不安な争乱時に築城されたという伝承が数多く残されている。即ち、源義家等にまつわる前九年や後三年の役の折には兵衛館や新城館が築城されたという(刈田郡詳鑑)。また、源頼朝にまつわる文治の役の折には、奥州は平泉政権の勢力下にあった。当時花楯城や築館城は既に築城されており、決戦場となる阿津賀志(厚樫、篤借)山の後方を支える重要な城であった。更に、阿津賀志山退陣後は根無藤の辺に城を構え、根無藤館より四方坂館付近が戦場になったといわれる。しかし、これらは吾妻鑑には記載はされているが、伝承の域を越えるものではない。

鎌倉時代の末期には、曲竹小屋館や内親館が築城されたということは我妻家(曲竹)や八島家(深谷)等の系図にはあるもののその詳細は不明である。奥州を二分して激突のあった南北朝動乱期の正平6年(1351)の倉本川(白石川)の戦いで、内親館や四保館(柴田町)にまたがる地域が戦場になったといわれるが、この戦乱では南朝方の伊達・田村の諸軍が、北朝方の吉良・相馬の諸軍を撃破した(白石市史)とあり、当宮地方も激戦地であった可能性も否定できない。このような変遷を経て、刈田郡地方を次第に支配下に入れ、戦国大名にまで成長したのは伊達氏であった。天文の乱などの内訌はあったものの東北地方の覇者として君臨したのである。晴宗治政下の刈田郡地方は白石氏は白石地方(白石城)、中野氏は七ヶ宿地方(八幡館)、遠藤氏(後の宮内氏)は内親城に居城し、宮地区をはじめ、周辺の地域を支配することになった。

天正 19 年(1591)、伊達氏の岩手沢(岩出山)移封に伴ない、刈田郡地方は一時伊達氏の手を離れ、会津の蒲生氏、上杉氏の支城として白石城(益岡城)が浮上し、他の殆どの城館は自然に廃城になったものと思われる。藩政時代に入ると、再び伊達氏の支配するところとなり、平沢館は領内要害地 21 ヶ所の1つ、高野氏の要害として存続することになった。元和の「一国一城制」の特例として、仙台藩は仙台城の他に、白石城も認められ、片倉氏が領有することになった。

周辺の遺跡	(中世の遺跡)
-------	---------

番号	ij	盐 跡	名		番号	遺跡	名	番号	遗	跡	名	番号	遺	跡(	名	番号	遊	跡	名
1	宮	城(古館、二	条城)	館	2	山家	館	3	曲竹			4	近 (矢	江 付館)	館	5	棚(弁	村 天山	館 館)
6	根	無	藤	館	7	四方均	反館	8	諏	訪	館	9	花	楯	城	10	築	館	城
11	平(要害、		岡城、高	館 部野館)	12	新 城	館	13	西	小 屋	館	14	兵 (£	衛糧館	館 ()	15	持長	<b>(地</b> )	赴跡
16	±.	屋敷	進	跡	17	順行寺	遺跡	18	内 (根城	親雄、二名	館 K館)	19	諏	訪	館				

## II. 規模 · 構造

宮城館は前述したように宮地区の背後に迫る丘陵端に立地する。館跡は西北隅は幅 12mほどの堀によって連続する丘陵と隔絶され、残る三方も堀によって周囲の低地と画されている。その規模は東西約470m、南北約330mあり、裾部を巡る堀の長さは約1350mある。従って、堀によって囲繞された地域が所謂館跡の範囲であり、その面積は概ね116,000㎡である。

館跡は中央にある土塁等により、東西に二分される。東側は土取工事により、既に削平、破壊をうけて原状は失なわれている。残存する遺構は三つの平場と南北に走る土塁等により構成されている。一方西側は東斜面に広がる平場、西端にある土塁、南斜面にある段状遺構等から構成されている。次に遺構の各々について述べる。

[平場]

**上位平場** 残存部の中では東側最高所にあり、標高は凡そ 56mである。規模は南北 35m、東西 10mあり、残存部分は長方形を呈する。

**中位平場** 上位平場をとりまくように南北60m、東西10m、北側では25mと広がり、残存部分は逆L字形を呈する。上位平場との段差は約1mである。

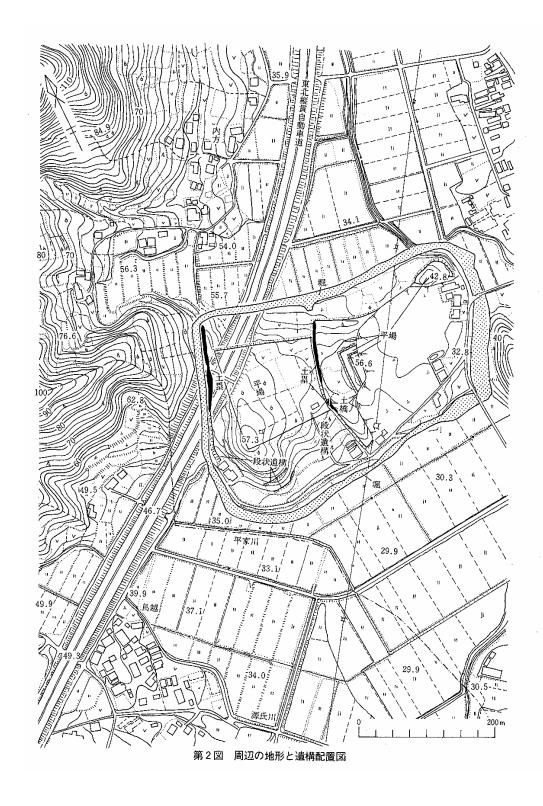
下位平場 中位平場をとりまくように南北に長い平場であり、中位平場との段差は約1mである。この平場の西縁は土塁等により区画されている。南北の中央部には約1mの段差により二分され、北側の平場を北部平場、南側のものを南部平場とする。削平された東側に館跡の一部が残存し、この部分の北斜面に平場が認められるが、これを東部平場とする。これは北部平場の延長と考えられる。北部平場は南北に長いので北側に幾分傾斜する。規模は北部平場は南北110m、東西25m、北側では65mあり、中位平場同様、逆上字形を呈する。南部平場は南北80m、東西20mの長方形を呈する。東部平場は東西40m、南北10~40mである。

**西部平場** 館跡の西側にあり、東にのびる緩斜面には1辺約150mほどの正方形を呈する平場が広がっている。この平場は東にある中央土塁に区画されるものの、他は明瞭ではない。尚、この平場は本館跡では最大の平場である。

#### 〔土塁・段状遺構〕

中央 中央土塁、段状遺構はほゞ館跡中央部にあり、下位平場の西縁を幾分東側に彎曲しながら南北に走る。その規模は北側より第一土塁(長さ95m)、第一段状遺構(長さ35m)、第二土塁(長さ15m)、第二段遺構(長さ65m)が夫々連接しながら南下する。西部平場との比高は各々3m強ある。第一段状遺構と第二土塁との境いには現在使用中の土橋状遺構(長さ10m、幅2m)があるが、後世に改良したものか、新設したものかは判然としない。

西端 西端土塁、段状遺構は西端の堀の内側に沿って第三土塁(長さ 125m)、第三段状遺構



(長さ120m) が連なり南下している。この土塁の内側に通路状の段状遺構的なものが認められるが、後に削平されて現出した可能性がある。南斜面には二段の段状遺構(第四段状遺構、長さ10m、第五段状遺構、長さ12m) が認められた。西側より南裾部には腰曲輪的な平坦地が広がるが、これも後世に削平されて現出されたものと考えられる。

[堀]

堀は8~25mの規模で館跡の裾部をほゞ全周するので、範囲は明瞭に読みとることができる。 丘陵基部の北西隅においては土塁項部と堀の比高は4m強ある急崖をなすが、堀は南と北に 夫々急傾斜をなし、この部分は空堀になっている。東側では幅は広がり、25mを越す部分もある が、この壮大な堀も、北西隅の堀を除いては、近年の圃場整備事業によって旧状は失なわれて いる。また、等高線及び北側の堀が南側に突き出ていること等から考慮すると、中央土塁に沿って空堀の存在も想定される。

## Ⅲ. 調査の方法と経過

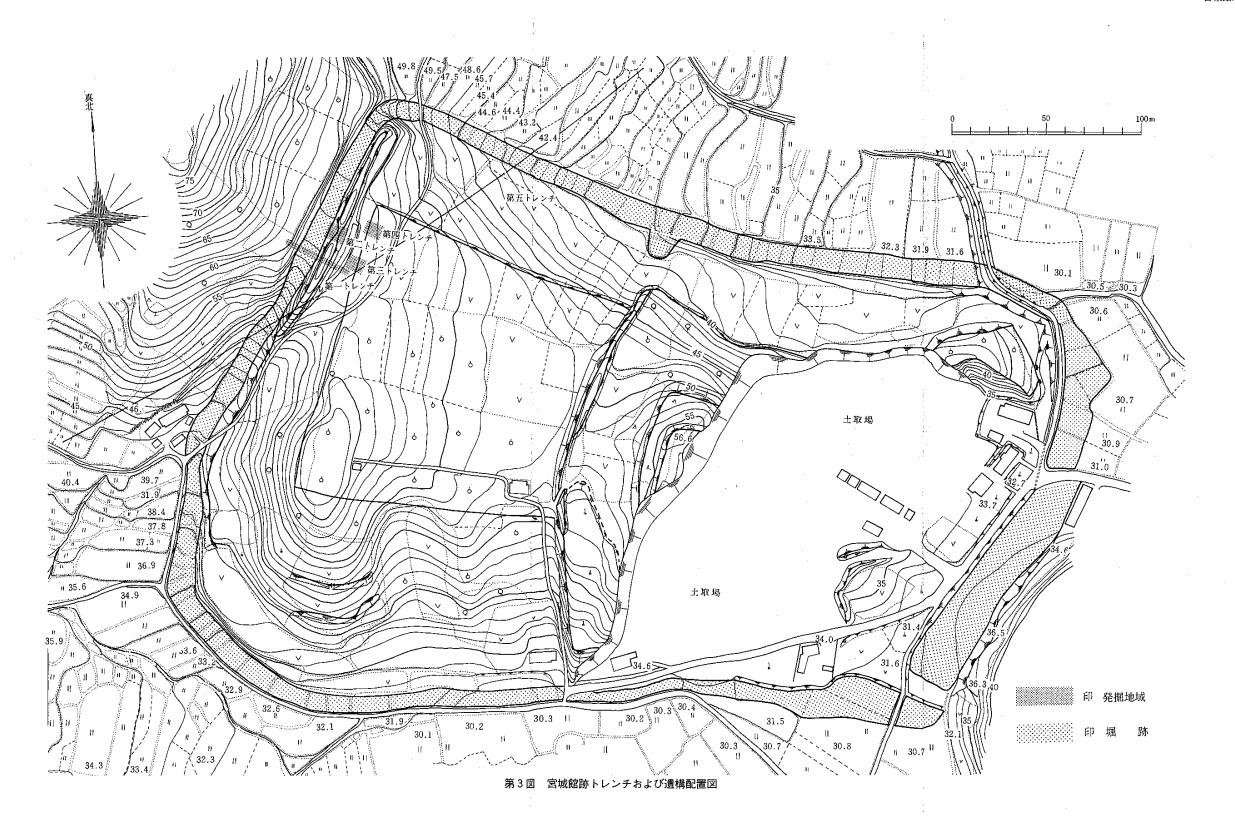
東北自動車道の路線敷にかかる部分は遺跡の西端にあたる。その面積は凡そ12,000 ㎡である。 西端の土塁及び空堀の構造を把握する意図を以って第一トレンチ(長さ38m、幅3m)と、土 塁の一部削平された箇所と土塁内側に夫々建物跡の遺構等の検出を目的として、第二、三、四 トレンチ(いずれも長さ10m、幅8m)を、更に、北端の堀と土塁の存在の有無を確認するた めに第五トレンチ(長さ32m、幅3m)を夫々設定し、発掘した。発掘面積はこれらを合わせ ると440 ㎡になる。

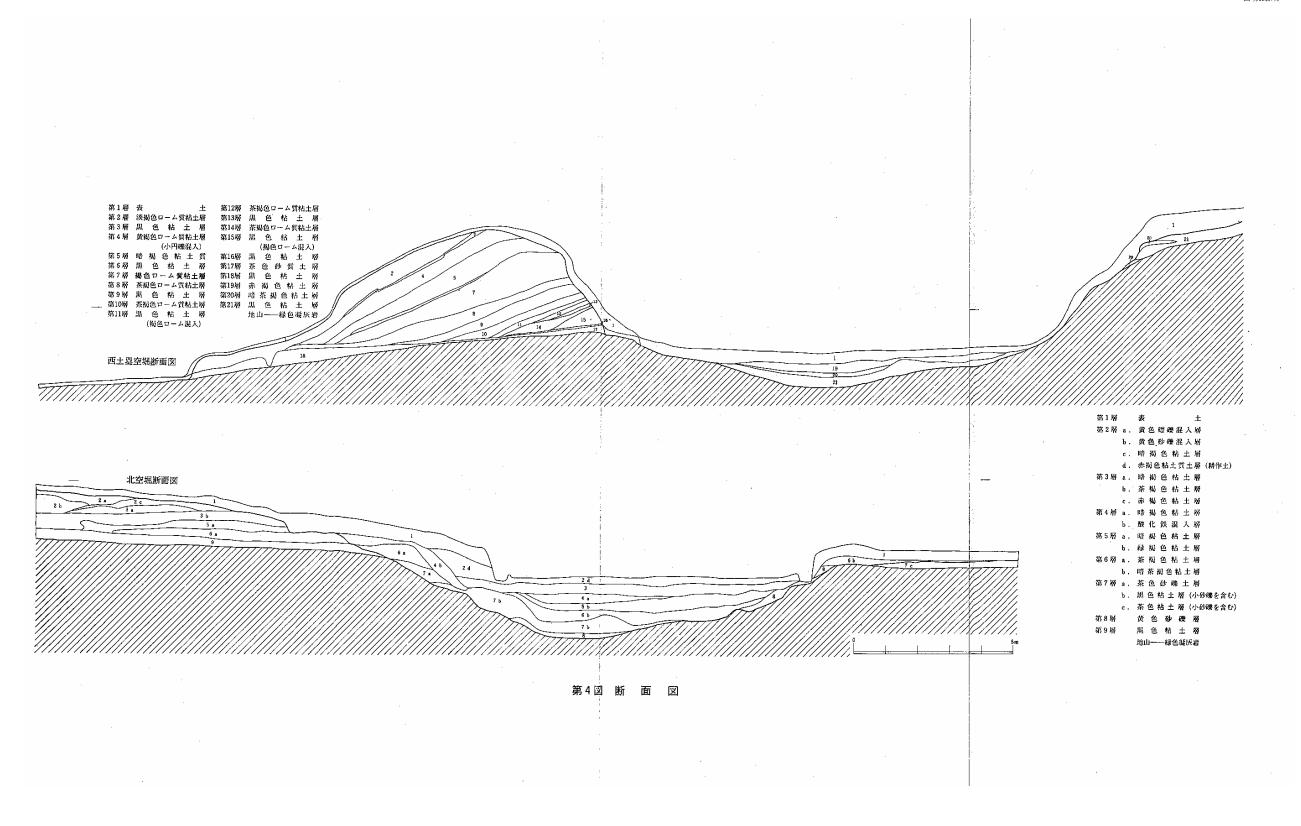
調査は7月19日より開始された。精査終了後、断面図(1/20)、地形図(1/500)の作成、写真の撮影をした。調査は7月31日を以って一切を終了した。

## IV. 調査の成果

## 1. 第一トレンチ

館跡西端にある西土塁は高さ3.5m、基底部幅約13m、上部幅約7mあり、南北に走る。土塁は旧表土の上に堀を掘削した土砂で積み上げてあるが、その積土層は水平になっておらず、西から東に傾斜している。土塁の東側は一部削平されている。土塁の外側に沿って、上幅約16m、下幅約11mの堀が走る。堀は地山を2~2.6mほど掘削している。掘の底面はほぶ平坦であるが中央部はやや窪む。壁の立ちあがりは東側では緩やかであるが、西側はやや急である。堀の堆積土は5層であるが、ほぶ水平に堆積している。空堀として機能した当時は約6mを越す比高を有していたと想定される。





## 2. 第二、三、四トレンチ

建物跡遺構等の検出の意図をもって発掘したが、何ら遺構らしきものは検出されなかった。

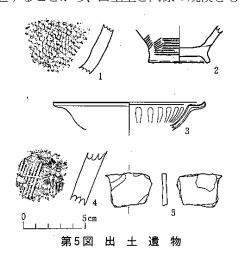
## 3. 第五トレンチ

北端の堀に直交するようにトレンチを掘った。堀は台形状に地山を2~2.6mほど掘削したものである。堀の上幅は約14m、下幅は約8mあり、底面はほぶ平坦である。壁の立ちあがりは両方とも緩やかである。堆積土は7層でほぶ水平に堆積している。堀の両端には幅40cmほどの用水堀が認められる。また、堀の南側には発掘区外にものびるが、幅11m強の土塁基底部の残痕が認められた。西端の堀、土塁基底部幅と規模が共通することから、西土塁と同様の規模をも

つ土塁の存在が想定されるが、現在は削平され土塁 上部は存在していない。土塁基底部の積土層はほゞ 水平である。

## 4. 出十遺物

各トレンチより出土した遺物には次のようなものがある。縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、青磁、近世の陶器、香炉、鉛製の鉄砲玉、鉄製品、鉄滓、剥片等がある。図示できたものは次の通りである。



#### 〔縄文十器〕 (第5図1)

深鉢形体部の破片と思われる。斜行縄文(LR)が施されている。時期は不明である。 [弥生土器] (第5図2)

台付鉢の台部被片で、小さな台がつけられている。外面に撚糸文(R)が施されており、台部はおさえの調整、内部はナデ及び粘土積み上げ痕が認められる。仙台市南小泉遺跡(伊東:1950)出土の土器に酷似する。時期は桝形囲式のものと考えられる。

#### [陶器] (第5図4)

擂鉢体部の破片である。器面調整はナデ、内面に筋目が縦に施されている。胎土、焼成はよい。色調は明赤褐色を呈する。近世のものと思われる。

#### 〔青磁〕(第5図3)

浅い皿の破片で底部を欠損している。体部はやや丸味をもち、口縁部は水平に折れまがり端部は直立する。口径は12cm ある。青磁釉は全体にたっぷりかけられる。内面には太く浅い沈線

があり、鎬状文を呈する。胎土は灰白色である。類似の青磁皿は大和町御所館跡出土のもの もあり、中国陶磁器(元代・龍泉窯産)とされている。県内では室町時代から戦国時代の城館 跡に多く出土している(藤沼:1977)ことから該期のものとしたい。

〔鉄製品〕(第5図5)

小破片のため、不明であるが刀の茎の可能性もある(最大長3.5cm、最大幅2.6cm)。

# V. 文献 資料

#### 〔資料 I 〕 性山公治家記録 巻之二

元龜元年九月丙戌小上旬。小梁川中務盛宗ノ罪ヲ赦免シ玉フ。盛宗ハ置賜郡屋代莊高畑ニ在城セラル、今度中野等城下ヲ經テ出奔ス。公御憤リ甚シ。此外刈田郡白石ノ城主白石大和宗利、宮ノ城主宮内中務宗忠、伊具郡角田ノ城主田手式部宗光等モ、不」支シテ逆徒ヲ遁シタル罪不」輕トテ厳科ニ處セラルヘキト沙汰シ玉フ、然ルニ小梁川盛宗ハ、故中務小輔殿盛宗ノ曾孫ニシテ、道祐君側婿ナリ、道祐君ヨリ御弟兵部太輔殿實元ヲ以ッテ再三御侘言アリ、此月ニ至テ罪ヲ宥ラル。白石・宮内、田手等モ其儘城々ヲ安堵ス。小梁川盛宗ヲ赦免シ玉フ故ナル敷、總テ中野カ黨類根ヲ斷チ、葉ヲ枯サント憤リ玉フトイヘトモ、遠藤内匠基信諫メ奉ルニ因テ左マテ罪科モ行ハレス。……宮内氏、姓ハ藤原、家系不知、代々刈田郡宮城ニ住セリ。

〔資料Ⅱ〕 仙臺領古城書立之覺

内親村

— 内親城 東西十七間 南北三十間

二ノ丸 東西十七間 南北三十間

右城主宮内因幡ト申者ニ候宮内權十郎先祖ニ御座候 跡城主ノ名相知不申候、是又一族之者御座候

宮村

宮城 内型 四十五間ツツ 二千令廿五坪

右此城主右因幡内親5此城江取移候由候得共 城ノ名不相知宮ノ城ト號ス

〔資料Ⅲ〕 仙臺領古城書上

一宮邑

一 宮城 東西四十間 城主因幡末男、内親ヨリ居住

〔資料IV〕 宮村風土記

一舊館 高 拾五間程

大手 東向

東西十二間半 一 本丸 南北三十間餘

# 一 二ノ丸 東西二十間 歯北二十間

御館主宇田部駒ヶ嶺村御領主宮内因幡様御先祖御同姓因幡様御住居被成候由申傳候處、右年代相知不申候、當時ハ荒地ニ罷成申候事

#### 〔資料V〕 藩臣須知

御一族 宇多郡駒峯村所拝領、十三里 千四百二十二石五斗六升、士四十五、足五十、小八、 寺五、宮内飛彈

#### [資料VI] 伊達世臣家譜 (巻の4、一族の部)

次日-因幡守盛房-、住-干羽置玉郡長井庄宮内邑-焉、盛房爲-羽州南方奉行人- 盛房子 肥後守盛兼、永享十年關東大亂之時、屬-鎌倉管領足利左馬頭持氏-持氏敗績 後屬-干天 海公麾下——是時賜-釆地六百餘町干宮内邑——盛兼子伯耆盛俊、文明中瓊岩公時—屢有-戦功— 盛俊子中務盛實歷-仕瓊岩香山兩公-爲-執事-延徳二年三月香山公時 賜-田六千石-、移-局干刈田郡内親城 盛實無レ子、養-宮内因幡宗誠子-爲レ嗣、稱-之伯耆宗實-永正中公與-奥羽二州諸軍-挑、兵之時、宗實爲-先鋒- 屢有-戦功- 十二年保山公賞-賜田若干於刈田郡 内十邑-、宗實子中務宗忠天文二十一年正月保山公之時、命-一族班-、此時奉レ命爲-宮内 氏-、宗忠子肥前重行 嘗誤爲-火藥-焚、遂爲-廢人-、於レ是以-次男-爲レ嗣、稱之因幡常 清-、先レ是住-刈田郡宮内- 天正十九年貞山公、移-岩手山城-之時從レ之此時賜-田千石於 四竈千廐松森三邑- 傳言、先,是天正十五年正月會-岩手山城主氏家彈正-乞-援兵於貞山公-是 時伊達上野之介政景 將而赴」之、常清等從焉 常清無」子、養\_貞山公第九男 爲」嗣、稱\_ 之治部大夫宗實-、宗實後爲-伊達安房成實之嗣- 於レ是復養-片平伊勢重網嫡男-爲レ嗣稱-之又市郎定清- 寛永十六年十二月爲-國番頭- 十九年義山公時、賜-經界之餘田二百石-正保 元年賜\_所於栗原郡三迫武鎗邑\_移居焉 三年賜\_野谷地\_、開\_墾新田\_、得\_二百二十二石 五斗六升-、明暦元年七月併-賜之於本祿-爲-千四百二十二石五斗六升之祿-、定清亦無レ子、 初稱-權十十三年八月肯山公時、爲-養-大條監物宗快第三男-爲レ嗣、稱-之土佐透清 國番頭-、後兼-申次-、元禄五年會-大條監物宗道之家無レ嗣、奉レ命歸宗 繼-大條家-、於 享 被 年五月獅山公 ∠是立-同姓宮内六兵衛重條嫡子<sub>→</sub>、繼-定清家<sub>→</sub> 稱-之又市郎定清 時 改賜-在所於宇多郡駒箇嶺邑-、去」治十三里餘 -- 略 -

上記の資料はいずれも近世の資料である。宮城館の初見は、資料Iにある元亀元年(1570)の宮河原の戦いである。発端は米沢の中野宗時、牧野久仲らの叛乱である。居城を包囲される寸前、叛乱軍は与力・郎従ら500騎と共に米沢を脱出、中野の領地七ヶ宿を越え、宮河原に至った。この叛乱軍を邀撃したのは逃走経路にあたる地頭達であった。その中の1人に宮ノ城主宮内宗忠もいたが、叛乱軍を阻止できず、目的地相馬に逃亡せしめた。後に白石氏らと共に、問責されたが、遠藤基信の尽力により許されたとある。これは、宮ノ城主、宮内宗忠の記載の

みで、館等の記録はない。

館跡の規模等の記載については、資料 $\Pi \sim IV$ が詳細に伝えている。資料 $\Pi$ では、東西、南北とも45間(約81m)ずつで、面積は2,025坪(約6,700 m)とあり、館跡の東側部分を指すものと思われる。資料 $\Pi$ は数値等に若干の相違はあるものの、資料 $\Pi$ と同様の記載である。資料IVの宮村風土記では更に詳細に記されている。先ず、高さ15間(約27m)とあり、これは前述した館の最高所と付近の水田面との比高とほぶ一致する。更に、大手は東向きとあり、これは笹谷街道と奥州街道との分岐点周辺を睥睨するのに最も地の利を得たものである。規模については $\Pi \cdot III$ より小規模になるが、二ノ丸が付記されたことが注目される。

さて、館主の記録については、資料Ⅱ~Ⅳがその概略を伝えている。資料Ⅱの古城書立之覺えではもと内親館に居住した宮内因幡は後に宮城館に移住したとあるが、その年代についての記載はない。資料Ⅴの藩臣須知によれば、宮内氏は家格は一族で、宇多郡駒峯邑に1422 石を賜わっている。仙台藩では一族は22 家あるが、石高では茂庭氏を筆頭に大町氏、大内氏、中島氏に次いで5番目である。

資料IVの伊達世臣家譜によれば、宮内氏は先祖は藤原鎌足まで遡るが、宮内を名乗る以前は遠藤と称していた。盛兼の時、伊達特宗に仕え、延徳2年(1490)に刈田郡内親館に移住した。宗実の時、郡内10邑(宮、遠刈田、小下倉、内親、津田、小奥、曲竹、塩沢、深谷など)を領有、支配した。宗忠は天文の乱の時、白石宗綱らと共に晴宗に仕え、その論功行賞により、外様より一族に列せられ、同時に宮内と改姓した。天文21年(1552)に、刈田郡宮内に住むとある。

天正4年 (1569) には、相馬氏が、伊達・信夫両郡に侵入するや、伊達氏は仙南の各地頭に 出陣を命じた。この戦いにおいては白石氏らと共に出陣し、以前の宮河原の戦いの雪辱を果し た。天正16年 (1571) の大崎合戦には宗忠も討伐軍に参陣した。天正18年 (1573) には宇多郡 駒峯邑の定番になっている。天正19年 (1574) には、伊達氏の岩手沢(玉造郡岩出山町)移封 に伴ない、宮内氏は加美郡四竈邑 (現色麻町) に移住したと記載されており、本館には都合38 年間居城したことになる。

従って、資料II~IVの宮内因幡とは宮内宗忠を指すものである。宗忠の子、常清も政宗の信頼があつかった。就中、常清には子息がなく、政宗の第九子を嗣子としていることは、宮内氏の家格の高さを示唆するものである。宮内氏は以後、正保元年(1644)、栗原郡武鎗邑に、享保3年(1718)には先祖宗忠と所縁のある宇多郡駒峯邑に移住している。

# VI 考 察

調査によって発見された遺構、遺物等については前述の通りである。本項では、遺構文献・性格について若干の検討を試みることとする。

#### ①遺構

本館跡は土塁と堀を除いては自然地形を余り改変することなく、それを巧みに利用したものである。東側は標高60mを越す丘陵突端部にあり、軍事的遺構の集中する部分と想定されるが、原状は削平・破壊をうけており、明らかではない。残存部では最高所の平場をとり囲むように3段の腰曲輪的な平場がめぐり、下位平場の西縁は土塁等により区画されている。西側には人為的な区画は明らかではないものの、居住地的な色彩の濃厚な西部平場を配したもので、総じて小規模で単純な構造をもつ館跡と云える。

今回の発掘調査では建物跡等の遺構の検出はできなかった。しかし土塁や堀の遺構の大綱は 把握できた。西堀の内側には土塁が存在し、更に、北堀の内側に土塁基底部が残存している。 以上のように、堀と土塁が組み合うことから、裾部を巡る堀の内側にも規模の大小はあるもの の土塁が存在していた可能性は否定できない。同様のことから、中央土塁に沿って空堀が存在 した可能性も強い。このことは等高線や北堀の内側に堀の一部が突き出ていること等によって も裏付けられる。尚、このように城館の周囲を土塁が巡り、その外周を堀が囲繞する類例とし ては、仙台市若林城、富沢館や瀬峰町藤沢館(藤沼:1981)等が知られている。

土塁は主に堀を掘削した土砂で構築されているが、土塁の層序から積土方法に相違が認められた。西土塁は西から東に傾斜するように積土されているのに反し、北土塁基底部では、ほぶ水平に積土されている。西堀や北堀は共に地山を2~2.6mほど掘り下げられていたのだが、館の廃絶後、畑地や水田の造成のため、土塁の一部を崩し、その土砂で堀を埋め戻していることは堀の層序等から想定される。

#### ② 文献

前項で述べたように、館主及び館の使用年代については、御一族である宮内氏の居城として 天文21年より天正19年までの38年間機能したことは明らかである。館の廃築の年代については 全く不詳である。宮内氏が天正19年に加美郡四竈邑へ移住後は資料に全く記載されていないこ とから自然に廃城になったものと考えられる。しかし、立地上の優位等から勘案するとその存 続が38年の短期間だけとは到底考えられない。天正19年以降の下限はありえないとしても、近 隣の内親館や曲竹小屋館が鎌倉時代末期に築城されていたことを考慮すると、宮城館の構築も この時期にまで遡る可能性も考えられる。刈田郡誌の曲竹小屋館の項に「……正中二年(1325)、 會津葦名家臣、下館築城、参年間居住、宮邑貳条城主、宮内掃部介の爲に滅亡」とある。宮村 二条城とは本館の別称であることから、本館の築城も鎌倉時代末期に上限は求められる。しか し、資料の信憑性にやや難があり、その後の空白を埋める資料にも欠けることから積極的には 肯定はできない。翻って、青磁等の出土遺物の年代、及び土塁、空堀等の築城法から考慮する と、明らかに中世の城館であり、室町時代の初期に築城されていた可能性は十分にある。

さて、天文 21 年に宮内氏が対岸の内親館より本館に移住していることは資料Ⅱ、Ⅲで明らかである。その内親館は刈田郡誌によれば、「小城址なれど、天嶮の利を得、南山腹は6階の段状となり、頂上は平坦にして、多數の土を容るるに足るべく、往昔の盛時を偲ぶべし。一帶の白石川は自然の大濠となり、脚下を橈り、刈田盆地を一眸に瞰下すべく、一夫之を守れば、萬夫も開くことを得ざる要害なり」と記されており、土塁と堀で区画されるだけの本館を遙かに上回る天然の要害であった。62 年間居城した内親館より本館に移住した理由は全く不詳であるが、内親館と対比しながら次に宮城館の性格を明らかにしたい。

#### ③ 性格

地理的には刈田郡唯一の式内社、刈田嶺神社のある宮の集落を一望できる丘陵に立地し、宮の集落は白石盆地の北の入口にあり、円田盆地の南からの入口にあたる。更に、対岸の指呼の間に見える内親館と共に街道筋と白石川を扼する要地にある。政治的には、伊達氏の勢力が強固で安定したものになり、典型的な山城の必要性が薄らいだ時期に相当する。経済的には、兵農未分離のこの時期には、平時に周囲に広がる沖積地で水田耕作を行ない、有事には武器をとり籠城できることにあった。更に、日常居住性の点では、内親館は天然の要害・山城であるが故に適地とは云い難い。内親館同様、典型的な山城で知られる山家館跡は尾根が狭く、広大な平場を持ち得ないことから、麓の持長地遺跡(黒川:1980)付近が日常生活の基盤であった。そこより、中世の屋敷跡とされる建物跡6棟が検出され、有事には山家館に拠った可能性があると報告されている。本館跡では、日常居住に適した広大な西部平場を有し、この平場より、仙南仙塩広域水道の送水管埋設工事に伴なう事前の発掘調査(狩野:1981)では中世の頃と想定される掘立柱建物跡1棟と多数のピットが検出され、遺物としては中世陶器が出土している。規模・構造上からは、土塁と堀からなる単純で小規模な城館であり、軍事的色彩が薄く、周囲の沖積地支配と日常の居住性が重視された城館の可能性が強い。防禦性に劣るが、周囲の沖積地支配に主眼をおいた類例としては築館町八沢要害遺跡(小井川:1981)等がある。

## 引用·参考文献

田辺 希績:1792 伊達世臣家譜

: 1970 藩臣須知 宮城県史所収

阿部 恵:1980 飯詰館跡 『東北新幹線遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第62集

飯沼 寅治:1970 蔵王町の歴史

伊藤 玄三:1966 弥生文化の発展と地域性-東北『日本の考古学』第三巻

伊東 信雄:1950 仙台市の古代遺跡『仙台市史三』

刈田郡教育会:1928 刈田郡誌

高橋 守克:1980 新庄館跡『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第65集

黒川 利司:1980 欠・持長地遺跡『東北自動車道遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第71集

小井川和夫:1979 桑折城跡『宮城県文化財発掘調査略報(昭和53年度分)』宮城県文化財調査報告書第57集

小井川和夫:1981 八沢要害遺跡『東北新幹線関係遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第72集

佐々木安彦:1980 地蔵院遺跡『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第65集

志間 泰治:1971 宮城館跡『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(刈田郡蔵王町地区)』宮城県文化財調査報

告書第24集

紫桃 正隆:1972 仙台領内古城館

紫桃正隆他:1977 探訪日本の城

白 石 町:1950 刈田郡詳鑑

白 石 市:1979 白石市史 通史篇

田辺 希賢:1703 伊達治家記録

藤沼 邦彦:1976 宮城県地方の中世陶器窯跡(予察) 『東北歴史資料館研究紀要第二巻』

藤沼 邦彦:1977 宮城県出土の中世陶器について 『東北歴史資料館研究紀要第三巻』

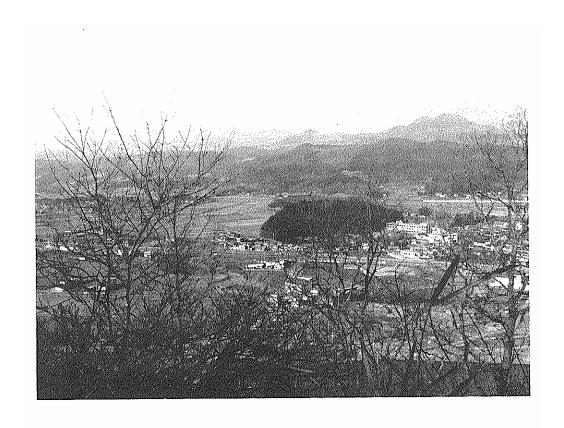
藤沼邦彦他:1978 多高田窯跡調査報告書『三本木町文化財調査報告書』

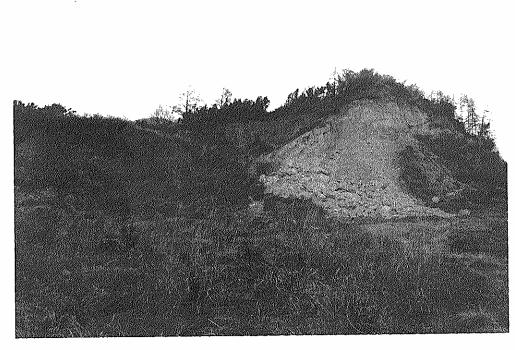
藤沼邦彦他:1981 日本城郭大系3 山形・宮城・福島

宮城県教委:1979 笹谷街道『歴史の道調査報告書』宮城県文化財調査報告書第60集

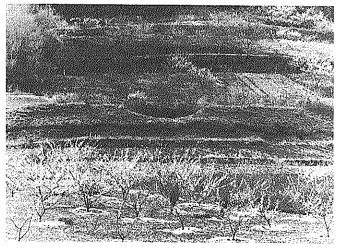
森 頁 喜:1980 湯ノ倉館遺跡『東北自動車道遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第71 集

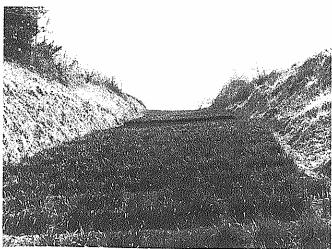
# 写 真 図 版





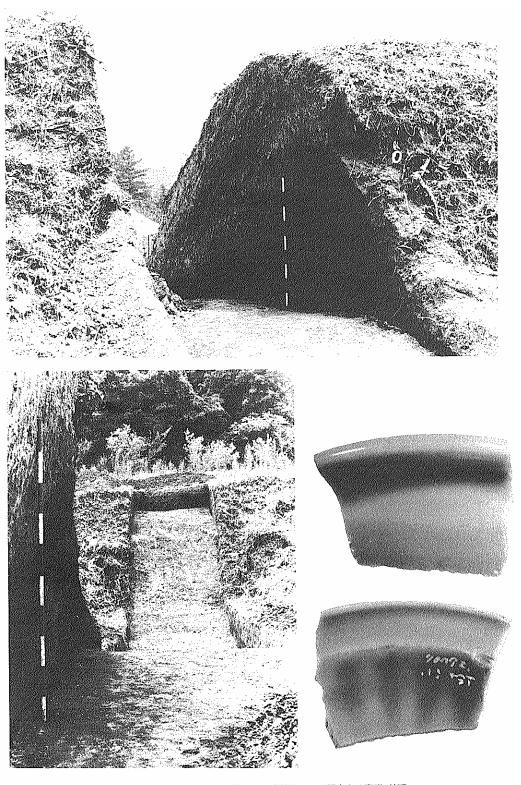
図版 1 上:内親館より宮城館を望む 下:宮城館東端の平場断面





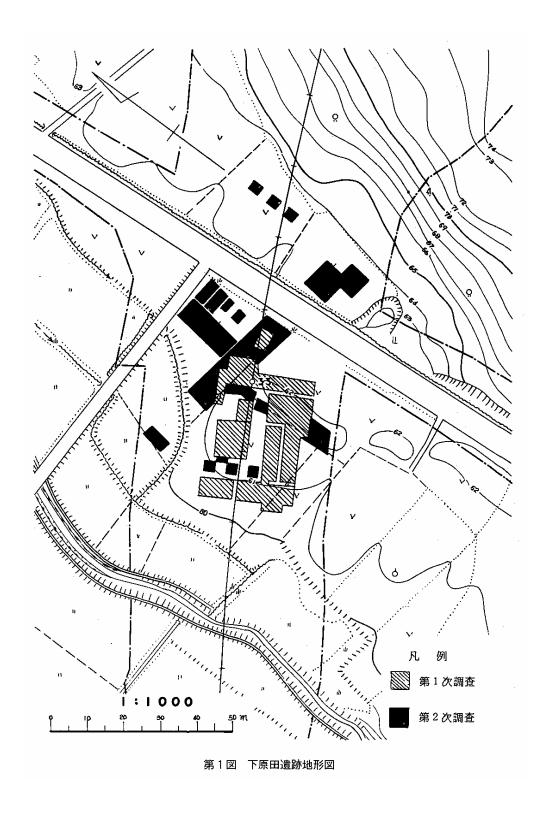


図版 2 宮城館跡 上:内部から西土塁をみる 中:西空堰 下:北空堰(一段低い水田列が堰)



図版 3 上:西土塁断面、空堀から内域をみる 下右上:青磁 外面 下左:西土塁および空堀 下右下:青磁 内面

# (4) 下 原 田 遺 跡



# 下 原 田 遺 跡 (第2次調査)

#### 1 遺跡所在地

宮城県刈田郡蔵王町宮字下原田

#### 2 調査期日

昭和45年4月5日~4月15日

#### 3 調査主体者

宮城県教育委員会 日本道路公団

#### 4 調査担当者

東北学院大学助教授 加藤 孝 宮城県教育庁社会教育課 技術主査 志間泰治

## 5 調査参加者

宮城県教育庁社会教育課藤沼邦彦・白鳥良一

東北学院大学考古学研究部 野崎準・中川良一・渡辺泰伸・佐藤秀穂・伊藤源治・中村光一・結城慎一・加藤光夫・川村正・小玉敏広・熊谷出

宮城教育大学考古学研究会 小井川和夫・土岐山武・千葉宗久

# 6 調査の概要

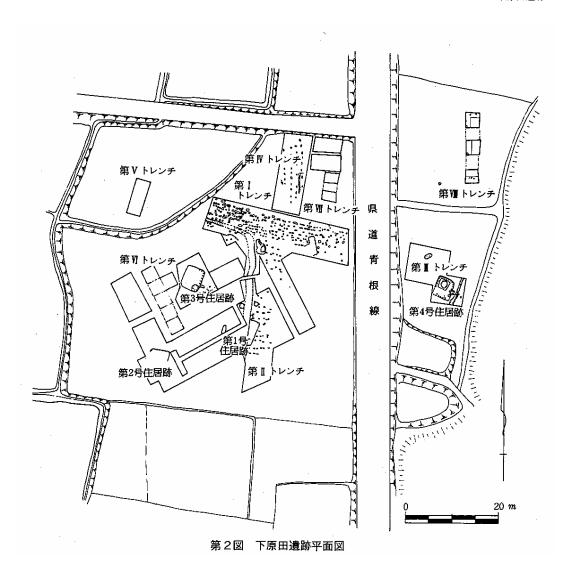
## (1) 遺跡の立地

下原田遺跡は、蔵王山麓に源を発する松川によって形成された河岸段丘上にある(東山:第1図)。この段丘は附近の水田との比高  $3 \sim 4$  m という低位なものである。背後に小丘陵をもち、前面(西)には水田が開け、目前には青麻山の雄姿がそびえたつ。 土器の散布する面積は約  $50 \times 100$  m ある。遺跡の中央をつらぬく県道(宮ー青根間)によって東西に分断される(第1図)。

# (2) 調査経過

第2次調査の目的は、第1次調査の際に検出された柵列状ピット群の確認と未調査区域の遺構検出にあった。

この目的にそって、柵列状ピット群の確認のために、第1次調査の旧トレンチを中心に、第 $I \cdot II \cdot IV \sim VII$ トレンチを、未調査区域の遺構検出のために、第 $III \cdot VIII$ トレンチを設けた(第2図)。 そのほか、第1次調査の際に検出された第3号住居跡の補足調査

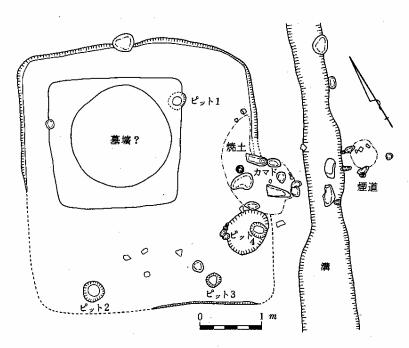


と発掘終了後の工事現場での立会調査とを行なった。

その結果、柵列状ピット群、住居跡、炉跡、焼土などの遺構と土師器、須恵器、鉄製品、炭化米、それに少量の縄文式土器片と石鏃の出土がみられた。以下、各トレンチの 概略を述べる。

#### 第 トレンチ

表土を20~25cm ほど下げると暗褐色土層の中に砂っぽい黒土の落ちこみが多数検出された。このピットの形態は、様々で、方形になるもの、楕円形になるもの、溝状に細長くのびるものなどがあるが、方形に近いものが大部分である。暗褐色土層も落ちこみの黒土も、ともにやわらかく色調も似ているので、ピットの輪郭および壁をおさえるのが



第3図 下原田遺跡第4号住居跡

困難であったものが多い。ピットのなかには木の根が検出されたものもある。しかしピット群としては東西に長くのび、5~6列に並んでいるようにも思われる。遺物は須恵器と土師器の細片が若干出土したにすぎない。

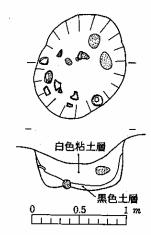
#### 第 トレンチ

表土下20cmほどでローム層に達した。遺構、遺物の発見はない。

#### 第 トレンチ

ピット群の東側の地点に設けた。黒土の覆土が非常に厚く 60cm になる。この下に黒褐色を呈した層があり、楕円形(80×45cm) の炉跡状遺構があらわれ、炭化した木片が出土した。遺物は少なく、土師器片が若干出土したにすぎない。またトレンチの東南隅に溝状の落ちこみがあるので、これを追求するために拡張したところ、竪穴住居跡が1軒検出された。この住居跡を第4号住居跡とする。

第4号住居跡は、遺構確認面としての暗褐色土層と埋土の黒土層との区別が困難で、壁は部分的にしか検出できなかったが、ほぼ東西3.7m×南4.2の隅丸の方形プランを呈すると推定される(第3図、図版1下)。確認できた部分での壁の床からの高さは6cmである。床面は中央部からカマド周辺にかけて焼土が分布し固いが、壁に近づくにつれや



第4図 第3号住居跡内灰溜

わらかくなり検出が困難であった。柱穴と思われるもの(ピット1~3)は3個しか検出されなかった。床面からの深さは各々46cm、28cm、26cm ある。カマドは東壁中央部にあり石組で構成され、煙道をもつ。カマド周辺部には焼土と土器の分布が多かった。煙道は後世の溝のため破壊されていたが、やはり石組のようである。周溝は検出できなかった。カマド右脇には貯蔵穴状のピットがある。

住居跡の床面および埋土からは、土師器の坏(第1類)・甕、 須恵器の甕・長頚壺の破片および鉄鏃、鉄釘の出土があった。

また、住居跡内の西北部に、南北約2.2m×東西2.2m、深さ54cmの方形の掘り方がある。内部には舟底状に白色粘土が貼られているので墓壙の可能性がある。内部から土師器の細片が

若干出土したのみで、時期については不明である。

#### 第 トレンチ

表土下  $30 \, \mathrm{cm}$  で、南北に長くほぼ  $3 \, \mathrm{J}$  のピット群があらわれた。ここでは、ピットの底面まで掘り下げることはせず、半分の深さでとどめた所、大部分のピットに桑根が検出された。更にこの層を掘り下げた所、破壊された石組炉(あるいはカマドかもしれない)の残欠があらわれた。(図版  $2 \, \mathrm{r}$ )住居跡に伴うものであるかどうかは確認できなかった。この周辺から土師器坏(第  $1 \, \mathrm{m}$ )、甕、須恵器甕の破片が出土した。

#### 第 トレンチ

水田下におけるピット群の追求を目的に設定した。遺構の発見はなく、深さ約110cmで段丘礫層に達した。須恵器・土師器の細片が出土したが、高い所から流れ落ちたものと思われる。

#### 第 トレンチ

遺構の発見はなく、縄文式時代前・中期の土器破片がごく少量出土したにすぎない。

#### 第 ・第 トレンチ

両トレンチともに一部に多量の焼土の堆積があったが、住居跡などの遺構に伴うものではなかった。この焼土周辺から土師器・須恵器の出土がみられた。

#### 第3号住居跡の補足調査(第4回、図版2下)

第1次調査で検出された第3号住居跡の東壁にあるカマド右脇のピットを吟味した ところ、焼土、炭化物混りの白色粘土層およびその下の黒色土層埋土がみられ、土師器・ 須恵器・鉄製品が入っていた。貯蔵穴あるいは灰溜めと称されるピットであろう。

以上のほかに、工事中に土器の出土を知って立合調査をした。第WIトレンチの附近である。焼土とピットが検出されたが、住居跡に伴うものであったかどうか吟味できなかったのでわからない。遺物には土師器坏、炭化米および2~3mmの球形の種子がある。(志間泰治、藤沼邦彦)

#### (3) 出土遺物

縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器(図示できるものはない)、赤焼土器・灰釉陶器・石器があるが、このうち土師器、赤焼土器の中には出土地点等が不明なものがあり、遺構に伴うが否か判断するのに困難なものもある。また、概報に掲載されているが、今回ないものもあるので 「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報ー下原田遺跡ー」『宮城県文化財調査報告書第24集1971』もあわせて参照されたい。

#### ① 縄文土器

縄文土器には胎土に繊維を含む土器と含まない土器とがある。全て破片で全体の器形・ 文様構成等には不明な点が多い。また、出土地点も様々でまとまりがない。

#### A 繊維を含む土器

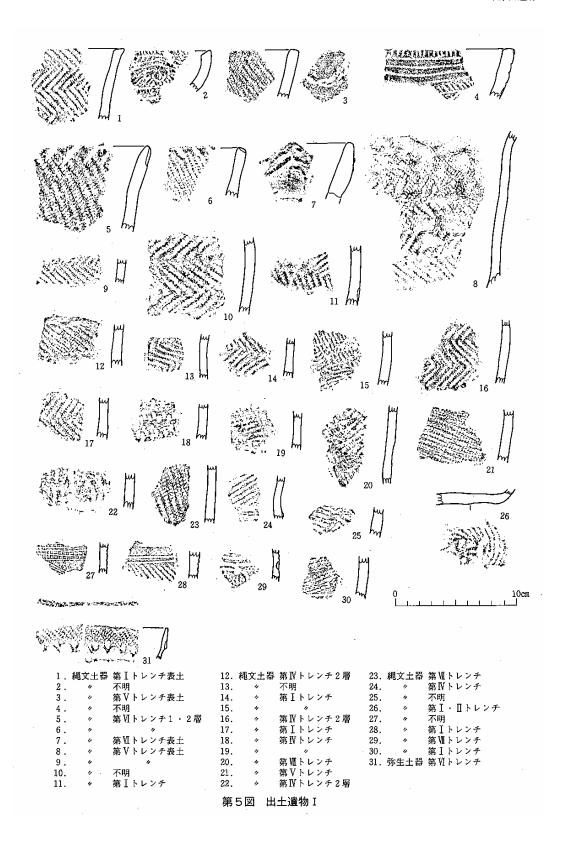
○口縁部資料(第5図1~6)1は外反し、口縁端部は平坦である。結束のない羽状縄文(RL・LR)が施されている。2は内弯するもので撚糸圧痕文が施され、口唇部には刻目がみられるが、器面が摩滅して明確でない。3は斜縄文(RL)が施され、口縁端部は平坦で縄文原体が圧痕されている。また、内面には撚糸圧痕文が施されている。4は撚糸圧痕文が横位に施され、その間に刻目がつけられている。5・6はやや外反するもので斜縄文(RL)が施され、口唇部に刻目がつけられている。

○胴部資料 (第5図8~25) 結束のない羽状縄文 (R L・L R) が施文されているもの (8~18) と無節の羽状縄文 (L・R) が施文されているもの (19・20) 、斜縄文(R L) のもの (21~23) と (L R) のもの (24) 、撚糸文 (L) が施文されているもの(25) とがある。

○底部資料 (第5図26) 底部外面に縄文 (LR) が多方向から施文されている。 これらの土器は縄文時代前期初頭のものと考えられる。

#### B 繊維を含まない土器

口縁部は7のみである。波状口縁を呈し、頚部がくびれる。器厚は厚い。粘土紐貼り付けによる隆起文が施され、それに沿って連続刺突文が施文されている。縄文時代前期後葉頃のものと思われる。その他は胴部破片で、27は細い沈線文が格子状に施文されて



おり、縄文時代早期中葉頃のものと思われる。28 は横位の沈線文と斜位の沈線文が施文されている。縄文時代中期中~後葉頃のものと思われる。29 は縄文(LR)を地文として沈線文が施文されている。縄文時代晩期頃のものと思われる。30 は縄文(LR)を地文として沈線文が施文されている。時期は不明である。

#### ② 弥生土器 (第5図31)

壺形土器の口縁部破片である。やや外傾する。上方向からの刺突による列点文が横位に施文され、その上方には縄文(RL)が施され、下方は無文になっている。口縁端部には縄文原体が圧痕されている。内面はナデ調整である。弥生時代後期の天王山式期のものである。

#### ③ 土師器 (第6図1~13)

坏

製作にロクロを使用している。体部から口縁部にかけてやや丸味をもって外傾するが、 1・4のように口縁部がやや外反するのもある。底部が残存しているものには回転糸切り痕が みられ、体部下端に手持ちヘラケズリの再調整が加えられているもの(1・2・5・7・11)、 体部下端から底部周縁部に手持ちヘラケズリが施されているもの(8)、体部下端に回転 ヘラケズリの再調整が加えられているもの(9)があり、その他は再調整が加えられていない ものである。内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理されている。

#### 雍

製作にロクロを使用している。12 の底部には回転糸切り痕がみられ、器高より口径が大きいもので、口縁部は外反し、端部は上方につまみ出されている。体部外面の下半から底部付近までヘラケズリが施され、内面にはヘラナデ・ナデが施されている。13 は口縁部と体部の一部が残存しているもので、口縁部は外反している。

#### ④ 赤焼土器 (第6図14)

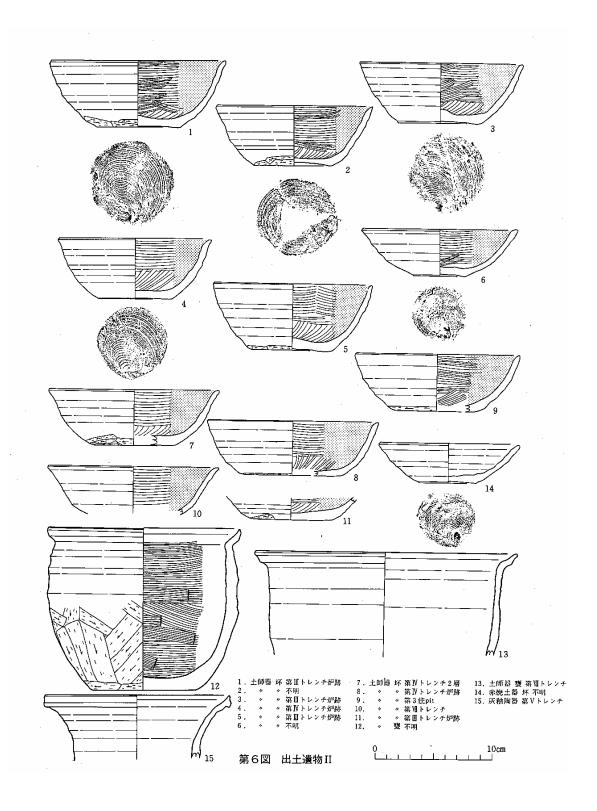
製作にロクロを使用している。器高が低く、口径に比して底径は小さい。体部から口 縁部にかけて直線的に外傾する。底部には回転糸切りの痕跡がみられ、再調整はない。

#### ⑤ 灰釉陶器 (第6図15)

壺の頚部の一部と口縁部が残存している。製作にロクロを使用している。口縁部は外反し、端部は上・下に突き出ている。内面と口縁部外面の一部に灰白色の釉が薄くかけられている。焼成は良好である。

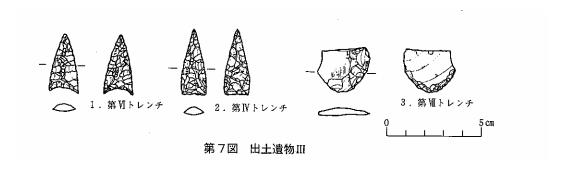
これらの土器は平安時代(表杉ノ入式期)のものと考えられる。

#### ⑥ 石器 (第7図)



石鏃: 2点出土している。1の基部には抉りが入り凹状になっており、2の基部は平坦である。側縁はいずれも曲線的であるが、2の先端部付近は直線的になっている。

不定形の石器:欠損品である。側縁に両面から調整剥離がされている。



#### 7 まとめ

- (1)下原田遺跡は松川が形成した河岸段丘上に立地している。
- (2)調査の結果、4軒の住居跡が発見され、出土遺物から平安時代のものである。
- (3) 出土遺物には縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器等がある。

# 〈引用・参考文献〉

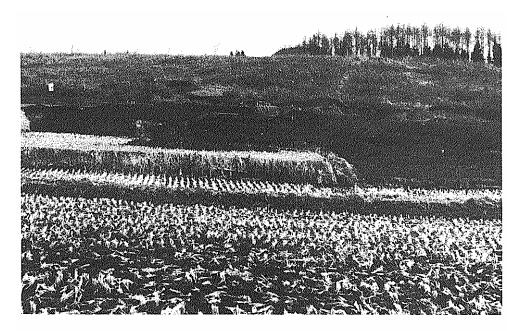
氏家和典(1957):「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯

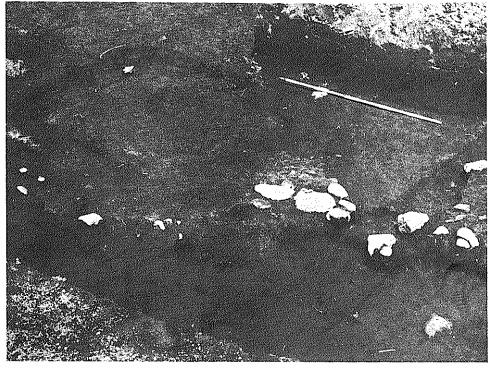
阿部 恵(1980): 「宇賀崎貝塚」宮城県文化財調査報告書第67集

菊地淳一(1981):「欠・持長地遺跡-仙南・仙塩広域水道関係遺跡調査報告書 I - | 宮城県文化財調査

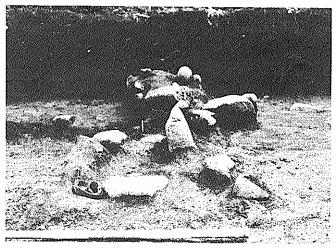
報告書第79集

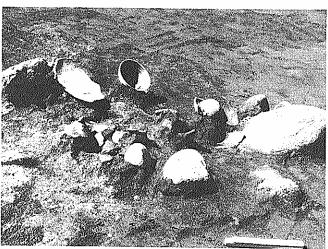
# 写 真 図 版





図版 1 下原田遺跡 上:遺跡全景(西からみる) 下:第4号住居跡







図版 2 下原田遺跡 上:第4号住居カマド付近 中:第4トレンチ炉跡(或はカマド) 下:第3号住居カマド脇ピット内の遺物出土状況

